
地球に戻るためにまずは異世界を

火だるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球に戻るためにまずは異世界を

【Nコード】

N0757Y

【作者名】

火だるま

【あらすじ】

気づいたら異世界にいたハルトは成り行きで狼に育てられることに。

平和に穏便に地球に戻りたかったハルトだが、旅先で様々な事件に巻きこまれていく。

1話 夢？

ここはどこなのだろう。

周りは木々に囲まれて、ハルトが立っている場所だけはいりぬかれた様になっている。

ハルトは、なぜこんな場所にいいのか思い出そうとしたが、分からない。

記憶が曖昧で、自分が最後に見たものがなんだったのかも思い出せない。

だが、脳内で不思議と答えはでている。

ハルトの家の近所にこんな場所はない。

そうなれば残る答えは一つ。

夢だ。

夢と一旦決め付けると、確かにここにいる前に寝ていたなーと都合よく記憶が蘇る。

それにしても、周囲を見回す。随分とリアルな夢だ。

たくさんの木がひしめき、自分の居場所を確保するように押し合っている。

ハルトが立っている場所を除くと、本当に森だった。

ためしに手を伸ばして触れてみれば手に伝わる樹木のざらざらした感触までもあった。

いつも見る夢は何が起っているのか分からないくらい不安定なものにとハルトは首を捻る。

ハルトはこんなに完成度が高い夢を見たのは初めてだと感想をもつ。

「何か、怖いな」

太陽の日差しを遮るように聳え立つ木々に囲まれているこの空間は異質に感じる。

今までの人生を都会で過ごしてきた彼にとって木がたくさんあるこの状態は慣れないものだ。

空を見上げれば太陽があるというのに、光はあまりない。

葉の間から申し訳ない程度にしかない光に体がぶるりと震える。光が差し込みにくい暗い空間だと必要以上に恐怖心が生まれる。

「こ、怖くないからな？」

自分に言い聞かせるためにハルトは独り言を呟いて恐怖を取り除こうとした。

だが、あまり効果はない。

とりあえず、立ち止まってもつまらない。夢が覚めるまで散歩でもしますかと足を動かす。

「……ッ……!!」

遠くから響く叫びが届き、無意識のうちに体が強張る。

人が発したもののようだ。

俺の夢の癖にわりと凝っていると思えば自虐気味に褒める。

夢って確か深層心理とかをあらわすんだよな。

俺の夢だ、可愛い女の子とか出てくるに決まっているとお気楽な考えを浮かべているハルト。

ハルトは、人がいたことにわずかに期待して声の方に向かう。

慣れない森の中を歩くの難しく、何度も転びそうになったがハルトはぎりぎり歩いていく。

夢なんだからこんなところまで細かくしなくてもいいのにと愚痴りながら木の枝のパキパキ音を楽しむ。

木からだらんと情けなく垂れ下がっているつたのようなものに、

より腕に傷が生まれる。

危険なものではなさそうなので放っておく。

どうせ目が覚めたら治るんだからと楽観的に前へ進む。

目的地に近づくことに違和感を覚える。

木が爪のようなものにより挟られている。

それも先程声のした方へ近づくたびに折れた木が目立っていく。
ぞくり。

背筋に嫌な寒気を感じた。

ハルトはこの感覚に覚えがあった。

自転車に乗っていて道を曲がろうとしたときに感じて、慌ててブレーキをかけたときだ。

あの時は自分の勘が的中して猛スピードで車が抜けていったのを覚えている。

進まないほうがいい。

だが、気になってしまう。

慎重に進めば問題はないだろうと腰を屈めてゆっくりと前進。

望まない傷を得た木がさらに増え、おまけに隕石でも落ちたような陥没した地面までもあった。

急速に膨らんでいく、興味と恐怖。

やめておけばいいのにも思いながらも何があるのか気になる。

いきなり、燃えたような臭いが鼻をつく。

今までの自然の良い香りに僅かに焦げ臭さが混じる。

先でキャンプでもしているのだろうか？

ハルトは遠くに自分がいた場所と同じような開けた空間を認め、
そこにいる者たちを見てしまい、足が地面に埋まるような感覚を味わう。

見つければ、殺されるとすぐさまに無事な木の近くで腰を下ろす。
動悸が乱れる。心臓を潰すようにして押さえて木から顔を覗かせる。

さっきみた景色は幻覚じゃない……！

大きな、虎と対峙している人間。

ハルトが初めに聞いた声は人間の悲鳴。

そこらに転がる体の半分を挟られた人の死体にハルトは胃からこみ上げてくる物質を両手で塞ぐ。

声を出してもまずいと強く。

強烈な、血の匂いとカラスに弄繰り回されたあとのごみのようにボロボロになった人だったもの。

挟るような強烈な映像が、脳内に色濃く残り体を震わせる。

なんだよ、あれは……！

夢で見えていいレベルじゃない。

よっぽど精神状態が不安定でなければあんなものは見ない。

自分がそんな状態ではないはずとハルトは再度確認する。

人の死体が転がっている近くでは激しい衝突が繰り広げられている。

魔物とも呼べる馬鹿でかい虎に相対しているのは大柄な男。

大柄な男は丈夫そうな銀色の鎧を身につけ、刀を振るっている。

苦悶の表情で虎の攻撃を紙一重で回避しているが、体には大なり小なりの傷が目立つ。

もう一人細身の身体の男が弓矢を飛ばして虎に攻撃しているがすべて厚い体毛に弾かれている。

虎は、大柄な男が小さく見えてしまうほどの体躯だ。

動物園で見る虎とは大きさが桁外れに違った。

大きな牙に、鉄柱のような頑丈そうで太い四肢。

虎の後方で尻餅について目の中を揺らしているハルトと同年くらい少女がいる。

少女は大きな胸をしていて、普段のハルトならすぐさま声をかけていたが今はそんな状況下に置かれていない。

転がる死体は二つ。

人間側は全部で五人いたようだ。

だが、二人は既にこの世を去っている。

光輝く刀を自身の腕の一部のように扱っている大男が虎と戦っている姿に心から応援の言葉を送る。

男に負けてほしくない。

映画のワンシーンを見ているような気持ちでぐつと手を握る。

もしも、あの男が負けたら、次は俺かもしれない。

そう考え出したら体中からべたべたと嫌な汗がにじみ出る。

刀を巧みに使っていた男が左側から右側へ駆けるように薙いだ。

虎はあっさり避けて、男はにやつと笑う。

ハルトはなんで笑ってるんだと焦りの気持ちで愚痴をもらしていたがすぐに理由が分かった

男は初めから避けられるとわかっていた。

初めから二撃目を入れることに重点を置いていたのだ。

先の攻撃により生まれた死角へ駆け込み、抜けるように腹を斬る。やった！ 我がごとのようにハルトは空気を多分に含んだ拳を胸

の前で構える。

気分は覇氣にしているチームが試合に勝ったときと同じ。

ハルトが顔に笑顔を浮かべていたが、次の瞬間には一転――絶望に変わる。

虎は致命傷には至っていなかった。

攻撃を喰らった部位は虎の中でも一番に頑強な場所で鉄のような堅さの皮にむしろ焦ったのは大男のほうだ。

虎はひっかかったなといわんばかりに顔を大男に向ける。

まるで、わざと一撃を喰らって人間側に希望を持たせたかのようなその顔に、ハルトは身震いする。

虎の放った一撃が大男の腹の肉を裂く。

大男はもうこれ以上戦う余裕はないと自覚していたのか、残りの力をすべてこめたカウンターを放つ。

刀が太陽を打ち負かすほどの光をあげて、虎を襲う。

光の奔流に飲み込まれた、虎はその状態にありながらも大男の顔面に爪を刺した。

なぜ光が生まれたのか分からないが、大男の技は確かに虎にダメージを残した。

虎の顔と体を半分ほどまで斬っていたのだ。

男はハルトが隠れているほうへ顔を向けて満身創痍の体を押さえながらそれでもまだ立っている。

ハルトの覗き見ていた両目が男とかみ合う。

なんとなく、だがハルトはあの人がかうなることを分かっていたのだと思った。

虎が罨を張っているのをすべて予想済みで、仲間を逃がすための時間稼ぎの一撃だったのかもしれない。

かつこいい人だなとハルトは怯えながらも賞賛の念を送る。

虎はさすがに予想外だったのか傷口を押さえながら後ずさるが死ぬほどのダメージではないようだ。

それでも瀕死の状態であるには変わらず、大分ダメージがかい。あと一撃さえ入れられれば大男に軍配があがっていたはずだ。

圧巻な攻撃を放った男を虎は大木のような太い腕で吹き飛ばす。

男は抵抗する力もなくボールのように吹き飛び木にぶつかり止まる。

飛ばされる間際に大男は自分の刀をハルトの近くに投げた。

何回転かしてハルトが手を伸ばしたら届く距離に刺さる。

「く、くるなっ！」

明らかに怯えが混じった声をあげながら弓を射る男。

勝ってもらいたい、最悪虎をひきつけて逃げてくれるので構わない。

もしも、あいつがいなくなったら次は俺なんじゃないかと考える体が竦む。

夢、だと理解していても妙に現実的な木や地面などがさらにハルトに恐怖を与える。

（夢、なのか？）

その疑問はもつともだった。

十六年間生きてきてこんなリアルな夢を見たことがない。

（夢じゃないならなんなんだよ……）

ハルトは首を振る。今は虎から目を離してはいけない。

慌てながらも傷口を的確に狙った男の矢は百発百中とばかりに虎の傷を覆っていくが、虎は意に介さず鈍い足音をあげて悠々と歩く。矢では決定打を出せない。

男はとうとう武器を捨て敵に背を向けて走り出す。

——無謀だ。

虎は走るのが速い。攻撃に回す力よりも走ったりするほうが力の使い方に長けている。

動物の脚力に人間が勝つなんて不可能なのだ。

逃げ出す瞬間を狙っていたのか。

虎は男に飛び掛り背中から押し倒して、鋭い爪で体を研ぐように何度も刻み続ける。

凄惨な光景に目を逸らす。

ハルトは……こみ上げてくる胃液を必死に抑えながら、早く覚めてくれとずっと祈り続ける。

口の中が乾き、体中に不思議な痛みが駆け巡る。

ばりばりと堅いものを噛み砕く音が耳を突き破り、一気に気持ち悪さが最高潮に達したハルトは耳を潰さんばかりに押さえる。

夢が覚める気配はない。

先程頭にちらつと現れた疑問がもう一度心に落ちてくる。

そもそも、夢、なのか？ 夢じゃないならなんなんだ。

誰か教えてくれ俺が納得できる理由を。

だけど、誰も教えることはできない。

（異世界トリップとか？）

自分が納得できる答えを模索している最中でつい先日読んだ本は確かそんな内容だった。

知らぬ間に異世界にいた。

今の自分とびっくりするくらいあてはまる。

初めは小さかった答えは段々と脳を支配していく。

ハルトの状況は、異世界トリップまたはそれに近いなにかなのかもしれない。娯楽でしかありえない非科学的な異世界トリップを受けいれるなんてことは普通はできない。

だが、目の前に見せ付けられている。

夢の線も捨てきれないが、夢などという曖昧なものよりも異世界に迷い込んだというほうが今のハルトには得心できた。

やがて、ばりばり音がなくなる。

ハルトは男がどうなったのか見たくないけど見たいという矛盾した気持ちが生まれて、結局ゆっくりとした動きで男の末路を見た。頭が、なかった。

首から上が食いちぎられて、体は辻斬りにでもやられたような傷があり傷がない場所を探すのが大変なぐらい残酷な光景だった。

体が、震えた。逃げ出したい。ハルトは吐き気がこみ上げるが声を出さないために手で無理やり押さえる。

これは、夢じゃない……！　こんな現実的なものが夢なわけがない。

俺がこんな気味の悪い夢を見るわけがない。

早く逃げると体が悲鳴をあげるが。

足は氷ついたように動かない。

そればかりか首さえも思うように動かず、注視するように虎を見続けてしまう。

虎はハルトを見ていないが、目を離したら殺られるという錯覚に
捉われる。

背中を向けた瞬間ぶっとい身体に潰されて殺される。

先程の男の姿が頭にちらつく。

最後に残った女の子は、腰が抜けてしまったのか、地面にへたり
込み涙を流している。

女の子は可愛い。いつもなら美少女きたー！ と喜ぶハルトだが、
むしろ見なければよかったと後悔している。

女の子は敵うはずがない実力に気圧されて逃げることをあきらめ
たような顔つき。

ハルトは、過去最高なほどに怖かった。それでも美少女を見てさ
つきよりはほんのわずかだが落ち着き、動けないほどではなくなる。
震える足をつねりあげて痛みで感覚を取り戻す。

恐怖は完全に消えることはなく残っていたが、さつきよりも動け
る。

ゆっくりと、足音を立てないように刀を拾い移動を始める。

可愛い女の子を助けるために。

ハルトは、正義のヒーローに憧れたことはあった。だが、所詮憧
れ。

自分はどれだけ頑張ってもそんなものにはなれない。

現実を知り、絶望がたまっていく。

年を重ねることにそんなものに憧れていた自分を恥じるような感
情さえ生まれていたのに。

まさかこんな状況で目の前の子を『助ける』なんて行動をする
は自分で自分が分からなくなる。

目の前の命が消えることを拒み必死に止めようともがいている。

単に美少女だからという下心も三割程度はあった。

虎は、鼻が利かないようだ。耳も大男にやられたのと戦闘による
疲労からか随分聞こえていないようだ。

確認して勝機があると実感し、希望が生まれる。

もう、敵は目の前の女の子しかいないと考えている虎にじわじわと近づく。

ハルトはゆっくりと、だができるかぎりの精一杯で大男が使っていた刀を頭上へ。

ずっしりとした刀で体育以外で運動をすることがないハルトには少々重たい。

それでも頑張れば両手で振り回せるそれを筋肉を目一杯引き締め、穿つように振り下ろす。

虎は、少女を殺そうと腕をあげたがハルトが振るった一撃が止める。

大男が残した一番目立つ傷に吸い込まれるようにしてハルトの刀がヒットする。

虎からは血が噴出され、刀が血を受け止める。

虎は、今までの疲労が一気に現れたのか態勢を崩して地面をのた打ち回る。

今が、チャンスだ！

意気込みハルトは右足を前に踏み込み、追撃とばかりに傷口へ刀を刺す。

「うおおおおおおお！！」

そこからは何も考えずにただただ全力で何回も斬る！ 斬る！

斬る！

手に伝わってくる肉を断つ感触。

できるなら一生関わりたくない感覚に気が狂いそうになるのを必死に押さえて何度も斬る。

傷口ばかりを重点的に斬り続ける。

疲労が腕に溜まる。

振り上げるのが億劫になる。

段々腕が重くなってくる。

それでもやめることはない、できない。
虎が全く動かなくなったのを確認してもやめることはできなかった。

止めてしまえば、虎が動き出しそうな気がしたからだ。

「もう、大丈夫です！」

ハルトの腰に柔らかい感触が伝わる。

狂ったように刀を振っていたハルトはそこでようやく正気を取り戻した。

途中から、ほぼ無意識になってた。

意識が戻ると同時に生き物を殺した感触が手によみがえり、ハルトは刀を手から零して、体を地面に預ける。

空が青かった。

獣と血のあまりよろしくない臭いが気にならないくらいに綺麗だった。

体についた血が洗い落とされるような気がした。

「お前、だいじょうぶ？ 怪れない？」

声はいつもどおり問題はない。

震えた声という格好の悪い出来事はないようだ。

ハルトはさりげなく少女の髪を撫でる。

ハルトに髪を撫でてもらった少女は嬉しそうに目を細める。

女の子は頬を朱色に染めながら、「あなたのおかげです」とハルトに言う。

（可愛いなあ。というかさっき胸があたったんだよね）

思い出してにやにやしそうになる。

さつきまでは悪夢だったが、良い夢に変わった。
いや、そろそろこの現実を受け入れたほうがいいかもしれない。
ハルトははあ、と息を吐き出して最終確認のために頬をつねる。

「やっぱり、夢じゃねえーか……」

異世界だと理解してしまったときだった。

赤く腫れあがっているであろう頬をさすりながら、ハルトはもう一度天を仰ぐ。

空は、地球のそれと変わらず綺麗なものだ。

目を閉じて、どこか満足したような感覚に捉われてゆっくりと目を開けると。

見えるはずの景色が何か、銀色の物に覆われる。

「……」

体を起こして、尻を地面につけたまま後ずさる。

姿を確認した、してしまったハルトの心は絶望に染まる。

（せっかく、助かったのに……）

さつきの虎よりも大きな、全身を灰色に近い毛並みをした狼のようなものがあった。

一難去ってまた一難。不幸は連鎖するのかと感じずにはいられなかった。

2話 サウザンドウルフ

「サウザンドウルフ……！」

女の子が驚愕と絶望を含んだ器用な声を出してで後ずさる。

ハルトも先程の恐怖が甦り、かちかちと歯を鳴らす。

さっき倒した虎と同じくらいの体をした銀色の狼が目の前にいる。逃げなくちゃ、と思うが視界の隅に映る美少女。

背中を向けて逃げるのは難しい。

「にげ、ろ」

必死に三文字の言葉を、うまく機能していない喉を震わせ、搾り出す。

肌に刺さる狼の存在感を感じて、埋められない力の差を感じる。

女の子は、ハルトの言ったことが理解できなかったのか動き出しそうにない。

ハルトはさっきよりも冷静に、しかし声は大きく伝える。

「逃げろってんだよっ！ 早く！」

少女は、それでも動かない。

動けないんだ。体が恐怖に縛り付けられて思うように動けない。

だから、多少恨まれるのを覚悟で少女の足を叩く。

心に罪悪感が走ったが今は助かることが先決だ、手段を選んではいけない。

女の子はそれで正気を取り戻したのか、ハルトの言われたとおり走っていった。

「随分と珍しい格好をした人間だな」

狼が喋ったが、あまり驚きはなかった。

この状況だ。今さら驚くことなんて難しい。

ハルトは手で近くにあるはずの刀を探しながら、会話ができるようなので話し合いを試みることに。

「見逃して、くれないか？」

震える唇を操りしどろもどろに発言する。

「……つまらないから嫌だ」

なんだ、その理由はと怒ってやりたいハルトだが、口を開くことが出来ない。

ハルトの命運は狼が握っている。迂闊なことを口にできない。

狼は、どこか嬉しそうに笑いそして、次には笑い飛ばしてしまいたくなるほどの馬鹿みたいに強い殺気と共に睨んできた。

ぎよろりとした狼の両の目に捉えられたハルトは痺れたかのように体が動かなくなる。

動かそうと思っても、体の所有権すべてを目の前の狼に取られたかのようにピクリとも動かない。

さっきやっていたように痛みでどうにかするレベルじゃない。

完全に飲み込まれてしまった——狼の威圧に。

ただの、威圧に指一本さえも動かない。

このまま放っておいたら目が乾いて涙が止まらなくなるなどハルトは考えていた。

「まぐれ、だったか」

狼は一気に興味が薄れたようにハルトへでかい足を振るう。

狼にしてみたら蚊を叩くようなレベルかもしれないそれを喰らって、ハルトは地面を滑るように転がる。

竦んでいた体はそれで解かれた。

痛い寝ていれば何も出来ずに殺される。

ハルトは跳ね飛ぶように立ち上がり、近くに転がっている刀の鞘と袋のようなものを掴んで逃げる。

走りながら危険な刀を鞘にしまい、ポケットに袋をつっこむ。

鼻から戦うことは考えていない。

虎に勝てたのは弱っていたのと、不意打ちだったから。

二度もまぐれで勝てるわけがない。

「戦いから逃げる、か」

ハルトの逃げ道に狼が回りこむ。

くそ。ハルトは舌打ちをする以外に何も出来ない。

攻撃しても当たるビジョンが浮かばない。避けられて反撃されて死ぬ。

狼がゆらりと動き、ハルトはやけくそにしまった刀を居合いの要領で鞘から抜き放つ。

長年剣を使っていたような鮮麗で、俊敏な抜刀は一寸の狂いもなく狼のわき腹を捉え、えぐる。

速い！

（？ 今の俺がやったのか？）

ハルトは自分でも分からないほどに体が軽くなった。居合いこそ初心者そのものだったが、速さが数段あがり狼でさえついていけないかった。

狼は土煙をあげながら地面を転がる。

目に砂が入らないようにハルトは手で目を覆う。

これじゃあ、追撃をしかけられない。

相手の傷の具合が分からない以上、この土煙が罠なのかどうかも分からない。

突っこんだらやられる可能性がある。

ハルトは刀を持つ手から力を抜く。

——ずきん！

ハルトは、不意に感じた全身の痛みで顔が歪められる。

初めの痛みがきっかけか筋肉が暴れ狂ったような痛みが続いて体を襲う。

ハルトは、やばいと感じながら刀を取りこぼす。

足元に刺さった刀にぞわつとしながらも拾うのはひとまず置いておく。

激痛が止まる。それを皮切りに痛みが引いていく。

数秒後には不思議と痛みは消えた。

体力こそ空っぽに近いが、痛みがなくなったことにより、ハルトは刀を握りなおす。

すると、じつと静電気のような痺れが届いた後に再び体に痛みが復活する。

（刀に何かあるのか？）

ハルトは当たりをつけて、鞘にしまう。

鞘に納まっていたときはこんなことが起きなかった。つまり鞘が鍵になるのでは？ と考えたのだ。

予想通り痛みは消える。

刀に何かがあるのは確定した。刀を掴んで走り出し、後ろを確認する。

思ったよりも深手だったようで狼はまだ、襲ってくる様子はない。一気に畳み掛けるのも一つの手だ。

だが、全力疾走したあのような疲労が残る体では満足に剣も握れそうになかった。

ハルトは無我夢中で走り続けた。

途中何度も転び、それでも休んでいる暇はない。

疲れた体に激励を送りながら、道なき道を進む。

走り続けて、数分。ハルトは気づいたら洞窟のような場所にいた。どうやってここまで来たのか分からないが、ここならすぐに見つけることはないはずだ。

やはり。戦うしかないのだろうか。

そんな考えが浮かぶがすぐに否定するように首を左右にふる。

あれと戦って勝てるとは思えない。

正面きって勝てるとは思えない。

唯一ある可能性は鞘から抜き放ったときの力。

手中に納まっている刀に目を向ける。

一種の呪いの武器か何かかもしれない。使った者の体力と引き換えに身体能力を強化する、とハルトは予想していた。

これを抜いたときの速さで放った斬りなら倒せる可能性はある。

狼が地面を転がっていたのを思い出して、セットとばかりに痛みも想起する。

ただ、すべてあの痛みに耐えられればの話だ。

ハルトは厳しいなと顔をしかめる。

来る前に拾った大男の持ち物に何かないかと漁る。

一撃でモンスターを倒せるような画期的なものがないかと拾ったが、何もない。

そもそもそんなものがあれば大男が使っていただろうなハルトは残念がる。

一応収穫はあった。

ビンに入った赤い液体と同じくビンに入った青いビンが入ってい

る。

ゲームなどで見るような代物だ。回復薬だと、確証はなかったがハルトはもうやけくそ気味にそれを飲み干す。

もしも毒だとしてもあきらめようと割り切っていた。今死ぬか後で死ぬかの瑣末な問題だと自嘲する。

舌が麻痺しそうな苦味が襲ってきた後に体が軽くなったのが分かった。

腕を見ると、傷はない。腹部に感じていた痛みや攻撃したときにできた痛みもかなり緩和されている

これで、一応戦えるだけの体力は取り戻した。狼を倒す、又は逃げる方法を早急に考えねば。

相手は狼であるのだから当然鼻がきく。

ハルトがこうしている今も狼は着々と迫っている。

だから、できる方法を編み出さねばならない。

一、交渉。すでに失敗。

二、逃走。逃げられるのならとくに逃げている。可能性は低い。

三、戦う。勝てるための技はある。可能性は結局低い。

三の、戦うが一番実現が可能そう。

二も可能性はほとんど変わらない。

だが、この森がどれだけの規模なのか分からない、森を抜けたとして狼が追ってこないとも限らないということで三しかできそうには見えない。

今さらながらに可能性の低い賭けだよなとハルトは頭を押さえる。それに、と狼のダメージを思い出す。

一撃は狼にかなりのダメージを与えていた。演技とは思えない。

あと一回、二回同じのが当てられればもしかしたら、万分の一くらいの確率で倒せるはずだと自分を励ますために呟く。

やるしかない。

期待はしない、期待して変な風に緊張したらうまく戦えない。

零の可能性が一になったにすぎない。

それにしても、ハルトは苦笑する。

この数十分で随分と成長したよなと自分に問うていた。
生か死のどちらか一つしかないような状況なら人間かなり賢くなるようだ。

今度からこの状況で勉強すればはかどること間違いのないね。
ふうーと心を落ち着かせるためにハルトはなるべく心に軽い出来事を考えて空気を吐き出す。

「狼は、いない……」

周囲に意識を張り巡らす。気配で気づける達人ではないハルトだがさすがにあのでかさを見逃すはずがない。
安心しきったハルトの独白にしかし絶望の返事が返ってくる。

「何か、対策でもたてられたか？」

すると、小さい、中型犬のような大きさに先程みた色の狼がハルトの横に鎮座していた。

ハルトが驚いていると中型犬はまた元の、理解できないサイズに戻っていた。

落ち着け、落ち着けと言い聞かせて、肺があるだろう位置を手で押さえる。

ハルトは相対して死ぬビジョンしか浮かばない頭に愚痴りながら、

「殺すなら、殺せよ」

ハルトは剣を左手にもったまま両手を開いて少しずつ近づいていく。

最高威力の一撃を最も近い位置からぶつけるために。
いくら速くても距離がある程度あらば外す恐れがあるからだ。

「その目、あきらめた人間の目ではないな」

ハルトの目の奥には色々な感情が渦巻いていた。

すべての感情が混ざり合った結果、ハルトには強い意志の籠った瞳が生まれていた。

ばれちまったかあとハルトは口の中で呟いたが歩むをやめない。交じり合う視線。さっきのような威圧を放ってくる気配はない。

ハルトは気づいていないが狼は確かに威圧している。それに屈しない程度には心に余裕があるのだ。

ハルトは、真正面に立ち狼を睨む。

狼もまた睨み返して、交差する視線。

先に動いたのはハルトだ。

流れるように鞘から剣を抜き、力が漲る。

体を裂いて出てきそうほどの力をハルトは腕と足に集中させ俊足の斬りこみを狼に叩き込む。

手に伝わる斬った感触に、首を捻る。

はらはらと舞う、光を反射させる銀色の毛。

ハルトが捉えたのは狼の体ではなく、毛だったのだ。

研ぎ澄まされた神経は、一つの答えを導き出す。

避けられた。

希望が、期待が、一気に絶望の色に染まる。

手がなくなった。

唯一縋った刀の力は狼に及ぶことはなかった。

それでも攻撃の手をやめなかったのは意地のようだった。

狼はすべてを見切り、かわしていく。

狼は獣としての本性からか、ハルトの力にタイムリミットがあることを悟ったように避け続けた。

ハルトは段々と狼の動きについていけるようになりとうとう刀が狼の腹を挟る。

狼は顔こそ歪めたがまだ、戦えそうだった。

この調子ならいける！

ハルトが確信したその時に――タイムリミットがやってきた。

筋肉が反逆を起こした。

暴れまわる痛みにハルトは手の握力が弱まり、刀が落ちる。

ハルト自身限界なのは分かっていた。

受身など取ることもできずにぶっ倒れる。

目に汗が入り、染みる。開けていることが困難になりながらもハルトは近くに落ちた刀に手を伸ばす。

あと、一撃なんだ。大きな一撃が入ればあいつを倒せるはずなんだ。

あきらめたくない、死にたくない。こんなわけの分からない所で、死んでたまるか。

ハルトの心の中には苛立ちがたまっていく。

なんで、どうして。

（俺が、こんな目に会わなきゃいけないんだよ……）

汗なのか、涙なのか分からない。

理不尽なことに巻き込まれて、そして死ぬ。

理不尽極まりないこの状況にハルトは何もできなかった。

体を休めたい。眠たい。もう、どうでもいいや。

狼に食われて死ぬ。それが決定的。

ハルトはここで寝たら次目が覚めるのは来世か、死後の世界だろうなと自嘲気味な笑みを作りながら目を閉じる。

すべてをあきらめたハルトの意識はそこで途切れたのだ。

「この人間。面白いな……」

ハルトを襲っていた狼が呟く。

狼——サウザンドウルフである狼のレングは自分に傷を負わせたハルトを興味深そうに見ている。

何十秒かそうしていたが、いつまでもぼうとしているわけにもいかない。レングは人型となり、簡単に応急処置をする。

といっても体力がなくなったただけなので、時が癒すのを待つより他に手はない。

レングは元々大男達を自分の糧にしようとしてあの場に行ったのではない。

サウザンドウルフはこの森を支配している関係で治安維持のようなことをしているのだ。

虎——ディバルタイガーはこの森を荒らしていたということでサウザンドウルフのリーダーであるレングが直々に折檻しに向かっている最中にハルトを発見したのだ。

完全に誤解されるタイミングであったが、ハルトにとってレングは救世主のものだったのだ。

ディバルタイガーを倒した人間に興味を持ち、戦闘狂としての血が騒いだレングは相手を威嚇して戦いを申し込んだ。

結果は、十分だった。

小さき戦士をレングは抱えて、自分の村——サウザンドウルフが暮らしている——に向かった。

3話 説明

狼が近づいてくる。

ハルトは逃げようとしたが、体は麻痺したかのように動けない。
狼が大きな腕を振り上げ――。

「はっ！」

ハルトはがばつと体を起こす。

冷や汗が肌をべとつかせる、嫌な感覚を味わってから心臓に手をあてる。

生きている。どくどくと手に伝わってくる脈動を感じてからハルトは周囲を見回す。

まず自分がいる場所はベットだった。

ベットの近くには窓があり、光が差し込んでいるのがわかる。

食事をとるためのテーブルのようなものはあるがキッチンはない。

テーブルに置かれている刀を取り、外へ向かう。

簡素な家だな、と思う。

人が暮らすにはあまりにものが少ない。

こっちの世界では普通なのかもしれない。

外に出ると似たような木の家がいくつもあった。

所々に人がいる。

じゃれあいと表現するには行きすぎな喧嘩紛いの殴り合いや、捕まえたモンスターにかぶりつくものなど。

ハルトはすぐに視線を外した。

ハルトはさっそく近くにいた男に話しかける。

（耳と、尻尾がついてる……）

ここが異世界なのは揺るがない事実となった。

まだ心のどこかで、地球のどこかであってほしいという気持ちがあったのか、ハルトの心には小さいがっかりが発生していた。

「気がついたのか、人間よ。名前は……そういえば聞いていなかったな」

先に声をかけられる。

助けてくれた人かもしれないので丁寧に話そうと心がける。

「俺の名前は――」

フルネームを名乗ろうとしたが、別にいいんじゃないかと思いつ度口を閉じる。

時間にして数秒ほど悩んでから、名前だけ言おうと決めた。

「ハルトです。えーと、あなたは？」

「俺はレングだ。体はもういいのか？」

肩を回したり足を伸ばしたり軽く準備運動のようなことをしながら、

「んー、まあ、無理に動かすと痛いけど。動けないことはないです」

「そうか」

そこで会話に一区切りついたので一番気になっていることを尋ねる。

「でつかい狼に襲われてその後から記憶がないんだけど……。あなたが助けてくれたんですか？」

ハルトの質問はおかしいところはない。

だが、事情をすべて把握しているレングにはあまりにも間抜けな質問に聞こえた。

よってレングは馬鹿笑いをあげる。

ハルトは柔和な笑顔を浮かべながらも頬とこめかみをひくつかせる。

こいつ、殴ってやろうか？ と本気で考えた。

「なるほどな。ハルトは俺の事が分かっているみたいだな」

嬉々とした声をあげてから、本当の姿を見せてやると宣言する。

欲しいおもちゃを貰った子供のような笑顔を見せながら、何かを呟く。

レングの口からもれた声が終わりを告げると、レングの体が光り始める。

（進化でもすんのか？）

ハルトは手で目を光から庇う。

光はそれほど強くはないので目を細めながら様子を確認する。

光が治まったのを手越しに理解したのでゆっくりと目を向けると。

「どうだ？ 何か思い出したか？」

それは本当にいたずらが成功したような無垢な子供の笑顔で。対照的にハルトはひくひくと恐怖を思い出した顔で歪に笑う。レングは二メートルほどだった人間の身長よりも上だけなら小さ

くなっている。

二本足で立てば遥かに今のほうが大きい。
ハルトを襲った狼——目の前にいるのはまさしくそれだった。
ハルトの頭の中には混乱が渦巻く。

「俺を殺すつもりじゃなかったのか？」

ようやく搾り出した言葉は、危険極まりない物だった。

レングはいつでもハルトを殺すことができる力を持っている。

逆にハルトは一撃必殺の技しかない。

見渡せばレングの仲間たちがいるのがわかるこの場で戦いが始まればハルトに勝ち目はない。

「別に。ただ、お前の力が強そうだったから、戦ってみたいなと思っただけだ。元々そこにいたならず者のデИБールタイガーを殺しに行ったただけだ」

「でい、でいばーるたいがー？」

初めて聞く名にハルトは首を捻る。

「お前が倒した虎の名前だ」

レングが戦いの意志がないのを悟ったハルトはふうと安堵の息をつく。

ひとまず、命の心配はしなくていいようだ。

「まさか、人と狼の両方になれるなんてな」

モンスターが人の姿にもなれるのは危ないなとハルトは顎に手を

やる。

人を襲うつもりのモンスターが人間の姿で人間が住む町に侵入すればあっさりと襲うことができちゃう。

「両方の姿を持つものは極端に少ないな。人間はモンスターをランク付けしているが、Sランク近いモンスターではないとほぼ人間の姿をとることはできないな」

生まれつき人間に近い姿をしている種族を除いてな、とレングは付け足す。

ハルトが危惧していることは簡単には起こりそうにはなかった。

「Sランクねえ。俺が倒した虎はいくつか分かるか？」

「確かあいつもSだったな。だが、人型をとったところを見たことはない」

ハルトは大男を思い出す。

あいつはかなりのバケモノだったのだろうな。Sランクにあればどの痛手を負わせたのだから。

あの男がいなければハルトの命はなかった。

感謝してもしきれない。

「……人とモンスター、両方の姿をとれるのはSランクしかない？」

「大体は、そうだな」

「なら、あんたもSランク!？」

気づくのが少し遅いハルトは大声をあげて左足を後ろへひく。
レングもあきれたように片目を瞑る。

「今頃か。人間が定めたランクに興味などないがつまりはそういうことになるな」

ハルトは逃げ出したい気持ちで心がいっぱいになった。
それもおかしくはない。

Sランクのモンスターがうじゃうじゃいるこの集落に人間がぽつりとして一人いるのだ。

ハルトが凛凛していると、レングは朗らかに笑い、それから思い出したとばかりに耳をぴんと伸ばした。

ハルトはアンテナみたいだと思った。

「あの剣は、アニムスブレードか？ それに、ディバールタイガーの魂を吸収したのか？ とにかく、ハルトは随分運がいいのだな」

「アニムスブレード？」

辞書でもない限りわからなそうな単語が溢れたのでハルトはハテナを浮かばせる。

「……何も知らないのか？ おかしな人間だな。アニムスブレードは人間が求めるこの世界最強の剣だろう？」

ハルトは、このまま話を進めることに面倒を感じている。

理由は簡単でこの世界の常識を押し付けられてもさっぱりだからだ。

ただ、異世界から来ました、てへっ。って言って信じてもらえるのだろうかという不安もハルトの胸のうちにはある。

異世界人に対してどんな印象を抱くのか心配材料が豊富で言い出せない。

もしも、異世界人は皆殺しとかそんな世界だったらハルトはこの場で命を失ってしまう「のだから。

言いたくても言えない事実には冷や汗を垂らしながら適当にあわせる。

「別に、俺は戦いは好きじゃないしな」

「なら、なぜあそこにいたんだ？ この森は、奥に進めば進むほど強いモンスターが出ることで知られているのに、なぜこんな奥地にいた？」

「ま、迷子だ」

ハルトは口笛を吹く真似をしながらレングから顔を逸らす。
あきらかに汗が出ていて、嘘だと丸分かりだ。

「みえみえな言い訳だな」

レングがあきれたように肩をすくめるのでハルトは苦笑い。

（嘘とか結構つくから平気だと思ったんだけど……）

確かにハルトは年中嘘を言っている。

といっても日常会話で流される程度の大した問題にならない小さな嘘だけだ。

こういった重要そうな場面に慣れていないハルトはどうしても顔にでてしまう。

「ちゃんとした理由を話せばしばらくはここに置いてやる。仲間にも説明はしてやる」

それは、ハルトにとっては最高の条件だった。

ここが地球ではないと分かった以上、地球に戻る方法を探さねばならない。

ただ、今のハルトには何もない。

森を抜け出す力もなければこの世界の常識——知識もない。

ハルトは無の状態から地球に帰る方法を見つけなければならなくそれはほぼ不可能だった。

「もしも、理由を話さなければ？」

「殺しはしないがこの村からは出て行ってもらう。素性は知れない、理由も分からないような奴をいつまでも追いとくわけにはいかないからな」

「ここつて、奥地、なんだよな？」

さつき、『こんな奥地』とレングが言っていたのが頭に残っていたハルト。

まだ狼の状態であるレングは大きな頭を縦に頷かせる。

ハルトの頭の中には恋愛ゲームのような選択肢が現れる。

生きるか、死ぬかの二択。ハッピーエンドかバッドエンドか。

ここで正直に話すか。何も話さずに森を脱出するか。

前者は先程述べた危険がある。後者は言わずもがな。Sランク級のモンスターとまではいかなくても高いランクのモンスターがでるのは間違いない。

一回くらいなら剣を使って逃れることもできそうだが、体の回復などを考えるとモンスターとのエンカウントはできて一回だけ。

それで森を脱出するのは不可能と思った。

なんだとハルトは笑う。

既に一つしか道はなかった。

話したほうが生き残る可能性は高い。なら、話そう。

決心すると同時に心臓がばくばくと脈打つスピードがあがっていく。

送られる血が速すぎて血管がぶちきれんんじゃないだろうかというほどの加速にハルトは体がふらつきそうになる。

怖いんだ。ここで死ぬかもしれないと考えると。

自分の口ではないかのように開くことができないハルトを、急かさずに待ってくれるレング。

レングはどんな事情を予想しているのだろう。

ふと、そんな考えが生まれる。

（犯罪者とかだろうか？）

気を紛らすために色々と推察していると幾分緊張がほぐれる。

よし、と頬を叩く。

「俺は、この世界じゃないところから来たと思うんだ——」

その発言を皮切りにハルトはこの世界に来る少し前から現時間までの出来事を話し始めた。

4話 半年後

森には川がある。

綺麗な水で、森に住むモンスターたちの水飲み場として重宝されている。

この川を根城にしているモンスターもいるので安全と言い切ることはできないのだが。

今は草食モンスターが水をおいしそうに飲んでいる。

川と草食モンスターを見通せる位置を陣取り、森の木に身を潜める男がいた。

時刻は夕方とあり、中々彼の姿は見つかりにくくなっている。

身長は百七十五ぐらいの男で、体つきは悪くはない。

目に見えるほどの筋肉を持っているわけではないが、しっかりと鍛えられた体は初めてこの森に足を踏み込んだときの男とはまるで違っていた。

顔は可もなく不可もない。髪はぼさぼさで、寝起きだと断言しても通じるほどだ。

男——ハルトはじつくりと耳を澄ませながら、水の音を聞き続ける。

そして、ついにその時が来た。

川の水が噴水のように激しく這い上がり、水を被りながらモンスターが現れる。

リザードマンだ。

顔はトカゲを人間にしましたといった風な見えていて気味の悪いものの。

背丈はハルトの二倍ほどもある。右手に盾を持ち、左手に剣を持っている。

盾は木でできたもので、あまり強固には見えない。

元々盾は命を守るものというよりも身を守るものなので、数回攻

撃に耐えられれば問題はないのだからリザードマンが持っている盾は十分に選択としてはありなのだろう。

剣は太いが随分と切れ味が落ちてるように見える。

武器を扱うようだが、さすがに手入れをするほどの知能はないようだ。

斬りではなく打撃として活躍しそうだ。

草食モンスターを狙って飛び出てきたのだろう。

ハルトは、すぐに飛び出して声をかける。

「この森から出て行くか、この森のルールに従うかどちらか道を選べ」

ハルトは刀を鞘に入れたままモンスターに語りかける。

モンスターの言葉は分からないがこのモンスターはおそらくランクB、A相当であるだろう。

ランクが高い＝知性が高いということだ。

ハルトの言葉は十分に理解できる可能性を持っている。

リザードマンは自分の食事を邪魔されたことに怒り、ぼろぼろの剣を振り回す。

リザードマンの顔は人間、それも一人如きに負けるわけがないとように歪められる。

ハルトはリザードマンが威嚇、挑発していると解釈し、腰についた刀へ手を送る。

「忠告はしたぜ」

リザードマンは左手の剣で前方すべての範囲を巻き込むように薙ぐ。

人間には真似できないリーチとたとえ避けられて、反撃されてもすべてを弾き返す牽強な鱗があるからこそできる自信の一撃。

だが、ハルトにはあまりにも幼稚な一撃に見えた。

ハルトは剣を軽くジャンプして避ける。リザードマンは今までならそれだけで勝利を治めていたのだろう。

リザードマンの顔に動揺が走る。

ハルトは生まれた隙を見逃さない

着地と同時に跳び、鞘に納まったままの刀で突撃。

昔のハルトなら怖くて震えて、逃げることだけしか頭にはなかったはずだ。

だが、半年経った今は違う。

ハルトは両手でしっかりと柄を握り、リザードマンにぶつかる。

リザードマンは野性の本能か、咄嗟に出した盾で防御。

ハルトはお構いなしに突っこみ、盾を破壊するがそこで勢いはなくなる。

盾に刀がひつつき、抜けない。

ハルトは最初からそうなることが分かっていたので、鞘から刀を抜き放つ。

ハルトの体の奥底に眠る力が解放されるような感覚。

アニメスブレードであるハルトがもつ刀特有の奥義、アニメスモード。

アニメスブレードに封印されたモンスターの魂を解放し、体に身につけることにより様々な能力を人間離れさせる技。

これにより、今のハルトの身体能力はレングでも手こずるほどまでに跳ね上がる。

リザードマンは、急にまとっていた空気が変わり恐れる。

恐れから、愚行な攻撃をする。

先程と同じ薙ぎ払い。

既に意味のないそれをハルトは、身にまとうディバールタイガーの魂を操り受け止める。

アニメスモードはただ単に身体能力を強化させるものではない。封印されたモンスターの魂を操り、攻守に参加させることができる。

今のハルトにダメージを与えるには、ディバルタイガーに勝てるほどの力が必要なのだ。

リザードマンは突然動かなくなった己の剣に絶望は最高潮へ。魂の存在はハルトにしか見えない。敵から見れば不可視の攻撃なのだ。

おまけにハルトは自由に動ける。

走ることはいらないで、リザードマンの目の前に移動。

動かない剣に気をとられすぎていたリザードマンにはハルトが急に目の前に現れたように見えた。

「あばよっ！」

左から右へ、袈裟斬り。

リザードマンの鱗を紙のようにあっさりと斬り、血とご対面。

ハルトはぶっ倒れたリザードマンの魔石をくりぬき、鞘を取りに戻る。

今のハルトは初めに比べれば大分長い時間アニメスモードになれるが、無駄に体力の消費はしたくない。

盾から零れた鞘を拾い上げ自身の前で鞘にしまう。

体からは気が抜けるような感覚が現れアニメスモードが終わったのが分かる。

武器を腰に戻してから、リザードマンの方へ振り向くとちょうど体が消えていた。

モンスターは死んでも体が消えることはない。

モンスターの体が消えるのは魔石を奪われてからだ。

魔石はモンスターの心臓のようなものだ。

だが、魔石自体に魔力が流れている。魔力が消えるまでは体が消

滅することはない。

モンスターの肉を食べたければ、魔石を取らずに肉を切り落とせばいい。

一度魔石から離れた肉は何の影響もない。ただし、魔力はないが魔石を失った体もすぐに消え始めることはない。

魔石が切り離される直前に流された魔力が消えるまでは体は残る。といってもすぐに消えるが。

後に残ったのは、魔石とは関係のない、一生魔力の尽きることのない部位——素材だ。

リザードマンの爪、リザードマンの牙、リザードマンの鱗、それに大きめの魔石。

魔石は魔力こそ失ったが、魔力を蓄える力は残っている。

魔石には様々な種類がある。

例えば、光魔石などは魔力を溜めて発動させると光を放つことが出来る。

寿命こそあるが、魔石はこの世界を支える貴重な物なのだ。

魔石は様々なものに使うことができるので、取っておいて損はない。

素材をサウザンドウルフの村で渡された、バックパックに入れていく。

バックパックとはリュックサックのようなもの。

ただ、魔石により改良されていて、荷物を一定量まで四次元の如く入れていける。

限界を超えると重くなっていくが、ハルトが借りたバックパックは大体二十近くは入るので問題ない。

種類で二十なので、一つの素材ならマックス二十まで入る。

見た目はポケットに入る程度の箱なのでがさばることはない。

一体倒しただけだったが中々優秀な個体だったおかげか大量の素材が手に入った。

（試験は無事終了だな）

最近森の中間付近——ハルトが異世界召喚されたこの森は三つの部分に分けられて中間地点はB、Cランク相当の魔物が住んでいる——で他所の集落からきたリザードマンが暴れていると他のモンスターからサウザンドウルフにどうにかしてくれと依頼があった。

その討伐に抜擢されたのがハルトで卒業試験を兼ねていた。

少し、回想まがいのことをすると。

あの日。

異世界召喚された次の日にレングに打ち明けた事実は「ふーん、で。だからどーしたん？」見たいな軽いノリで流された。

ちよつといらつときたけど勝手に不安がっていたハルトが悪いので怒りは抑えた。

ハルトは元の世界に戻るため——帰る方法を見つけるために他の大きな都市とかに行きたいとレングに言うと、今のお前には無理だと宣告される。

人がいる町に着く前にモンスターの餌になると冗談ではなく本気の顔で言われた。

それは分かっているから人が住む場所まで送って欲しいと頼んだら、たとえたどり着けたとしてもこの世界では生きていけないと告げられる。

じゃあどうすればいいんだとなり、レングが生き方を教えてやるという、レングに戦い方を教えてもらい、この世界の基本的な知識などを教えてもらい、今にいたる。

卒業試験がこのモンスターの討伐ということだ。

話し合いでけりをつけられるのが最適だったらしいがまだハルトの威圧程度じゃ相手の動きを封じることができない。

でも、とハルトは満足する。

今の俺には力があるんだよな、これでやっと帰るための旅に出ら

れる。

村に戻ると既にハルトの旅立ちの準備が整っていた。

夕方から夜に変わったからかキャンプファイヤーも準備されている。

ハルトが討伐して帰ってくるとレングが信じていたらしい。

ハルトは自分を信用してくれているレングの姿を認める目頭が熱くなるのを感じた。

信用されている、人——モンスターだけど——の温かみは素直にハルトの心を和ませる。

ほとんど準備は終わっていたのか、レングはハルトをつれて即席の壇上のような場所へつれていく。

マイクなどは使わないがレングの声は大きい。ハルトのために集まったモンスターたちへと声をかける。

「さてさて、素材はお前の今後の生活に役立ててもらおうとして乾杯だな」

レングが片手をあげると他の部族——モンスター仲間のようなものだ——の人がそれぞれの飲み物を持ち上げて叫ぶ。

近所迷惑になるレベルだが、ここはモンスターが住む無法地帯のようなものだ。

近モンスター迷惑にはなるが問題はない。

ハルトはそそくさとレングから離れる。

そして辺りを見回す。

ゴブリン、コボルト、スライムなどの低ランク（のものから、ブラックドラゴン、ベ、ベヒモスまでいるぞ。

モンスターたちにはランクがある。

ランクはF、E、D、C、B、A、Sの七つで分けられている。

ゴブリン E。コボルト F。スライム E。

ブラックドラゴンAランク、ベヒモスSランクという面々だ。

ゴブリンやコボルトは見た目は人間のような姿で物を教えれば結構すぐにできるという賢さ——何も習わなければ物凄く知能は低い——を持っている。

スライムは丸い緑色の水で黄色い目が二つある以外は特徴はない。ブラックドラゴンは人の姿をとっている。

肌は褐色で髪は黒。瞳は茶色の女の子だ。胸もそこそこある、かなりの美人だ。

ハルトは少々苦手だ。

ベヘモスは長身の男で額から角が生えている。

筋肉むきむきでハルトが何度もぼこされている相手だ。

ベヘモスもハルトは苦手だ。

顔を見るたび「戦おうぜ！」と言ってくるからだ。

ハルトが親しい種族はそれぐらいだが、他にもまだいる。

集まっているやつらのうち半分近くはバケモノレベルだ。

サウザンドウルフの一声で今いるモンスターが集まるのだ。

もしも人を襲う意志を持ち、人が住んでいる場所に攻め込めば非力な人などたちまちのうちに惨殺されるのが目に浮かぶ。

人間がモンスターに恐怖するのも分かる。

ハルトもモンスターに対しては畏怖があるが、この場に集まっている人たちは違う。

ハルトはとりあえず知り合いの種族にだけは挨拶をしようとまずはゴブリンとコボルトの元へと向かう。

ゴブリンとコボルトは三十ほどいて、それぞれリーダーがハルト

の前へ。

「まじ、兄貴かけえっす！」

ゴブリン、コボルトの尊敬の言葉を受けてハルトはちょっと胸を張ってみせる。

するとゴブリンとコボルトはさらに目を輝かせた。
ちなみにハルトはリングとの訓練の合間に二種族に言葉を教えていた。

一週間程度で話せるようになったのは度肝を抜かれた。
さらに、近くにいたスライムもやってくる。

「すらーすらすらすらー！」

スライムは、言葉を教えたが理解されることはなかった。
よって何を言っているのかハルトには分からない。ただ、なんとなく褒められているんだろうなとハルトは思った。

ちなみにリングはほとんどすべてのモンスターの言葉が分かるので、スライムのも分かる。

もっともリングはハルトを放って酒を飲んでいるが。

（あいつが一番楽しんでるだろ）

ハルトはだからこそリングから離れたのだが。

油断したら酒を飲まされてしまう。

できれば二十になるまでは飲みたくはないからだ。

「久しぶり。これ、あげる」

ブラックドラゴンはそういうと、腰についているバックパックか

ら何かを取り出す。

それは、おにぎりだ。

この世界でも問題なく米はある。

ブラックドラゴン定期的に米料理を届けてくれる。

その点はハルトも素直に感謝している。

「ありがとな」

「お礼はいいから。私と子供を作ってくれるだけで……」

ブラックドラゴンは頬に手をやって体をくねらせる。

わずかに頬を染めているがハルトからは見えない。

ハルトは何か黒い願いを言っているような気がしたので流して逃げることにした。

（なんでこいつはあんなに構ってくるのだろうか？）

ハルトは改めて考えるが答えは見つからない。

「よお、久しぶりだな。殺りあおうぜ！」

勝気なベヒモスが人間の姿で肩を組んでくる。

相変わらずでかいし筋肉により左耳が潰されて痛い。

ハルトはベヒモスの喧嘩早い性格は嫌いだが、それ以外の点では男友達ということでレングの次ぐらいに気を許せる人物だ。

「……」

こいつが喧嘩をふっかけてきたら無視するのが最良だということ
をハルトは既に学んでいる。

下手に言い合っていると訳のわからん約束をこじつけようとするのだ。

そんな知り合いにあってたりして時間を潰す。

気づけば祭りも終わりに近づいていた、レングが初めにあがっていた壇上にふたたび上る。

「ハルトは俺の適当とも言えるスパルタを乗り越えて、無事に半年の訓練を終了した。そして今、旅に出るそうなので、ハルトを見送る祭りを開いたわけだ。みんな楽しんでくれたか？」

『おおおおおおお！！』

「ハルト、何か言いたいことあるか？」

レングが振ってきたので、ハルトはこくりと頷く。

「みんな、ありがとな。ええと、すごい嬉しい」

声はレングに比べれば小さい。

それでもハルトは精一杯にいった。

すると、様々な種族が自分の言語で何かを叫び返してくれた。

言葉は分からなくても祝福してくれていると感じて心に嬉しさがこみ上げてくる。

異世界でも、俺の事を大切に思ってくれている人がいる。

この人たちと別れるのはつらいけど……。

ハルトは同時に地球を思い出す。

やはり帰りたいという思いのほろが大きかった。

何かがあるわけではないが、なんとなく、生まれた場所だから。

5話 旅立ちの日

祭りのような騒ぎが終わり、夜ブラックドラゴンに襲われそうになりながらもなんとか逃げた。

そして、朝。

リングに案内してもらいながら森の外まで向かう。

「俺達はお前に何も送る物はない」

「別に。そもそも俺はみんなにせびれるような身分じゃないぜ？
というか俺を養ってくれたんだ、むしろ俺が何かを送りたいぐらいだ」

何かがあるわけじゃないけどねと付けたず。

「そうか」

最後の会話になるかもしれない。

地球に帰る方法を見つけて地球に戻れば、そしたら二度と会うことがない二人。

「まあ、今のお前ならよっぽどな敵じゃなければ死にはしないな」

「まあな。あんたの馬鹿みたいな鍛え方のおかげでね」

「感謝しているのか？」

苦笑するリングにハルトはにこやかな顔で、

「当たり前」

とぼとぼと歩いていく。

少しでも長くレングと話がしたかったハルトは無意識のうちに歩みを緩めていた。

ハルトはこの先一人で大きなこの異世界を旅して、自分の目的を果さなければならぬ。

一度はこの森で一生を終えることも考えた。だけど、それは駄目な気がした。

やはり地球に帰りたい。

「もうすぐだな」

レングの声でハルトは顔をあげる。

森の出口と証明する荒野が広がっているのが見えた。

この人は、ハルトの父親みたいなものだった。

厳しく優しく鍛えてくれたレングに父に似たような思いが生まれていた。

だからこそか、ハルトは親である彼に縋っていたかった。

毎日、この人の言った修行を。どこを鍛えればより強くなれるのか、道を標してくれた。

迷うことなく、ハルトは前に進んでいった。

この先は誰も教えてくれない。自分で考えなければいけない。

自分で考えて、行動して前に進まなければいけない。

何か失敗しても庇ってくれる人はいない。戻ることのできない旅がもう間近に迫っている。

森を抜けた。

眩しい光が入ってくることはない。

「旅出にしては随分と暗いな」

空は暗い。

太陽が雲に隠されているからだ。

肌を殴るような突風がハルトの身体を吹き飛ばそうとする。まるで、ハルトのこれからを示すように自然は荒れている。

「暗いのは、こっちもだな」

レングはハルトの方へ顔を向けてからかうような口ぶりだ。ハルトは「なにがだよ」と口を尖らせてそっぽを向く。

「俺はもう行くからな。じゃーな」

駄目だ。もつとしつかりと伝えなければ。

ハルトの心の中ではたくさんの感謝の言葉があつたが、口に出すのは難しかった。

でも、心は栓をしたようにこれ以上の言葉を生み出さない。

とぼとぼと歩き出したハルトの背に声がかかる。

「ハルト」

呼びかけた声は低く、しぶい。突き放すような、威圧するような声と感じる者もいるがハルトには温かみのあるものに感じていた。振り返る。

「この先、お前に様々な困難が待ち受けているかもしれない。俺はそんなお前を助けることはできない。そして、失敗しても責任をとることはできない」

説教じみた物言いにハルトは苛立ちを含ませて顔を向ける。

そんなことは分かっている。
だからこそ悩んでいるんだと目に込めて睨む。

「分かってるよ」

言われなくても分かっていた。

大人になるとはそういうことなんだと思う。

責任を問われるもの。責任を背負うもの。

ハルトは年齢的にはまだ十六歳だから全然大人ではない。

ここでハルトが言っているのは精神的なことだ。

「そんなお前に言えることは希望を持て。そしてそれを実現するために自分の意志を曲げるな」

「自分の、意志？」

「そうだ。お前は人の意志や考えに流されやすい性格だからな」

自覚している。というか地球に住む半分近い人間がそうなんじゃないかとハルトは思う。

周りの意見に合わせておけば何も起きない。

自分の意見を押し通せるのは一部の人間だけだって知っているのだハルトは。

それが自分じゃないことも。

「お前の故郷。確かチキユウだったか。そこに帰るために意志を貫き通せ」

「もしも——」

ハルトは彼の生き方に嫉妬している。

自分の意志を貫き通すことがどれだけ難しいのか、そんなの考え
たって分かる。

周りを納得させるだけの頭脳と生まれもつてのカリスマ性がなければ不可能だ。

リングはサウザンドウルフを纏めるリーダーだから理想のような
ことが言えるんだ。

一般人に近い存在のハルトには真似しようにもできないものだった。

「もしも、意志を貫き通して、その代償が大きなものだったら？
命とか」

人は誰もが自分が一番大切だとハルトは考えている。

それはモンスターにもあてはまらなと思う。

リングはハルトの嫌らしい質問に真面目な顔つきを崩さずに答えた。

「生き物は自分が生きるために他の生き物を喰らう。だから、俺は
生き物は自分が生きるためになら何でもするだろう。だがな、お前
は違った」

話をはぐらかされたような気がしたがそれよりも興味が引かれた
言葉があった。

「俺が……？」

「初めて会ったときだ。ディバルタイガーに襲われた少女を助けた。
お前は自分の命を危険にしてまで少女を助けるために戦った」

「違う！ あれは……！」

（なんで、俺は否定なんかしてるんだ？）

褒められたんだから、いつもみたいに胸を張ればいい。自分の意見など奥にしまいこんで相槌を打っておけばいい。

それが利口な生き方。

「お前は、誰かの上に立つことのできる人間だ。自分の意志をしつかりと持っている」

「俺はそんなに立派じゃない」

言い負かされた気分でハルトは地面に目を向けながら答える。

なにかが、胸の中でモヤモヤしている。

聞きたくないことを聞かされるような、嫌な寒気が背筋を撫でる。

「ああ、そうだ立派じゃない。でも、人を纏められる。その力は後天的に身につけることが難しい物だ」

「俺には、そんな力はない………いらない！ 刀の力だっていらないんだよっ！」

過ぎた力だと思ってる。でも手放すことができない。

生きていくためにはあの刀なしでは無理だと頭のどこかが告げている。

「力を持てば何かをしなきゃいけないだろっ！ 俺はただ、地球に帰りたいだけだ！」

そんな特別にはなりたくない！

ハルトは面倒なことが起きるのは嫌だった。
臆病者だと言われてもいい。

「知っている。だから、お前は意志を貫き通せと言っているんだ」

「つまり……何がいたいんだよ」

「周りの者を見捨てる覚悟をしる。じゃなければお前は自分の意志を貫くことはできないどころかこの世界で死ぬだろうな」

そんなこと……余裕だ。

と、言いたかった。でもハルトは言えない。口は結び付けられたかのように堅牢に開こうとしない。

「お前は優しいんだ。だから、色々な民から愛される。現に昨日の祝いを見ただろう？ 様々な種族がお前のことを心から祝った。来たくなければ無理して来なくてもいいと伝えてあるのにほとんどの種族が来た」

「……困ってる人を見捨てろって言いたいんだな」

「極端に言っならな」

つまり、百人困ってる人がいたら半分くらいは無視しろと言いたいのだろうとハルトは解釈する。

それなら、問題はないと思う。

ハルトは正義のヒーローじゃないし、勇者でも何でもないのだから。

「随分とつまらないことで時間を潰したぜ」

ハルトの独り言に近い呟きにレングはにこっと笑ってみせる。

「もしも、困ったら俺のところに戻って来い。力になってやる」

ハルトは……こみ上げてくる嬉しさからくる涙を抑えきれなくなってきた。

今までの言葉もすべてハルトを思っていたのだったのは分かっている。

それが余計にハルトの涙腺を攻撃している。

泣いている所を見せるのは嫌だったので顔を背けて歩き出そうとする。

「元気だな」

レングは最後に見送りの言葉を投げってくる。

ハルトは、何も返さずに行こうとしたが、足を止める。

（いいのか？）

今言わなきゃ後悔する。

それが分かっていたから、振り返りハルトは声をあげる。

「ありが、とう。今まで面倒見てくれて。右も左も分からない俺の言うことを信じて村に置いてくれて、ありがとう」

レングに向き直り勢いよく頭を下げる。

目からこぼれる涙を見られるのは嫌だったので、下を向いたままだ。

地面が少しずつ湿っていくのをレンジは何も言わずに、そして森の中へと戻っていったのを足音で把握した。

これから、一人、か。

ハルトはそう考えると心に穴が開いたような、冷たい風が吹き荒れた。

6話 ドラゴン

レングと別れたハルトは、なんだか力が入らずフィールドにいるのも忘れて座り込んでしまう。

周囲を見回し、誰もいないことを確認してふたたび落胆する。
これからどうしようか、今考えても意味のないことが頭を巡る。

（怖いな）

ハルトは確かに戦闘技術だけならモンスターに引けをとらないかもしれない。

だからモンスターが怖くて旅ができないとかそういった心配はないが……。

一人だということを考えると怖い。

夜までに人がいる場所に着けるだろうか。

そこに行けたとして地球に帰る方法は見つかるだろうか。

考えただけで不安の種が芽生えていく。

そして、もつとも恐れているのは――。

今まで、一人で生きたことがない。

自分の意志を他人に表明したことがない。

周りに流されるままに生きてきた。周りに勧められるがままに生きてきた。

自分の考えをもっていなかったんだ。

だけど、今回は自分の考えを持つしかない。

ハルトには地球に帰りたい理由がある。

友達、家族、まだ見ぬ彼女。

それに頑張って入った高校生活もまだ一ヶ月程度しか味わいない。

苦労して入ったんだ、精一杯楽しんでやる。

ゲームとかもクリアしてないものがたくさんあるんだよねあ。

とにかく楽しいことをハルトは考え続けた。

しばらくそんなことをしていると、気持ちも楽になってくる。

同時にホームシックみたいなものにもなったが……前に進めそうだからハルトは気にしないことにする。

立ち上がり、しばらく適当に歩く。

この世界の道は草が刈ってあればそこが道なのだ。

たいてい馬車が通れるような大きなので見つけるのは簡単だった。

地面が見えている——この世界の人から見れば舗装されている——部分に沿って歩いていく。

道を辿れば必ずどこかの町、村につける。

ハルトはしばらく歩いていたが何か乗り物がほしいと思い始める。延々と続く道。

遠くでウルフが群れをなして走っていくのが見える。

空には小さいドラゴンが飛んでいるのも視認できる。

景色がいいので遠くまで見えてしまうのだ。

全く街が見えることはない。

いつ着くか分からない。車、とまでは行かなくても自転車はほしい。

地球にいた頃は体力が皆無に等しいくらいになかったハルトだが、訓練のかいあって何キロ歩いても疲れない自信がある。

自信はあっても歩いていきたいと思えるわけではない。

途中でモンスターでも捕まえて乗り物になってくれるように交渉できないものかとハルトは考える。

ハルトは長くモンスターと共にいたせいか簡単になら話すことができる。

といっても、相手の言い分は感覚的にしか分からないので話す、とは少し違うが。

「なんかつまらん」

思っていたよりも何もない。モンスターが襲ってくることはないし、盗賊が襲ってくることもない。

つまらん。何か起きればいいとは思わないが何も起こらないのはそれはそれでつまらない。

欲ぶかいなあ、俺と愚痴る。

歩きなれてくるとほとんど景色が変わらない道のりはテンションが下がるだけ。

肉体的には平気でも精神的には結構くるものがある。

目に頼っていても心がもちそうにないので目を半分閉じる。

耳を使えば多少は感じるものが変わるかもしれないと思ったからだ。

遠くでモンスターの遠吠えのようなものも聞こえる。

声の方に行けばモンスターがいる。足にするには十分だが……。

目を開けて広々とした平野を見渡すが、目が届く場所にはいない。所々木があるせいで見えない場所もあるが声が遠い。

近くにモンスターいないかな。

希望とは裏腹に一体も見当たらない。

……………。

大体一時間ほどが経った。

ハルトは自分がついているのかついていないのか分からなくなっていた。

普通、事件の一つとか起きてもいいよね？

可愛い女の子の一人とかがピンチに陥っているのが普通じゃない

の？

俺が颯爽と駆けつけてそこから始まる恋とかあるんじゃないの？
ハルトは地球の娯楽の影響を強く受けていた。

こつちの世界では人とは深く関わらないようにするつもりだけど、
深く関わると元の世界には帰りづらくなっちゃうからね。

ハルトのイライラ度はマックス。疲労もわずかにだが溜まってき
た。

人っ子一人いない。モンスターさえ、一体もない。

ここらへん何者かによって一掃されてるんじゃないだろうかと勘
ぐり始める。

そんな懷疑心を持ってもおかしくないほどに静寂している。

今日はきつと厄日だ。

誰が今日旅に出るなんて決めたんだよ。

ぶつぶつとハルトは胸奥で文句をたれていると。

「グオウウウウウツツ!!」

地を震えさせるけたたましい壱声が身体を突き抜ける。

突然の音に警戒して見回すが、発信源らしきモノはいない。
轟音のわりには何も無い。

「事件発生か。相手はモンスターと……人か？」

久しぶりの人に出会えるかもしれないという気持ちからせつせと
音が聞こえたほうへ身体を動かす。

いつでも戦闘が始まってもいいように刀を腰から外して手に持っ
た。

野原の一角。緑があり、水溜りのようなものがある。

オアシスみたいだなとハルトは思った。

ハルトはひっそりと気づかれないように近くに生えている木の後ろに隠れる。

ドラゴンと対峙している一人の女性がいた。

年はハルトと同じ。

そのわりには大人びた空気を纏っている。

金色の腰に届くほどに長く綺麗な髪は攻撃を受けたからかボサボサだがしっかりとおめかししたらかなりの美人だ。

鋭い眼光の中にはエメラルドを凌駕するほどに鮮やかな緑色の意志の強さを伝えてくる瞳がある。

背丈は女性の平均くらいよりも少し高いモデル体型だ。

若干胸は残念だが、見た目だけで多くの男が彼女に見とれるだろう容姿を持った少女は剣を支えに何とか立っていた。

不釣り合いな銀色と青を混ぜたような色合いの鎧を身に着けている。そこから覗く、大気に融合してしまいそうなほどに細い四肢は人形を彷彿させる。

身体には目立って傷はないがかすり傷のようなものがいくつかにきている。

ドラゴンは悠然とした足取りで、げっげっげっげと負け犬臭のする声をあげながら女性に近づいていく。

女性はくつと顔を歪める。苦痛に耐えるような表情だ。

見た目は酷くはないが、重いダメージを喰らっているようだ。それでも少女の目には闘志が籠っている。

中々不利な状況ではあるが、あきらめているわけではないようだ。

ハルトは剣について学があるわけではないが、いい剣だと一目みて分かった。

光を跳ね返して輝く刀身は、どんな物でも一振りで切り伏せられそうだった。

だが、どんなにいい武器を持っていたとしてもそれを扱う女性はすでに動けるような状態ではない。

敗色濃厚な雰囲気漂っている。ドラゴンもそれが分かっているからか、いたぶるようにゆっくり近づいていく。

サディステイックな性格してるな。

すぐに助けに入ろうとしたが、女性のあきらめきつていない顔を見て動きをとめる。

彼女の誇りを傷つけてしまふ。

それと同時に思い出した。

レングの言葉――。

『周りの者を見捨てる覚悟をしる』

残酷だが、一番利口な生き方。

ハルトは一時歯噛みをして飛び出すのをためらう。

女性は、最後の一撃とばかりに剣を握りしめて歩き方を忘れてしまったようなゆったりとした歩みでドラゴンに斬りかかる。

放たれた剣筋は行く先を見失った迷子のような情けない一撃。

ドラゴンは避けようとせぜずに堅い鱗で弾く。

女は追撃をしようともう一度振りかぶる。

ドラゴンが嘲笑うかのような声をあげて腕を振り払う。

女性はもちろん避けることはできない。

ボールのように弾かれ、近くの木に背を打ちつける。

木がめきつと折れる。ハルトは目を逸らすことなくずっと睨み続ける。

木が折れる一撃で鎧には亀裂が入り、女性は可愛らしいうめき声

をあげる。

その姿をみた瞬間にハルトの悩みは消し飛んだ。

（困ってる人を助けられないなんて、間違ってる！）

全部見捨てて、それで地球に戻れても激しく後悔する。

「よっ、ドラゴン。こっちにも人間いるんだけど、相手してくんね？」

悩みなど忘れて手に持っている刀でとんとん肩叩きしながら近づく。

ドラゴンは表情豊かに怪訝な顔つきをする。

すぐに興味が失せたように目の色が薄くなる。

ハルトは「邪魔だから消えろ、見逃してやる」と言われた気がした。

なめられたもんだなと苦笑い。

女が痛みに耐えながら片目だけを開けていたのでそちらにも片手をあげてハルトは自分の存在を教える。

「？」

ハルトが女にアピールしたのを確認し、ドラゴンは趣味に没頭していたところを邪魔されたかのように苛立った顔を向けてくる。

「俺の言葉分かる？ あの子見逃すならあんたも見逃すけど？」

最低限の交渉を試みたハルトだが、ドラゴンは口を天に向けて、
吼えた。

——交渉決裂。

ドラゴンはリーチの長い尻尾でなぎ払う。

ハルトは尻尾を飛び越え、柄頭でドラゴンのわき腹に打ち込む。
さらに殴り、蹴りとコンボをお見舞いする。

ドラゴンは呻くが、即座に左前足を動かす。

ハルトはバックステップでかわす。

ドラゴンの武器は火炎や尻尾での攻撃。

短い足での攻撃はあまり脅威にはならない。

ハルトは鞘から刀を抜く様子を見せない。

鞘を抜くと勝手にアニメスモードになる。

アニメスモードは多くの体力を使う。

これからどれだけの道のりを歩くことになるのか分からないので
無駄に体力は消費したくないのだ。

ただの殴りや蹴りとあなどるなかれ。

ハルトは訓練のおかげで相当に筋力が向上している。

おまけに一番鱗の柔らかさそうなところを攻撃されたドラゴンは、
人間が腹を殴られたかと同じくらいの痛みが蓄積している。

ハルトは距離をとり、様子を窺う。

ドラゴンは今の攻防でハルトがそれなりの強さを持っていること
を理解した。

目は本気を示すようにきつく細められた。

次手を見て考えを改めた。

利口だなとハルトは悩む。

利口な相手は厄介だからだ。

ドラゴンは口から炎を吐き出す。

地面に生えている草を焼きながら迫る大きな炎は、中々な熱量だ
った。

ハルトは横に飛び込み、転がりながらやりすごす。

ハルトが避けると、さらに避けた先に尻尾のなぎ払いを放つてきた。

ドラゴンは炎で攻撃して、自分の姿を隠した。全く視覚に捉えることができなかった一撃をハルトは防御するしかない。

鞘で尻尾の軌道に合わせて防御する。

ずしり、と腕が沈む。やはり正面からの力ではモンスターに勝つのは難しい。

一度押し込まれれば崩れるのは早かった。

ハルトは自分から後方へ跳び衝撃を柔らげて着地する。

大体の力が分かり、ハルトは刀だけで倒すのは無理だと判断したので魔法の準備を始める。

いくつか覚えている魔法の中からこの場でもっとも使いやすそうな魔法を選択する。

『フレアライン』

近距離専用魔法、詠唱なし。

ハルトが覚えている五つのうちの魔法の一つだ。

利便性が高く中々重宝している。

ハルトが魔法を選んでいるときも時は止まることなく、ドラゴンの攻撃が襲ってくる。

回避に専念しているハルトを捉えることはない。

ドラゴンの間隙を切りぬけながら一番効果的にダメージを与えられそうな場所を探る。

まずは目を潰したほうがいいかな。

攻撃が当たらず短気なドラゴンは大振りになり、狙いも乱れ始める。

そんなドラゴンの背後を取るの簡単だった。

ドラゴンは背後を取られないように警戒していたがやはり苛立ちという感情に気を捉われすぎた。

ハルトは魔法を発動させるために鞘の先を振り上げる。

ドラゴンも避けるでも攻撃でもなく、ましてや逃げるでもない。防御という選択をとった。

硬化魔法を使い、体の表面を燦然と輝かせる。

「俺の攻撃を受けきれんつもりかよ。フレアライン！」

ハルトは勢いよく叫び鞘を地面へ突きさす。

同時に真っ直ぐ前へと赤い一本の線が波打つようにしてドラゴンへ迫る。

フレアという名前とは裏腹に熱はない。

これはハルトが魔法を放つときに細かく設定したからだ。

フレアラインがドラゴンの身体に当たり、何の抵抗もなくあっさり真っ二つにする。

防御など関係ない。

ハルトはこの魔法ならドラゴンを真っ二つに割れると信じていたので使ったのだから。

うまい具合にドラゴンは右と左に割れ、身体を地面に倒す。

ワンテンポ遅れて血が間欠泉のように噴出する。

ハルトは地球からの愛用の私服が汚れないように素早くバックステップして回避する。

（よかった、汚れてない）

ほっと胸を撫でおろす。

モンスターの身体を支える魔石も真っ二つにってしまったようである。残念だ。

魔石を手に入れるには魔石を破壊せずにモンスターを倒す必要があるのだ。

ハルトはやれやれだと肩を竦める。

今でこそ慣れた、モンスターの命を奪うことだが一番最初（レン

グとの修行の時）はやばかった。

虎を倒したときは無我夢中で気にしなかったが自覚して殺すとなると手に残る肉を断つ感触とかにハルトは吐き気を訴えた。

初めは剣の扱いになれるためにアニメスブレードは取り上げられてたから鞘で叩くではなく刀身で斬る、だったのも大きく起因している。

ハルトは女性の安否を確認して、近づくと。

「助けてくれて……………」

ありがとう、と消えているような声でお礼を告げる。

助けた甲斐があった。

つついっ頬を緩めるハルト。

女性は腕を押さえながら引きずるように歩く。
傷が開きそうだからやめてほしい。

頑張つて立とうとする赤ちゃんを見る親の気持ちを抱きながらハルトは両手でストップ、ストップと腕を振る。

女性はそこで力尽きたのか。

身体を解放してハルトの方へ倒れかかる。

まだハルトとの距離はあったがハルトが助けるためにわずかに身体を前に出す。

距離は埋められ、女性の体を受け止めながらハルトはいい匂いだ、あと柔らかいと考えていた。

「おいおい、大丈夫？　なんか背中からツウーと血が流れてるみたいだけど？」

ハルトは美人な顔を脳内メモリーに留めるために眺めていて気づいた。

一筋伸びる血を見てわたわたと声をかけたが返事がくることはな

い。

おかしく思い、首を捻り、ハルトは苦笑い。
無防備にも気絶してやがった。

…… お前美人であり可愛いのだから男の前で無防備な姿を見せる
なつて。

俺が紳士じゃなかったら大人の階段を無理やり登らされてるぜ？
ハルトは紳士なので、何もせずに介抱した。

7話 ハルカニア

この世界の魔法は属性等で覚えるのではない。
魔法名で覚える物なのだ。

ハルトが覚えた魔法もすべて、ある日突然に頭の中に浮かんだのだ。

生まれた時に魔法を覚えられる量や覚えられる魔法は決まっているというのがこの世界の常識だ。

だが、とハルトは何か間違っている気がする。

勝手に枠を作って覚えられないと思い込んでるだけだとハルトは考えている。

それは、あながち間違っていない。

「ああん……う……う、うあん……？」

聞き方によっては艶かしい呻き声が背中から耳に届く。

ハルトは今の呻きに頬をわずかに染める

わずかにピンク色の妄想をした。

現在ハルトは少女を背負って歩いている。

急いでいるわけではないが、夜になるとモンスターの気性が荒くなってしまうのでできれば夜には安全地帯にいたいという理由がしつかりある。

背中に伝わる温かで優しい、心を落ち着かせる女性しか持っていない物の感触を味わうためにおんぶしてるんじゃない。

決して違つとハルトは目を合わせることなく断言できる自信があった。

ただ、誤算があるとすれば彼女のそれはあまり大きくないどころか、無乳に近い。

（残念だ）

「おーい、元気かあ？」

言葉を飛ばすと頭を上下に振る動作が背中から伝わってくる。
一瞬なんて可愛い生き物だと思った。

「傷の手当はほとんどしてねえけど大丈夫か？」

ボロボロの鎧を外して、血をふき取っただけだ。

ハルトに医学の心得はないし、応急処置のやり方も知らない。
学校の授業で教えてもらったことはあるが、まさか自分がそんな
状況に陥るなんて思ってもいなかったのでろくに聞いていなかった。
鎧はもう使いものにならないくらいにボロボロだったが一応手に
持ってきてはいる。

魔法の中には回復魔法もあるのだが、ハルトはない。

「だ、大丈夫ですわ……降ろしてくれませんか？」

「はい」

ですわ、という言葉遣いにハルトはラノベのキャラみたいだと思
った。

お嬢様みたいな喋り方だ。

（貴族とかなのか？）

……高慢な人じゃないことを切に願う。

小説などに出てくる高慢なキャラクターを思い出し、自分の好き
なキャラにお嬢様言葉の人がいたので、意外とそれもありがもと手

をうつ。

「清らかなる癒しの光よ。我の元に集え。ヒール」

彼女の使った魔法はヒールでももちろん回復魔法だ。

詠唱したことから、彼女の魔法は詠唱が必要な物だ。

詠唱のあるなしは魔法がつかえるようになったときに決まるので神に祈るしかない。

詠唱があると発動までに時間がかかるので、詠唱なしはかなり優秀なのだ。

つまり、ハルトは——ハルトの魔法は優秀なのだ
女性の言葉通り光が集まり、意志を持ったように身体を包んでいく。

全身を数秒だけ光が覆い、大気に溶け込むように消える。

アニメなどで突然発生する風呂場シーン。

そこで胸などが見えたりしないための光みたいだとハルトは思った。

光が消えると女性は満面の笑みで身体の調子を確認している。

結構深手なのに、治ってる。

中々の回復師だ。

「待たせてすみませんでしたわ。あの、助けてくれてありがとうございます」
「ざいましたわ」

綺麗なお辞儀をかましてくる女の子にハルトは満足して頷く。

（第一印象はいい感じだな）

「べつにいいって。困ったら助け合っのが人間ってもんだろ？」

本来はあまり人助けなどはしない。

ハルトは変な期待とかされるのが嫌いなのだ。

「そうですわね……。あの、私の荷物わたくしは？」

「ほらよ」

ハルトが肩にかけておいた女の子の持ち物だと思われるリュックサックのようなものを投げ渡す。

一応あのオアシスに置かれていたものなので持ってきておいたのだ。

「投げるなですわ！」と多少口調が崩れた気もしたがハルトは触れることはしなかった。

少女がリュックを開き、中の様子を確認して無事なのを悟り息を吐く。

「それってなんだ？ 結構重かったけど、何入ってたんの？」

さっきの反応でそれなりに大切なものだと言がつく。

あまり踏み込んではいけないとは思うがこのくらいはいいかな。

ハルトは女の子一人があんな場所にいたことに対して興味があったので尋ねてみた。

「これには大事な荷物が入ってるんですわ。詳しく教えることはできませんが……ある道具といっておきますわ」

妙に気になる言い方だ。

「道具、ねえ。わざわざ届けなきゃいけないほどに大事なものを一人で運んでるの？」

大事なものなら普通、もつと護衛を増やす。
多すぎても悪いが、一人はさすがに少ない。

ハルトの言葉に痛いところをつかれたと一歩後ずさって、ハルトに背中を向けてぶつぶつ呟きだした。

「どうしますわ、どうしますわ……。私が勝手に実行したことを伝えて変に思われませんかしら？ ど、どうしよう？」

ハルトが近づいて盗み聞きしているにも関わらずおおよそ恥ずかしいことをつらつらと泣き出しそうな声であげていく。

最後に至っては口調までも変化している。

何かの病気持ちなのだろうか、二重人格とか。

「そ、そうですね。話題を転換すればいいんですわっ！ ナイス私の頭脳！」

うん、ハルトもあまりにもかわいそうなので無理して聞きだすのはやめることにする。

下手に詰問すると泣き出しそうなくらいに慌てている姿が目に見えているからな。

ハルトが一步下がったと同時に女性が立ち上がって目を右往左往させたまま、

「あのですわね。私は……私は……」

（決まってねえーのかよ！）

思わず出かけた叫びを押さえるために両手を口に送りわざと咳をする。

「わ、わたくしは……わだぐじばあ……」

どんどん涙が目を侵食していくので、見るに耐えなかったハルトは、

「そついや、名前なんて言うんだ？」

助け舟を出して、頭を撫でてやる。

滑らかな髪は触れると抵抗なく手を通る。

触っていて悪いことをしているんじゃないかと罪悪感が生まれる。女神だって逃げ出すほどの容姿は伊達じゃないようだ。

「わ、わたくしですか……？ 私は、イーティ・プミヤリ……ですわ」

「俺は、ハルトだ。よろしくな」

何がよろしくなのか、分からないけど流れるに言ったハルト。できればよろしくになってほしくはないと言ってから思った。手を差し出して握手の構え。

異世界では握手なんてするのかな？ と疑問もあった。

初めに比べて落ちついたのか、しっかりとしたまなざしで、

「よろしくですわ。……ところで何がよろしくですの？」

握手を返してくれたのでさりげなく、にぎにぎ。

特に嫌がられる素振りは見えないのでハルトはやめることなくもみもみまくる。

さらさらしていて柔らかい。

「なんていうか、町まで一緒に行く旅の仲間みたいな？」

「……そうですね。それならよろしくですね」

ああ、自分で言っちゃったけど。

イーティと一緒にいくことになったみたいだ。

ハルトは後になってから馬鹿なことをと額に手をやる

イーティが仲間に加わった！

つまらなかった道中も少しは楽しくなっただけ。

ハルトは、たまたま行く先が同じだったということで自分を納得させた。

ハルカニア。

町というか、街と表現したほうが正しい。

ここがイーティの目的の場所だ。

ハルトとイーティはあれから歩き続けて何とか日が落ちる前につけたのだ。

その後は宿を借りて、倒れこむようにベットで体を休めた。

つまり今日は旅立ち二日目の朝ということになる。

イーティとは今朝用があるということでした。

ハルトとしてもこれ以上イーティといるのはあまりよくないのでよかった。

街を見たのと一日を過ごして、ハルトが一番驚いたことは……。

意外と近代的だった！

建物は石造と木造で日本と比べても劣っていない。

さらに、街には魔石を使った色々な道具がある。

魔石は五年ほど前から便利なものと判明し、ありとあらゆる日常品に組み込まれている

日が落ちたら自動でつく街灯はもちろんある。

同じように部屋にも明かりをつける機械もあった。

水道のようなものもあるし、風呂もある。

ファンタジー世界ごめんなさい。

勝手に古い世界と考えて侮辱してました、すみません。

帰るまで風呂には入れないかと思っていました。

ハルトはひたすらに謝り続けた。

ただ、残念なこともいくつかあった。

ハルトは情報収集をしたいので、でかい図書館とかがあってほしかったのじゃない。

この街を治めているギルドは図書館を置きたいのだそうだが他に大きな図書館があるので無理なのだ。

すべてイーティからの受け売りだ

商店街を冷やかしながら、呟く。

「ギルドにでも行ってみるかねえ」

モンスターが落とした素材はギルドでなければ売ることは難しい。勝手にどこかの店に売ると、売った側と買い取った側が犯罪者になるからだ。

街の中央にある通称ギルド道と呼ばれる場所に向かう。

ギルド道と呼ばれる理由は簡単だ。

たくさんのギルドがあるからだ。

武器ギルド、防具ギルド、道具ギルド、料理ギルドなど様々なものがあり、見ているだけで楽しい。

ハルトが初めにいた商店街は庶民のための商品が多い。

ここは冒険者のための商品が多い。

体力を回復する飲み物がここに置かれているのがなよりの目印だ。

まだ早朝だというのに人は結構いる。

冒険者の朝は早いんだなとハルトはそれらを見やりながら。

ハルトは真っ直ぐに中央にでんと構える建物にたどり着く目的地へと歩を進める。

三階建てくらいのかかなり奥行きがある建物。

高さこそ低いが威風堂々としていて飲み込まれそうになる。

これでギルド支部なのか。

本部とかはもっとでかいのだろうか。

ハルトは驚きながらも大きな扉の取っ手に手をやり引く。

見た目の大きさとは反比例して軽い扉に若干裏切られたと感じる。

中に入ると、意外と静かだった。

もっと、筋骨隆々の男達が騒いでいるもんだと思っていた。

テーブルなどはなく、イスに座っているのはカウンターにいる人のみ。

中にいる少数の人間は壁際に集まっている。

壁際には大きな木の看板が置かれていて、そこにはランクごとにわけられて貼られている紙がある。

これが現在このギルドに寄せられている依頼書だ。

壁に貼ってある依頼書をカウンターに持っていき依頼を受けるのがギルドのシステムだ。

ハルトはいくつかある中で一番すいていたカウンターに向かう。快活で明るそうな女の子でハルトは笑顔を浮かべながら近づく。

ハルトはいざどう切り出せば言いのかわからず、考え込んでいる、

「何か用事ですか？」

「ああ、素材を売りたいんだけどさ」

「分かりました、ギルドカードはお持ちですか？」

「ギルドカード？」

「はい。冒険者を証明するためのカードです。持っていないませんか？」

「ああ。登録してないぜ」

「でしたらまずは登録からですね。登録してもよろしいですか？」

「ああ。問題ない」

登録しておいて損はない。

旅をするには金が必要になる。

この世界ではモンスター＝脅威なのだから、それを倒せば報酬が
でるのは用意に想像ができる。

ハルトにとっては簡単に稼げるであろうギルドの依頼を受けるた
めにも登録しておきたい。

「名前は？」

「ハルトだ」

「ハルトさんですね。はい、このカードを受け取ってください」

そういつと消し炭のようなゴミと間違えそうな汚いカードを寄こしてくる。

なんだろう、嫌がらせなのかもしれない。

わずかに目に力が入るが女の子はハルトの手元しか見ていない。

「それはギルドカードです。再発行にはお金がかかりますので、失くさないほうがいいですよ。そこに埋められている魔石の欠片に魔力を注入してください」

これがギルドカードかよっ!?

ゴミ捨て場から漁ってきたものと間違えているんじゃないだろうか。

節約? それともからかっているのか?

ハルトは色々と思うことはあったが、言われたとおりに魔力を込めてみる。

「こっか?」

すると、真っ黒いゴミは淡い光を放ち始める。

カードはゴミ黒から真っ黒にランクアップした。

あまり大きくない手ごろなサイズのギルドカードの左上には『ハルト』と、白い文字が走っている。

本登録が完了したのだ。

「結局黒のままかよ!」

「へっ?」

驚いたように目を開く女性。

ハルトは取り消すように手をふる。

「わ、悪い。つい叫んじゃって」

「いえ、問題ありません」

淡々とだがほのかに笑顔を浮かべながら細かい説明があった。

説明事態はそれほど長くはなく、ハルトは相槌を打ちながら理解していく。

今、ハルトが行った登録は冒険者になったということだ。

冒険者とは自由にギルドで依頼を受けられるという権利を得たということだ。

さらに、これは希望なのだが、ギルドに所属することもできる。

ギルドカードは冒険者としての身分証明書。なくしても再発行できるが金がかかる。

ギルドカードに書かれているの名前、ランク、所属ギルドだ。

ランクはF～Sまでで表記されていて、ギルドカードの中で一番大事な場所だ。

ランクをあげる方法は自分より一つ上のランクの依頼五回こなす。さらに自分より二つ以上高いランクの依頼を二回こなすしギルドに報告すればあがる。

ギルドカードは今は真っ黒だが、ランクがあがることに色が変わっていく仕様だ。

ハルトはそんななんいらねえと叫んでやりたかったが、一目でどれだけの実力が分かるので便利なのだ。

埋め込まれた魔石の欠片には依頼の達成状況が書き込まれている。魔石に手を触れて、念じれば頭の中に現れる。

ギルドとは何人かの冒険者で集まって作るものだ。

ギルドに所属したいのならギルドのリーダーに話に行かなければならない。

メリットは、同じギルドの仲間と冒険に行くことができる。

登録したばかりの冒険者はほとんどパーティーに誘われることがない。理由は弱いと思われるから。

中にはハルトのような例外もいるが、滅多にない。

デメリットは、登録すると何ヶ月かは抜けることができず、さらに抜けるときに金を払ったりしなければならぬ。抜けてから何ヶ月かはほかの小ギルドに登録することもできなくなる。

メリットについてはまだまだあったが、ハルトは登録するつもりがないのでデメリット部分しか頭には残っていない。

メリットの部分も、一人でモンスターをぶっ倒せるハルトにはむしろデメリットになる。

仲間と素材やらなにやらを分けなければならぬ。一人で倒せるのに仲間の邪魔な攻撃が入る可能性もある。

だから、入るつもりはない。

そして、ギルドとは、ある程度の力、ランク、実績を持つ人がギルド本部に「自分のギルドを持ちたい」と申請することで作ることができる。

現在小さいギルドは多くある。

一通り説明を受けたハルトは伸びをして一休み。

素材を売る予定だったが、ひとまず興味がでた依頼を見ながら体を休めた。

8話 エスセリアレ

ハルトは依頼をつまらなそうにながめていた。

依頼にはランクがある。

これは難易度を示すものだが誰が何を受けても問題はない。

命の保障はないが。

依頼を受けるためにはその依頼を買うという意味を込めて金を支払わねばならない。

ランクがあがることに契約金は高くなるので、結果自分に見合った依頼を受けるようになるのだ。

Fランクの依頼はかなり簡単なもの——ゴブリンの討伐とか、薬草摘みとか——しかなく受けるとしたらD以上だな。

といっても無理に受ける気はない。

ハルトが現在持っている素材——リザードマンとドラゴン——であまり金が稼げなかった場合に限り依頼で補充するのだ。

さっきと同じ女の子の場所に行き、並ぶ。

素材を売りに行く。

ハルトがバックパックから取り出してカウンターに置いていくと、見るみる店員の視線が険しくなっていく。

「これを、あなたが狩ったのですか？」

「そうだけど、なんか問題でもあった？」

「いえ……」

蔑むような視線がハルトに注がれる。

（何か狩ってはいけないモンスターを狩ったとかだろうか？）

だとしても蔑まれるのは少し違うと思う。

結局理由が見当たらないのでハルトの心にいらだちが生まれただけだった。

変に何かを言っただけで問題を起こすつもりはないので顔には出さずあくまでもにこやかにする。

引きつった笑顔にも見える。

女性は一つずつ鑑定をしていると、隣から一人の少女が顔を出す。猫耳が生えた、獣人の少女。

ハルトは一種の感動を覚えた。

この世界に来てから人間に変化しているモンスターではない獣人だった。

耳もふもふしたい、とハルトは間抜けな笑顔になった。

獣人の女の子は女性に仕事の話でいくつか質問しているようだ。

その時、獣人の女の子の目がハルトが持ってきた素材に止まる。

こちらも同様に視線に敵意が混じる。

ハルトの担当をしていた女性が慌てて止めに入ったが、すでに獣人の女の子はカウンターごしにハルトの胸倉を掴んでいる。

「泥棒野郎が！」

獣人の女の子の叫びは、ギルド一階に響き渡る。

ハルトはあまりの事態の展開についていけず頭の中で言葉を咀嚼する。

言葉の意味を理解してから、ハルトには怒りが生まれた。

「勝手に、泥棒扱いすんなっ！」

胸倉に伸びた白い手を払い落とす。

それでも獣人の女の子は引かない。

むしろさらに目を鋭くして突っかかってくる。

「何が、泥棒扱いするな、だっ！　なんで今日冒険者登録した人間がランクB、C相当のモンスターの素材を持ってきたんだっ！」

言いがかり過ぎる。

何の証拠もないのに決め付けられたハルトは正面から睨みつける。

「俺が倒して持ってきたんだよ！　悪いかつ？」

俺が倒した、と言った瞬間、ハルトの素材を鑑定していた女性店員やその他ギルド一階にいた冒険者たちから一斉に視線がぶつかるのを感じる。

ハルトはなんでこんなにアウエーなんだ？　と疑問に思いながらも獣人の女の子を睨むのをやめない。

「嘘だ！　てめえ、これを誰か強い冒険者から盗んだらっ！」

「いや、違っけど」

そもそも強い冒険者から盗むのだって一苦労のはずだ。獣人の女の子は、そこまで頭が回らずより荒れる。

「違わねえっ！」

この世界では人を見たらまず疑えとか教えられて育っているのだろうか。

ハルトは明後日の方向へ悩みだした。

「てめえ、犯罪者か！　おい、みんな武器を持て！　捕まえろ！」

（勝手に突っ走るな！ 俺の話を聞けよ……）

言っても無駄なことは分かった。

ハルトは我慢していた怒りが身体の中で形作っていくのが分かった。

女の一声で依頼を探していた人物は武器を持ち、ハルトを囲むように動き出している。

無駄に動きが早い。

がたいのいい男や杖を持った男などがハルトを逃がさないように囲んでいく。

一見しただけなら彼らは強そうだ。

——犯罪者？ 何をしたっていうんだ。勝手に疑って、勝手に結論付けて。どんだけ自己中なんだよ。

ハルトは段々と腰に手を伸ばしていく。

手が刀の柄に触れ、握る力が増す。

暴れても文句は言えない立場なはずだ。

だが、人を傷つけると体が自覚したとたんにうまく力が入れられなくなる。

身体が震え始める。恐怖ではない。

相手は人間だ。

ハルトは何度かレンジとの訓練の際に襲ってきた盗賊を殺したことはあったが慣れることはない。

今は殺すつもりはない。

それでも、喧嘩さえ嫌いなハルトにとってはこの状況はかなり体に悪かった。

正当防衛にしよう。

相手が攻撃してきたらカウンターを入れるだけにしよう。

幾分心が落ち着く。

全員がじりじりと迫ってくるのを認めて、腰から刀を外す。

「全員！ とつげ——」

獣耳をつけた女の宣言に。

——別の女の美声が被る。

「やめなさい」

頭に血が上っていたハルトの熱が一瞬で冷めた。

水をぶっかけられて頭を冷やすよりも早い。

綺麗な声だった。

心に安らぎを与える、葉と葉が風に揺られて作り出す音のような声。

彼女の美声により、辺りに立ち込めていた怒気が消えていく。

ハルトは周りの変化を察して、疑問を抱かずにはいられない。

怒気がなくなっただけでなく、全員がしまりのない顔になっていた。

激しい剣幕で襲い掛かるうとしていた顔はどこにもない。

一番の驚きは、

（全員が、武器を納めた？）

何かの魔法、なのか？ 戦闘意識を削ぐものとか。

この異常事態に近いおかしい状況も説明がつく。

ハルトは全員が顔がある場所に向けていることに気づく。

視線が集まっているのはギルドの入り口から離れた二階にあがる階段。

そしてそこには。

女性がいた。

女性の顔を見た瞬間に体中に鳥肌がたった。

決して嫌悪感ではなく、感動したときのものようだった。

芸術に対して学はないが、ハイレベルの作品を見たときに味わうものに近い。

周りの男女問わずが腑抜けのように頬を緩ましている理由が分かった。

ハルト自身、見ているだけで背中にぞくぞくと甘美な快感がこみあげてくる。

いるだけで他人を興奮させる。いるだけで他人の心に幸福を贈る。だけど、ここで取り込まれたらまずいと本能が警鐘を鳴らす。

これは『魅了魔法』なのだろう。

モンスターの中には相手を魅了して食べる賢いやつもいる。

ハルトはレングに魅了の魔法の話を聞いていて、その手の魔法に耐性をつけるために何度も訓練をしていた。

具体的にはレングがブラックドラゴンに頼み——ブラックドラゴンは魅了の魔法を使える——訓練をつけてもらった。

もしもハルトが魅了魔法に負けたら好きにしているという理由つきで。

ハルトは自分の人生がかかっているという精神状態で、ブラックドラゴンはハルトを自由に扱うために。

互いに本気をぶつけ合った結果、かなり高度な訓練を行えた。

そのおかげで、完璧とまではいかないがハルトは心を掌握されることはない。

階段をゆっくりと降りてくる美女の、木を踏み鳴らす音を聞き何人かの男が床に崩れ落ちる。

幸せそうな顔つきで。

わずかにざまあみろと思ったハルト。

ハルト自身、彼女の一挙手一投足に目が離せていないが。

「なんでこんなことが起こっているのかしら？」

一度ハルトに顔を向けて、それからハルトを囲っている人たちへ視線を投げる。

目が合った瞬間に心はねた。

可愛い。手をつなぎたい。抱きしめたい。キスしたい。自分の物にしたい。

様々な感情が身体の中で渦巻き、ハルトは――慌てて自分の顔を叩く。

（あ、あぶねえ。飲み込まれるところだった）

「そ、その。その冒険者が犯罪者で……」

獣女はさつきよりも態度が小さい。

本来魅了魔法は異性に対して絶対的な力を誇るというのに女性にまで通じている。

美女が使用している魅了魔法のレベルはかなり高いようだ。

ハルトは見惚れかけながらも警戒心を高める。

「犯罪者？ 何をしたのかしら？」

「素材を盗み、ました……」

「そう」

まだ、ハルトが犯人だとぼざく獣人の女の子に齒噛みする。

いい加減にしてくれとため息を漏らす。

ゆつくりとだが再び怒りが戻る。

ハルトはその怒りを抑えるようなことはしない。怒りの感情を利

用して魅了魔法に対抗するために。

とにかくあらゆるものに怒りを覚える。

なんでもそこに時計あるんだよ。なんでその男イケメンなんだよ。なんで俺はモテないんだよ。

かなり理不尽ではあるが、ハルトの心を怒りが占領していく。

同時に悲しい気持ちも生まれたが気のせいだとハルトは首を振る。魅了魔法は心の穴をついて攻撃するようなもので、心を完全に一つの感情で埋めることが出来れば多少効きづらくなるのだ。

女性はすたすたとハルトの方へ歩いていく。

目の前で改めてみると美女が本当に美しいのが実感できる。

顔は文句なしに可愛いくもあり綺麗であった。

光を負かす銀色の髪に勝気に燃え盛る紅蓮の瞳。

潤いをもった唇がさらに彼女の美しさをあげる。

緑色のワンピースを着ている。足がちらちら見えるのに、ハルトはさらに鼓動を早くする。

少しの間だけど旅をしたイーティもかなりの美人だったが。

目の前の彼女は、遥かに超えていた。

ただそこにいるだけで相手を欲情させるチートに近い魅力。

綺麗な曲線を描いた大きい瞳は俺を値踏みするように、細められる。

一番気になったのは耳が鋭く長いことだ。

鋭い耳が彼女の品格をさげることなく、さらに昇華されている。

ハルトのゲーム知識を使い、答えを出すのなら、エルフが一番近いな。

「あなた泥棒？」

彼女は、ハルトが犯罪者じゃないと分かっているのか、からかうように笑う。

笑顔に頬が赤くなるのを感じたハルトは服の上から太股をつねる。

「だから、違う——違います。誤解なんです」

相手の雰囲気から年上だと判断したハルトは即座に敬語へと切り替える。

「誤解？」

「その女が勝手に泥棒にしたてあげたんです」

僅かに不満を含ませて言う。

素材を売ろうとしただけに攻撃されたのだからハルトが怒るのは当たり前だ。

誰だつてやつてもいないことで罪を着せられたら怒るはずだ。

いちやもんをつけてきた獣女を指差すと、獣人の女の子はさっきまでと打って変わり殺気だつ。

まだ、疑っているようだ。

「嘘を吐くなー！」

「あなたは黙っていないさい」

ぴしゃりと言明して獣人の女の子を眼中から外すように、ハルトのほうへ何度見ても飽きない容貌を見せてくる。

近場で直視してくるのでハルトは熱が上昇してくるのを感じ顔を逸らす

男として恥ずかしがっている姿を見せるわけには行かないんだ、絶対に。

「つまり、あなたが冒険者として登録したばかりなのにBランクモ

ンスター級の素材を持ってきたのがおかしい、と」

さつきカウターのの上を見ていたのかある程度の事情は理解できていたようだ。

「あなた、名前は？」

「ハルト、です」

「私は、このギルドマスターでエスセリアレ・ウィンドリアよ。無礼は謝るわ。その素材を持って三階の私の部屋に来て」

微笑されてハルトは身体から湯気が出たような気がした。

「へ？ あ、ああ」

ハルトはいそいそとバックパックに荷物をつめる。

と、とと無意識のうちに急いでしまい素材をバックパックから外して地面に落とす。

慌てて拾い上げる。

エスセリアレ

美女に部屋に来てくれないか、と言われて喜ばない男はいないと思う。

ハルトもわずかに浮き足立っていた。

「ふふふ。もう、いいかしら」

エスセリアレが一言呟くと、場の空気が変わった。

静かな場所が、がらりと百八十度回りざわざわし始める。

「エスセリアレさんの部屋だと！？」「あの怪しい男はもしかして……彼氏か？」「いやいや、自己紹介してたぞ。というか、ずる

い！ 俺も一度くらい入ってみてえ！」

騒がしいなんてものじゃない。

欲望交じりの童貞冒険者たちは涙を流しながら、ハルトへ敵意を含んだ睨みをぶつける。

先程とは敵意の意味が変わっているが。

超絶うるさい今の状況は魔法を解除したからだ。

魅了によりほぼ操られているような状態だった人々が解放されたのだ。

好き勝手騒ぐに決まっている。

魅了魔法を解除してくれるのは気を張らなくて済むのでいいけど、場が息を吹き返すのはやめてもらいたい。

とにかくこれ以上いるのは自分にとって不利益でしかない得ない。ハルトさっさとエスセリアレの後を追っていくことにした。

エスセリアレの髪から発生する花の香りを追いながら木でできた階段を踏み登っていった。

9話 イーティとエスセリアレ

ギルドの三階。

ここにはエスセリアレの仕事用の部屋と私室。

ギルドで働く何名かの部屋しかない。

ギルドではなくエスセリアレの家のようなものだ。

ハルトが今いるエスセリアレの仕事用の部屋は随分と殺風景だった。

本棚が壁際にある。さらにお客ようにテーブルとソファがあり、そこを見下すような形でエスセリアレの机が置かれている。特に目立つものがない。

全体を見回して、ソファの近くを見た瞬間考えを改めた。目立つ物が一つあったのだ。

がたがたと震えて正座をしている置物。

いや、

イーティが、物凄く歯をかちかちと鳴らして涙を垂らして反省していた！

何があつたの！？ と目を引んむかせてハルト道中あつたイーティの泣き顔を見つめる。

女の子の泣いてる姿って可愛いなと思ってしまふハルト。

ハルトは諸悪の根源だと考えられるエスセリアレの表情を窺う。

「あ、あの」

触れたくないけど聞くしかない。

あんなものがあつたら無視を決め込むのは難しい。

「何かしら？」

ぶわあつと髪をかきあげる。

花の香りがする。ここに来る前に生えていた花も似たような匂いだつたなと思い出す。

この街の特産品か何かかもしれない。

ハルトが顔を横に逸らすと、まるで予想通りとばかりに妖艶に微笑む。

自分用の机に座り手を組む姿はなぜか色っぽく見えた。

「あの人は……」

「あら、何か見えるのかしら？ 私には見えないわ」

「いや、あそこにいますけど……」

「何か見えるのだとしたらそれは靈魂か何かね。浄化魔法でこの部屋を掃除しなければいけないわね」

なるほど、見えてはいけない。

見えないように振舞わなければいけないのか。

納得してハルトはソファに座り顔をエスセリアレに向ける。

座っている姿は凛々しく、美しいそして艶やかだ

「素材を見せてくれないかしら」

「どこに出せばいいんですか？」

バックパックを手に持ち、自分の目の前にあるテーブルに出そうか、エスセリアレの机に出すのか逡巡する。

「ちょっと待ちなさい。あなた普段から敬語で話しているのかしら？」

不満そうに唇をすぼめる姿が可愛く、ハルトは自身の顔が間抜けになりそうだったのが気合で押さえ込む。

子供のようなむくれっぷりは大人のような雰囲気と正反対で心を奪い取られるような魅力がある。

もう目を開けていては駄目だ。

心眼を使えるようにしないとこの人とまともに話せる気がしない。ハルトはエスセリアレの問いに首を振る。

「なら、やめてちょうだい」

ハルトとしてもその申し出はありがたいので、素直に受けることにする。

敬語はあまり得意ではない。

とりあえず、です、ます、つけるだけしかできない。

「素材を見せてちょうだい」

「テーブルに全部出せばいいのか？」

「ええ」

ハルトがバックパックから素材を取り出す。

常に光を反射させている、テーブルの上を占領していく素材たち。リザードマンとドラゴンの素材を乱雑に置き並べていく。

「まず、これはステイリザードマンね。これをあなたが倒した、ね」

いぶかしむ声にハルトはむっとする。

「あんたも疑うのかよ」

目を細めて睨む。

すると、睨み返してくる。

「普通ならね。逆に冒険者登録して最初に持ってきた素材がBランクって、普通信じられると思う？」

冷淡な言葉でハルトの顔を射る。

「信じ……たい」

よくよく考えると俺は随分と無茶な要求をしてたんだな。

言われてから気づいたが、よっぽど大らかな性格ではなければ見逃すはずがない。

だからといって獣人の女の子のように突っかかるのも間違えているが。

「ほらね。あなたを追及した女の子も極端すぎるけど間違っていないわ。いきなり登録した人が高いランクの素材を持ってきたら、誰かから盗んだ。誰かから買った。そのぐらいしか思いつかないわ。あなたのことを何もしらなければね」

「なんだ？ あんた何か俺のこと知ってんの？」

レングが勝手に話したのかもしれないと思ったがすぐにその考えはなくなる。

「知らないわ。それでも私の魅了魔法をレジストしたのだからかなり強いことは分かるわ」

「なるほどね。だから、あそこで使ったのか？」

ハルトの実力を測るために使ったのかと聞いたが、首を振られる。

「あの場を抑えるうってつけの魔法だからよ」

確かに、とさっきの状況を思い出す。

全員が腑抜けてたな。あれなら人を纏めるのも簡単そうだ。この人の力なら下手したら小国程度なら操れそうで怖いが。

エスセリアレはイスから立ち上がりハルトのいるソファへ。

素材の鑑定を始めて、黙り込んだので、ハルトは後ろを振り返り未だ正座でがたがた震えているイーティを見る。

ハルトがここにいることに気づいていないのか、ずっと自分の膝小僧に視線が固定されている。

それでも綺麗な美貌は変わることはない。

ただ、エスセリアレを知ってしまったからかさほど美人だと意識しなくなっている。

エスセリアレマジ美人。

「全部で十万ザール程度かしらね」

この世界で平民一人当たりの一日の生活費はほぼ千ザール。ただ、冒険者はそこらへんの勝手が違ってくる。

武器や防具、回復アイテムなどを買うとなると全然金が足りない。ハルトは別に冒険者で一生食っていくわけではないのでそこまで気張って装備を整えるつもりはない。

「それじゃ、頼むわ」

ぼったくられていたとしても、ハルトは金に執着心はない。舐められていたとしても一つの街に長く居つくつもりもないので心配はない。

紙幣二十枚——一枚一万ザール——を受け取ると、

「あなたに聞きたいことがあるのだけど、いいかしら？」

エスセリアレが待つてと言わんばかりに手首を掴む。

ふにふに柔らかい。

握られている腕から身体全体に快感が送られる。

全身が喜んでるのがわかる。

不意の一撃に握られただけに顔が真っ赤になる。

可愛いわねとエスセリアレは微笑む。

「？ 別に構わないけど、答えにくいことはやめてくれよ？」

なんとか突つかからずに言い切る。

怪しまれるかもしれないけど、変な質問をされてから黙り込むよりもまだ。

もう直視せずに話すことにも慣れたハルトはどんな質問をされるのかひやひやしながら待つ。

「この子知ってるかしら？」

そういつてとうとう話題にのぼった女性——イーティ。

エスセリアレがイーティを見る視線が鋭いのは何か逆鱗に触れることをイーティがしたのだろうとハルトを納得させる。

「ああ。この街に来る前にあつたぜ」

「どんな状況で？」

一瞬、言わないほうがいいかもと頭の中をよぎる。

ここにいるのだからイーティは冒険者の可能性が高い。

自分の痴態を他人にばらされるのは一生の恥に近い物があるかもしれない。

言つていいのかイーティの顔色を窺うと。

ハルトのことなんか視界に入っていない。

がたがたと震えているだけで、それ以外行動を起こさない。

……ここまで怯えているのはエスセリアレが何かしたからなのだと思うんだけど。

何をしたのか考えられない。

ハルトの脳じゃ理解できない、したくない。

嘘で誤魔化してもすぐに見破られそうなので、ハルトは正直に吐いた。

「ドラゴンに襲われてたんでな。俺も迷子になってたから案内してもらつたために助けた」

後半ちよつとばかり嘘をつく。

「襲われていた？」 エスセリアレの怒気の籠った目がイーティに向けられる。

「イイイイイーーーーーティイイイイツッ！ あんたさつき
襲ってきたドラゴンは倒しましたわ！』とか言ってたわよね！？
嘘言っただの！？」

「ひついいい！」

イーティが悲鳴をあげながら吹き飛ばされた。ハルトも悲鳴をあげたいぐらい驚いている。

ハルトの隣を轟風が通り抜けたと思ったらイーティは壁に打ち付けられている。

全身の汗腺がフル稼動して冷や汗を発生させる。

一回風呂に入らないといけないぐらいに汗の滝が生まれた。

口調が大人びたものから一転、子供らしい口調になったエスセリアレはさらに続ける。

「四人で受ける依頼を一人で勝手に受けて、あげくのはてに怪我するわ、嘔吐くわ……私は頭が痛いわよっ！ めちゃんこちゃんにね
！」

め、めちゃんこちゃんて……。

脳年齢が若返ったんじゃないか？ 悪い意味で。

ハルトはおよそ聞かれたら自分も風魔法で吹き飛ばようなことを考えていた。

「で、でも。私は学校でも優秀で、それをママに証明したくて、い
けませんの！？」
わたくし

逆切れ。

イーティは怯えながらも目には力を込めて宣言する。
それよりもハルトの心に引っかかるワードが出てきた。

——ママ？

ママとは、自分を生んでくれた人で親だ。別名お母さん、母さん、クソババア（反抗期）、母上などなど。

エスセリアレはイーティの母親？

イーティは金色の髪に新緑を思わせる鮮やかな瞳。

エスセリアレは光を反射する銀色の髪に燃え盛る紅蓮の瞳。

似てない。顔の骨格なども似てない。二人とも美人だという点は似ているけど。

イーティは父親似なのかもしれん。

ハルトが結論付けた瞬間、エスセリアレは明らかな殺意を混ぜてイーティに激高する。

「だから、ママはやめろって言うてるでしょ！ 167年間彼氏いない処女の私に対する嫌味か！」

ひゃ、167年間……？

エスセリアレの種族がエルフということをはルトは知らない。

だが、耳の長さや地球のゲーム知識から大体は予想がついていた。寿命が長いにはある程度納得できた。

それより、

（助けたほうがいいかも……？）

轢かれたカエルのような態勢で壁にめり込んでいるイーティ。

それを見て、やはり助けるのはやめようと決心できた。

ここに参加するとハルトも巻き添えをくらいそうだったので一歩下がって傍観者に徹することに。

いくじがないが自分の身を守るためだと割り切った。

数分後。

頭を押さえながらエスセリアレは自分のイスにどがつと座り込む。
疲れた様子で、肩で息をしている。

ハルトはエスセリアレの顔を覗きながら尋ねる。

「色々聞きたいことがあるんだけど？」

さっきの様子を見たせいか美人だから恥ずかしくて直視できない
という事はハルトにはもうない。

美人だな。でも性格荒いな、と感じるようになった。

元々子供っぽい人で猫被っているのがエスセリアレなのだと理解
した

「……いいわよ。どうぞ」

むすつとしながらも落ち着いた口調に一応は戻っているのだが、
違和感だらけ。

そしてなんでこんな状況になったのか尋ねた。

イーティは学園ギルド『スクール』に所属しているのだそうだ。

そこでは冒険者のために様々な勉強を施している。

生徒は十代の人のみ加入でき、二十歳になったら自動で抜けられ
るのだそうだ。

その前に抜けてもいいのだが関係ないので置いておく。

学園ギルドに所属しているイーティは学園でもかなり優秀で他の
人からも抜き出ている。

そんなイーティと他三人に学園長が依頼を出した。

『大事な手紙とアイテムをハルカニアにいるエスセリアレに届ける』

これが今回の依頼だったそうだ。

必ず四人で行くようにとその隊のリーダーを務めるイーティに物品が渡される。

そして……イーティは自分一人で行けると判断して仲間を置いていき、結果あのザマ。

だから、エスセリアレがめちやくちゃ説教したということだ。

イーティがママと呼んだのは、エスセリアレが拾って育てたからだ。

年齢的にお姉さんはないだろということとやはり育てた親だからママなのだ。

エスセリアレはもの凄くママと呼ばれるのを嫌ってます。

エスセリアレはエルフで寿命は約千年だ。

人間で換算したら今は十七歳程度なのだろうけど……ハルトからしてみたらおばあちゃんだ。

大体の事情は分かったので、ハルトは次の目標地を決めるためにおばあ——エスセリアレに尋ねてみる。

「でっかい図書館がある街ってどこかにねえか？」

やはり情報を入手する一番手っ取り早いのは本だ。

この世界にインターネットがないかぎり書物を読むしかない。

エスセリアレは微笑を携えながら、

「イーティがいる学園にはかなりの本が貯蔵されていたわね。それより、あなた私のギルドに入らない？ 色々高待遇にするわよ？」

妖しく目を細める。

だが、もう何も感じない。

「遠慮しとく。俺にはやるべきことがあるからな」

「あら、残念。それより、学園に行くならあの子も連れてってちょうだい」

「は？」

正直自分の力を過信する人間を連れて行くのは嫌だ。

いつ自分まで危険に晒されるか分かったもんじゃないからだ。

まあ、美人と旅できるのは嬉しいけど……逡巡する。

ハイリスクハイリターンだ。

悩む。

「お願いよ。あの子このままだここに居座りそうなもの」

元々学園ののんびりとした授業に飽き飽きして、さっさと力を証明してギルド『エスセリアレ』に入れたかったらしい。

だから、イーティにとってはここに残ることは好都合なのだ。

「本人が残りたいならいいんじゃないか？ それにあんたの目が届くところにいたほうが安心だろ」

「そうでもないのよ。私忙しいし」

そりゃそうか。エスセリアレはギルドマスターだ。

どのくらい大変なのか知らないが日本で言う社長みたいなものだろうなとハルトは大変そうな視線を送る。

忙しくなかったらおかしい。

「あの子は協調性がないから。学園でそついうところを鍛えてもら

「ったほうがいいのよ」

確かに。多くの人間が暮らす場では協調性がなければやっていくのは難しい。

「治ってなかったみたいだけど？」

「そこが悩みの種ね。とにかく送ってつてくれない？ 依頼として出すわ。一万ザールよ」

自分の目的地のついでに金が入るのはいい。

ハルトはそれでもあまり気が乗らなかったが、簡単に金が稼げるならいいかと頷く。

本当は誰かに頼まれるのは好きではない。

一度頼られると二度、三度と頼られる可能性があるからだ。

「ありがとう。お金は先払い、さらにCランクの依頼をクリアしたことにするわ」

「いいのそついうの？」

目の前で違法な取引が行われているのにハルトは少なからず抵抗を感じる。

法治国家日本で育ったハルトには泥棒とかするのに物凄い嫌悪を感じる。

「男が細かいこと気にするのはよくないわ。依頼受けてくれてありがとうね」

うやむやになったがハルトはもう考えないことにする。

礼を言われたが、金を貰っているのだ。
いいよいいよと片手を振る。

「出発は明日でいいか？」

午後。街で準備を整えて、それで出発でいいだろう。

食事はどうしようかと悩む。

魔石さえ取り外さなければ、

大抵のモンスターの肉は美味だ。

市場で取引されるのも頷ける。

「なら、ここに泊るといいわ。明日合流もしやすいでしょうし」

確かに。昨日はイーティがお礼と言う事で食費、宿代を払ってくれた。

だが、一日分しか部屋を借りていなかったのでちょうどいい。

「分かった。んじゃ、俺は街に出かけてくる」

じゃあなと片手をあげる。

「暗くなる前には帰ったほうがいいわよ。あなたの身なりだと柄の悪い冒険者に絡まれる可能性があるわ」

「分かったよ。ママ」

「ママ言っなっ！」

ハルトはあはははと笑いながら部屋を後にした。

10話 街に仕入れ。謝罪。お話。

それなりに大きなこの街は中心にギルド『エスセリアレ』があり、その周囲に様々なギルドがあるのは既に知っているだろう。

ギルドから遠く、門から離れた場所には娼館などもありハルトは興味があつたが行くつもりはない。

残りはほぼ民家。

娯楽施設なんてものはない。

ハルトはまず最初に見にいったのは弁当屋だ。

並べられている商品はどれもサンプルで、注文をすると店員がバックパックから取り出してくれるらしい。

そこに並べられる数多の料理はどこかで見た覚えがあるものばかりだ。

ご飯はもちろんあるし、焼きそばもある。

地球と食事のレベルはほとんど変わりはないようで安心した。

食品を買う前に、ふと思う。

買った食べ物はすべてバックパックに入れていくつもりだ。

だが、バックパックは一つしかない。

内部でごちゃ混ぜというわけではないが、なんとなく食料とモンスター素材を一緒に道具袋に入れるのは憚られた。

先にバックパックを買ったほうがいいと考え、道具屋の露店を探してバックパックを探す。

結構すぐに見つかり値段を尋ねる。

バックパックは魔石を使って作ることから中々に金がかかるものだ。

一番小さい五つまで入るバックパックですら、一万ザールだ。

ハルトはそれを一つ購入した。

イーティの護衛代が吹き飛んだが、金に糸目をつけることはできない。

五種類五つということでマックス二十五個入るバックパックを腰にくくりつける。

これでようやく食料を買うことができる。

まずはパンを。

一斤三百ザールのパンを五つ買う。

特でかサイズの、一つ百五十ザールのおにぎりを五つ。

こしょうと塩で味付けされたできるだけ大き目の肉を五つ購入。

卵（三十ザール）五つとこの世界にしかない栄養を補給するためのキャロリーメイト（一つ三百ザール）を五つ買い、それで小型バックパックの中身は終了した。

さらに火魔石の欠片（一つ三十ザール）を五つ購入し、フライパン（三百ザール）も同様に買う。

火魔石は魔力を込めると内部に秘められている火の力で熱を発する。

欠片なので一、二回しか使えないがこれで簡単に料理ができる。こちらの二つはそこまで気にする必要もないので素材用のほうへ入れる。

まだ、飲み物を買う必要があったので、一つ辺り三リットルほど入る水筒（千ザール）を五つ買う。

中身に水（一リットル百ザール）を入れる。

そちらもわざわざ水筒を買ったことから分かるように素材用のバックパックに入れる。

結構な金がかかった。

今さっき近くの土が見えている場所で計算したら、バックパック含めて二万七百ザール。

一度の旅で随分な量の金を消費した。

これは出来上がった物を買ったハルトのせいである。

一から自分で作ればこの半分くらいに金は抑えられた。

バックパックの中身は腐らない。だからこそ買い込んだんだが、細かい金が生まれてしまったので、この世界という財布的存在を

購入することに。

財布は魔石を利用したバックパックに似たものだが、金に関しては無尽蔵に入れることができるらしい。

故に高かった。

三万ザールだ。

財布を買うのはよほど金がなければ無理な話で冒険者以外に買う人はいない。

ハルトは用事が一応は済んだので、街を見て回る。

といっても金の無駄遣いをすることはできないので冷やかすだけだ。

（つけられている？）

先程からずっと不審な視線を感じていた。

金を使いまくったのを見られ、狙われているのかもしれない。

ハルトはさりげなくこける。

何も無いところでこけたハルトをくすくす笑うもの、無視するものと様々な反応があった。

笑っている奴らにせめて隠す努力をしろといいたい気持ちを抑えながら、態勢を直す。

ハルトは本当に間抜けにこけたわけじゃない。

態勢を戻しながら周囲をさりげなく確認。

何人かがこちらをちらちらと窺っている。

確定した。

人目が少なくなったら襲ってくる。

「どこの世界にもそういうのはいるんだなあ」

どこかしみじみと呟くハルトは、わざわざ狙っている奴らを返り討ちにしようなんて気は起こさない。

そそくさとギルド『エスセリアレ』への帰路に着く。
商品を探して大分ギルド道の端まで来ていた。

ギルドが見えるぐらいにまで来ると、不審な視線も徐々に減ってくる。

何人に狙われていたのか今となっては分からない。
ハルトは大金を持って出歩きたくないと思った。

ギルドに入って二階に行く。

ここは一種のバーのようなものだが、食事もある。
ハルトはこのイスに座り、机でぐーたれている。
時間は夕飯にするには早いので人は少ない。

ハルトが邪魔だとしてもまだ迷惑になることはない。

そんなハルトは食後休憩中。

夕飯はチャーハンだった。おいしい米料理に涙が出る思いで食べまくった。

一人の時間は好きだ。

自由に何でもできるから。

ハルトはずっとそう考えていたが、こっちに來てからはあまりそう思わなくなっていた。

娯樂が少ないから一人で時間を潰すのがつまらない、というのも一つの理由ではあった。

が、なによりもサウザンドウルフたちと暮らした日々が楽しかったのが大きな原因だ。

なので、一人は少々寂しい。

だからといって一緒にいるような友達はいない。

(つまんねーなあ)

頭の後ろで手を組みながら、脳内一人しりとりを始める。
悲しいことこの上ない。

「な、なあ」

そんな折に、ハルトに声をかける人物が現れた。

「んあ？」

突然声をかけられて、ハルトは驚き半分戸惑い半分で返事をする。

「そ、その。ちょっときてくれねえか？」

そこにいたのはハルトに異常につつかかってきた獣人の女の子だ。
ハルトは怒りがこみ上げたが、少女のバツの悪そうな顔を見てひとまず様子を窺う。

「どこに？」

「ギルドの裏に、だ」

「理由は？ 俺、暇じゃないんだけど？」

一人でいるのはつまらないが、少女といっても楽しくなりそうにはないと決め付けたハルトは冷たく突き放す。

少女はしょぼんと頭の上の耳を垂らし、頬を赤くしながら、

「あ、あやまりたいんだよ」

少し拗ねたように唇をすぼめる少女の姿が、ハルトが受けた侮辱

を払拭するぐらいに可愛かった。

ハルトは嗜虐心が掻き立てられ、聞き返す。

「んー？ なにー？ 聞こえないーい」

少女は、ぐつと何かをためるように目を瞑る。

ハルトはにやにやしながら顔を覗き込む。

——訂正。

いい暇つぶしにはなりそうだった。

「だからー！ てめえに謝りたいんだよー！」

「え？ なに？ 聞こえない？」

ハルトはしつこくして、とうとう獣人の女の子が吼えた。

「うがうつ！ いいからこいつてっ！」

獣人の女の子が手を掴んで引つ張る。

イスを倒しながらハルトはこけないように、態勢を立て直す。

「分かったから、ひとまず離してくれよ……」

たぶん言っても無駄だなと思ったハルトはぼそつと。

結局聞こえることはない。

階段を下りるときに歩く速度が遅くなった。

一応はハルトのことを考えて行動してくれたようだ。

ギルドの入り口に向かう。

ふと辺りを見回すと、カウンターにいた店員が面白そう笑う。

ああ、この子がこんな風なのはいつものことなのか。

店員が手を振ってきたのを見て、理解する。

ドアを壊さんばかりに開け放ち、ギルドの壁に沿って移動する。
木が生えた一角——人が全くいないところへやってきて、ようやく獣人の女の子が動きをとめた。

ついた方がいいが中々口火を切らない。

獣人の女の子はここまできて恥ずかしくなったように顔を真っ赤にしている。

「あー！」とか「うー！」とかしか唸り、頭を掻き毟る獣人の女の子に痺れを切らしたハルトがからかう。

「告白とかなら早くしてくれない？ 忙しいんだよ、俺」

「告白じゃねえっ！ その、えーとだな……」

うあーと髪を掻き毟る。

謝りたいというのは知っている。

ハルトが白い目で見ると、ようやく獣人の女の子は決心がついたのか、

「疑ってすまねえーっ！」

礼儀正しく腰を折り、頭を下げる。

分かつてはいたが目の前で展開されると……驚きが胸に落ちる。

彼女のような自尊心の高そうな人間が自分の非を認め、謝るのがやはり違和感が。

「べ、別にいいけど？ そりゃちょっとイラッとしたけど、お前のおかげで色々都合よく進んだし」

謝られるとよっぱどのがないかぎり「やだ」とは言えないよなと思う。

心で許していなくても別にいいよと言ってしまふ。

とか言っているがハルトは今ので完全に彼女を許しているのだが。

「許してくれる？」

妙にしおらしい獣人の女の子は、彼女の美貌と相まってハルトは思わず見とれる。

ぼさぼさと伸びたとげのように鋭い髪と小さい背丈から子供を彷彿させる。

「あ、ああ」

ハルトはうまく動かない口で搾り出す。
かあと頬が熱くなる。

「そ、その、本当に悪かった」

一度口にしたおかげで獣人の女の子はたがが外れたのか何度も謝る。

殊勝な態度にハルトは胸が苦しくなってくる。

「だから、いいって。そんなに謝られるとこっちが何か悪い気持ちになってくるし」

「……分かった。本当に悪かった」

そういつて、最後に深いお辞儀をしてから去っていく。

残されたハルトは、

「あの子、今までで一番可愛いんじゃないか？」

ギャップに萌えていた。

夜、ギルドの三階。

ギルドの三階にはいくつか空き部屋がある。

そのうちの一つをハルトは借りている。

ベットが部屋の三分の一を占拠しているが、悪くはない。

地球にあるハルトの部屋とあまり変わらないので、むしろしつくりとくる。

ハルトがいる部屋に現在金髪の髪が美しいイーティがいる。

ほのかに香る女性らしい匂いにハルトは変な気持ちになる。

風呂に入ったらしい。

この世界にも問題なく風呂がある。

水魔石と火魔石を使って便利に風呂ができるのだ。

ハルトは店内で働く何名かの女子と、イーティ、エスセリアレが入ったあとの風呂を借りた。

ハルトは女子の残り香がする風呂を堪能する暇などなく、軽く入ってすぐに出た。

エスセリアレが「一緒に入らない？」と誘ってきたときは本当に迷った。

結局断った意気地なしのハルトだ

イーティがなぜここにいるのかというと明日の日程を打ち合わせしていたからだ。

決してピンク色な内容ではない。
残念である。

「ギルド『スクール』には馬車を使って七日程度で着きますわ」

七日程度なのはエスセリアレに聞いていた。
だからこそ食料を買い込んでいたのだから。

「馬車か。よかったあ……」

こちらの世界に車がないことは知っているので馬とかに乗るのは
分かっていた。

だが、馬に乗ることはできないので、ハルトは地味に危惧してい
た。

「明日の朝に馬が出ますわ。問題ないですわね」

「朝に一回だけ？」

「朝と昼に一回ですわ。後は商人が護衛を雇っている物もあります
けど、私達公共^{わたくし}の物を使いますわ。私は帰りたくないのですけど…
…ここにいても命が危ぶまれますので」

はつと自嘲した息を吐き出すイーティ。

どこを見ているのか分からないぶれた視線。

ハルトは朝のあれを思い出してしまい、苦笑するしかない。

イーティと同じ状況でエスセリアレがいるこのギルドにいたら命
がいくつあっても足りない。

壁にめりこむ風魔法が頭を過ぎる。

イーティは思い出してしまったのか顔をぶるぶると振動させてい

る。

落ち着くまで待つ。

数十秒後。

「それより、あなたは一体どこで剣を習ったんですの？ 私と同じ年くらいの癖にあそこまで戦えるなんて只者じゃありませんの」

誰に教わった？ モンスターに教わった。

……言えるわけない。

どうっすかなあとしばらく考えて、目の前にいい題材がいたと手をうつ。

「親に教えてもらったんだよ。ちっちゃい頃からね。それで、親が死んでから街に出てきたわけ」

イーティを見て親であるエスセリアレを思い出した。

「親に？ 名前は？ 有名な方ですの？」

「有名じゃないぜ。コウキっていうんだ」

これはまじなハルトの父親の名前だ。

「コウキ……知りませんわ」

当たり前だ。

知ってたとしても別人だ。

わずかに怪しむように観察してきた。

「戦いに関しては結構自信はあるぜ」

「既に現場は見てますわ。ですが、普通一人でCランクのモンスターは倒せませんわ」

「普通って何？ 勝手に普通の枠に収めないでくれる？」

地球の人間であるハルトはこの世界から見たら異常だ。
ハルトは自分がこの世界の人間ではないと暗に告げる。

「ですが、私だって負けませんわ」

なんで競おうとしているのか分からない。

「負けるって。自衛さえできりゃ、問題ないだろ」

ハルトにとって戦いは相手を傷つけるものではなく、自分又は他人を守るためのものだ。

誰かと比べる物ではないのだ。

しかし、イーティはハルトの言葉に首をふる。

「私は世界最強になるのが目標ですわ」

きっぱりと言う。

ない胸を張るわりには迫力がある。

ハルトはその空気に飲み込まれ何も言葉を挟むことができなくな
った。

たぶん、彼女が無理して一人で依頼を受けたのもそういうのが理

由なんだろう。

何で彼女がそんな無茶をするのか。理由は分からないが、聞くつもりはない。

深く関わりたくない。

目の前の人間は自分とは違う。

（前に進んでるイーティ。俺は……）

足踏みしているだけだ。

「そうか。がんば」

「言われなくても、ですわ」

高笑いをあげそうなぐらい顔には自信が満ちていた。

イーティとはあまり相性がよくない。

最強を目指す、イーティ。帰るために保身のみを考えるハルト。進む道が違いすぎる。

さつさと依頼をクリアして帰る方法を探そうと決心した。

「それと、助けてくれて本当にありがとうございました」

丁寧にお辞儀をして部屋を後にする。

ほんと、性格いいよな。

ついてるよ俺は。こっちの世界に来てから大凶は引いてないんだもんな。

凶くらいな引きかけたけど、あれはノーカウントだ。
はあとニヒルな笑いを浮かべる。

11話 違い

こつちの世界に来てからハルトは早起きになった。

正確にはならざるを得なかった。朝はレングに叩き起こされ朝食前に訓練。

朝食を終えたらそのまま僅かな休憩を挟むが夜までずっと訓練。

夕飯食べたら食後の運動。

強く慣れたのはいいが、毎日ボロボロだった。

集落からでた今も早起きなのは理由がある。

夜遅くまで起きていてもやることがない。

地球ではゲームなどでむしろ夜の時間を延ばしてもらいたいくらいだったけど、こつちにはそういった娯楽がない。

魔石を利用した電球のようなものがあるので夜遅くまで起きていることは可能だ。

実際エスセリアレは昨日の夜は随分と遅くまで仕事をしていた。

寝巻き用の薄手の服——簡略化された浴衣のようなもの——のままだギルドの屋上に向かう。

ギルドの屋上には物干し竿がある。

エスセリアレから使っていていいと許可をもらっていたので夜のうちに一張羅を洗って干しておいたのだ。

太陽はまだのぼっていないが空は明るみ始めている。

鳥の声が聞こえたりするのは地球と変わらない。

気分をよくしたハルトは体を動かす。

といっても激しいものではなく準備体操のようなもの。

いっちにー、さんしーと声に出して身体を捻ったりする。

朝の涼しく綺麗な空気の中での運動ほど心を癒す物はない。

心も体もリフレッシュをしたハルトは干してあったシャツとズボンをもって部屋に戻る。

軽くタオルで汗を拭いてから、愛用の衣服に身を包む。

やっぱりこれが一番落ち着くとハルトはかつこうつけてみる。
こちらの世界の服も悪くはない。

生地は地球にはないモンスターの毛皮を使用したものが多いが、
どれもいい生地で肌を傷つけることはない。

現在時刻は大体午前五時くらいか。

時計がないのはやはり不便で買いたいと思うのだが結構値が張る。
バックパックと同等か、それ以上。

なくても困ることはないの、買うのは先延ばしにしている。
出発はかなり早い。

今日の日程は朝一番のハルカニア北入り口にあるスクール行きの
馬車があるので、それに乗る。

ここから北の位置にあるスクールはこの数倍大きい街だそうだ。
ハルカニアもちっちゃくないのに数倍大きいとなると……想像が
つかない。

素材用のバックパックをズボンの右ポケットにしまい、食料用は
左ポケット、アニメスブレードは腰に差す。

準備は整った。

ハルトは部屋を出て、静かな廊下を音を立てないように歩く。
階段にやってきて、三階から一階まで降りる。

すでにそこにはイーティとエスセリアレが待っていた。

エスセリアレは優雅に背筋を伸ばして、立っている。

相変わらず所作の一つ一つが美しいのだが、本性を知っているハ
ルトはすごい猫かぶりだな程度にしか感じない。

一方のイーティは眠そうに欠伸を手で隠したり、長い髪の所々の
寝癖を必死に手で押さえつけたりと急がしそうだ。

「あら、寝坊しなかったのね？」

ギルド一階の壁にかかっている時計が指す時間は？。つまり五時
だ。

うん、ある程度はあつてた俺の勘。

ハルトは時計のない生活を長く送っていたおかげで今何時くらいかなと分かるようになっていたのだ。

なくても困ることはない、進化のようなものだ。

「まあな。でもあんたは確か結構遅くまで何かしてたよな？ 眠くないの？」

「あら、氣遣つてくれてありがとうね。でも、私は問題ないわ」

上から下までを眺めるが、確かに元気そうだ。

「イーティは問題ありそうだけどな」

「イーティは寝坊したから叩き起こしたわ」

叩き起こすって言葉そのままなのだろう。

吹き飛ばして起こした可能性もある。

ぶるぶると震慄しんりつがハルトを襲う。

しばらく話をしていたが、エスセリアレが時計を見る動作に気づく。

「そろそろ時間ね。私は仕事があるからここまでしか見送れないから……イーティをよろしくね」

にこつと大抵の男がノックアウトする艶然をハルトはさらりと流して、「わかった」と返事をする。

「イーティ、行ってきなさい。……もう、悪戯はしないわよね？」

悪戯といったときのエスセリアレの表情がやけに怖かった。

猫かぶり怖い。普通の猫な女の子がいいな。

ハルトは獣人の女の子を思い出す。

「い、イエスですわ。ええ、もうしませんわ。ええ、……たぶん」

「何か言ったかしら？　最後に聞き捨てならない言葉が耳に残ったのだけど？」

余計な抵抗心を見せないでくれ、イーティ。

ハルトはこんな場所で一方的な虐殺を見たくない。

「な、なんでもないですわ。それじゃあ、行ってきます」

「行つてらっしゃい。風邪には気をつけるのよ」

「分かりましたわ、ママ」

「だから、ママはやめなさい！」

家族っていいよな。

今俺の家族はどうなっているんだろう。

ふと思った。

ハルトのやりたいことを優先してくれるいい父母で。今、どうしてるんだろうな。

俺のことを探してくれてるかな？

二人のやりとりを見ていたハルトはより一層地球に戻りたい気持ちが強くなった。

「んじゃ、あんたのお子さんはしっかり送り届けるよ」

ハルトは人に頼られることは嫌いだ。
頼られる＝信頼するということになる。

ハルトには信頼に答えるだけの力はない。肉体面ではこの世界においてハルトは最強に近い存在だ。

だが、肉体と精神の強さが違いすぎる。
でも、今回だけは頑張ってみよう。

誰かが傷つかないで済むのなら――と。
目の前の家族の絆が引き裂かれないように努力しようと思った。

「よろしく頼むわ」

エスセリアレの信頼した笑顔を受けて。

やっぱり頼られるのって苦手だなと感じた。

並んで外に出たハルトは、道が分からないのでイーティに任せて後を追う。

「そっぴゃ、イーティはいつの間に準備を整えたんだ？」

昨日はエスセリアレに説教をくらっているところしか見てなかったハルト。

「ママが、準備をしておいてくれたのですわ」

「へえ」

さすが、『ママ』だな。

くつくつくと笑いながら、ハルトはイーティの装備を見る。
ドラゴンと戦ったときにつけていた剣を腰に下げている。

鎧は壊れたのか、箆手だけを装備したすごい軽装だ。

ハルトは人のことなど言えた身分ではないが、心配になってくる
薄い防御膜。

「ちゃんと感謝しろよ」

「分かってますわ……だから、ここで働きたいのに……」

「働きたい？」

そういえばこの街に来たのも母のギルドに入りたくて、だったな。
随分と先を考慮しているイーティから目を逸らしたくなる。

「小さい頃にママに拾ってもらってそれからずっと迷惑かけてばっ
かだったの……だから、力になりたくて——」

「結果迷惑かけた、と」

「うぐっ」

何かが詰まる音を出したイーティの方は見ずに、ハルトは……。

「別に、悪い意味でいったわけじゃねえぜ？ 俺だって、たぶん同
じようなことやったと思う」

周りの人を見て、周りの人の失敗したところは実行せず、成功し
たところだけを実行する。

今回、イーティが成功していたらハルトはどこかで同じようなこ
とを行っていたはずだ。

失敗は怖い、失敗はすべてを無に帰す。

だから、今回のイーティの真似はしない。

「そう、ですか？」

「まあな。難しいこと考えなくていいんじゃないのか？ できなければ別にいいじゃねえか」

ハルトはたぶん、恐れているんだ。

イーティは夢を持っていて、そこに真っ直ぐに進んでいる。

やり方は間違えていたかもしれないけど懸命に一途に。

でも、ハルトは——目的はあっても夢はない。

地球に帰りたいのは、色々理由はあるが故郷だからが一番適していると思う。

そして将来の夢なんてものは一度も持ったことはない。

夢を持つ人間が羨ましくて、妬む人間がハルトだ。

将来の夢なんて誰かに話したりしたくないし、そもそも話せない。イーティはハルトのないものをすべて持っている。

それが、羨ましくて怖かった。置いてかれるような錯覚を感じた。だから、自分と同じように前に進まず、足踏みさせるためにさっ

きの冷水を浴びせるような言葉が口から出たのだろう。

——最低だな、俺。

力はあるても心は弱い。

力があることさえ、ハルトには恐怖の対象だ。

「できなければ、別にいい。ですわ？」

「語尾がおかしーぞ」

ハルトはいつものキャラを演じるためにニヒルな笑いを浮かべる。そもそも、ハルトが弱いのはこれがすべてかもしれない。

自分の感情は決して表に出さない。

いつも演じているへらへらしたキャラはすべて本当の自分を隠すための仮面のようなもの。

だからこそ自分の感情を前に出す人間がバケモノみたいに感じるのかもしれない。

ハルトは道を知らなかったがイーティよりも前に歩き出す。

後ろにいたくない。物理的にでも自分の方が上の人間だと証明するためにひたすら先を歩いた。

「それは、ちよつと違つと思いますの」

ハルトは、無視すればいいものをイーティの言葉に振り返る。

「できなければ、別の方法を模索する。失敗が怖くて前に進めないのは臆病者ですわ」

——臆病者。

ハルトに対して言ったのか、イーティが自分に言ったのか分からないが、ハルトの心に深く残った。

剛毅（剛毅）な性格のイーティには意味のないことだったらしい。

「失敗が怖くないのか？ 図太い神経だねえ」

「なら、ハルトは失敗したらすべてあきらめるんですの？ そんな臆病な人間なんですの？ だとしたら、少し拍子抜けですわ……ドラゴンを倒した姿はかつこよかったですのに」

「臆病、ねえ」

臆病が悪いこととは思えないけどなと言いつくを作る。

戦いでは適度な臆病は必要だ。無鉄砲に死を恐れない戦い方では一生かかっても強くはなれない。

事情を何も知らないくせに好き勝手言わないでくれと論駁ろんぱくしてやりたいが、それはハルトも同じだ。

何も知らないでイーティと会話した時点でその権利はない。

「ハルトは……」

妙に気落ちした声のイーティからハルトは視線を外す。

顔を見られたくなくて、相手の顔も見えていたくなかった。

「いえ、なんでもありませんわ」

自己解決したのか、それ以上は聞かずにハルトの横に並び案内を始める。

後ろから追うわけにも行かずに前に抜き出るわけにもいかず、隣でずっと色々なことを考えていた。

12話 『スクリーム』

馬車には既に人がいた。武器や防具をつけていることから、冒険者だろう。

馬車には片側からしか乗ること場所がなくそこに人が並んでいる。窓の枠のようなものがあるが窓ガラスはなかった。

運賃を払い、馬車に乗り込みぐるっと見回すようにして人数を数える。

ハルト達を合わせて七人。

人数としてはちょうどいい。

大きな馬車でまだ数人なら乗れる余裕がある。

これ以上増えると狭くて息苦しくなりそうだが。

運賃を受け取った運転手は細々とした弱そうな男だ。

ゴブリンにさえなぶり殺されそうだ。

出発まではまだ時間はある。

とっとと出発してほしい気持ちはあったが、個人の意見を押し通すわけにはいかないのじっとしている。

イーティとは少し話にくい空気が流れている。

どうにかしようとも思うが、同時にどうせスクールに着くまでなんだからという後ろ向きな考えも浮かぶ。

ダメダメだな、俺。

ハルトが自分でもわかるほどにうだうだと考え事していると。

「おい、なんで俺様がこんな窮屈な馬車に乗らなきゃいけないんだ
！！」

外からの憤怒の声が馬車に響く。

馬車にいた全員が顔をそちらに向け、ハルトも倣うように顔を向ける。

そこには、ガラの悪そうな格好をした上半身裸の男がいた。背中につけている斧がこちらに見えることから、俺が見えるのは相手の背中だけ。

ただ、男の両手にはひ弱そうな男が掴みあげられている。あれは、運転手の人だ。

俺は、男の隣にいる女の人に目が移る。瞳の色がない。助かることはないという完全なあきらめ。俺の身体に嫌悪感が走りそれ以上は見えていられなかった。視線を外す瞬間に見えた首輪を見て、すべてを理解した。

（奴隷……！）

話程度は聞いていたが、生で見たのは初めてだった。

ハルトはこの街で奴隷を販売している店に行っていないが、この街にもある。

奴隷は冒険者の疲れを癒すものという認識があり、必要悪のようなもので認可されている。

周りの人も男が奴隷を持っていることを確認して、驚きの声を漏らしている。

冒険者の誰もが奴隷を持っているわけではない。

現に馬車の内部にいる冒険者は誰一人として持っていない。

奴隷は、高い。

奴隷は安いのなら二十万ザールほどだが、普通の冒険者には手が出せる代物ではない。

奴隷を持っているということはあることを証明する。

強さ。

金を稼ぐ一番簡単な方法は高ランクのモンスターを倒すことだ。現にハルトは数個の素材で十万ザールを稼いだ。

ハルトはあれだけあつさり倒せるが普通はあんな風にはいかないのだが。

「そ、その。そういうルールがあるので……」

軟弱な運転手は一応の抵抗を見せているが、男の体格に萎縮して泣き出しそうだ。

「うるせえよ。おい！ 中に乗ってる冒険者達！ 殺されなくなったら、さつさとでやがれ！」

男は、運転手から手を離してこちらに向かってくる。ズボンに手を突っ込んでから銀色のカードを取り出す。

「Bランク……」

隣にいるイーティが呟いた。

Bランクということは上から三番目。

馬車にいる人間は全員愕然としながら出口に近い人から出て行く。ハルト達もすぐに外に出る。

ハルトは正義の味方ではないので、何もせずに傍観する。問題ごとを起こすのは嫌いだからだ。

「つたく、さつさとしろよデメエッ！」

「うつ……」

最後の一人が下りるときに蹴られる。

ハルトはうつと目を逸らしたが、助けには入らない。

ハルト以外のものも抵抗するものはいない。冒険者間で揉め事が

起これば当事者同士でケリをつけるもの。
そして、こちらはいてもDランク程度の人間しかない。
相手のランクに怖気づいている。

「ここが五大ギルドの一つが治めてる街だよ。田舎臭くて気もちわるいぜ」

男は唾を吐き捨て、馬車に向かう。

五大ギルド。

ギルドの中でも優秀な五つのことを言う。ここにはギルド本部も含まれている。

これから行く学園ギルドはもちろん五大ギルドの一つだ。

さらにギルド『エスセリアレ』とその二つの計五つだ。

残りの二つをハルトは知らないが大して興味はない。

昔は四大ギルドだったが最近新たに一つ増えた……揉め事大好き
の迷惑ギルドが増えたという話をハルトは思い出す。

「今の言葉を取り消しなさい！」

ハルトは頭を抱えた。

イーティの奴、面倒な事に関わりやがって。

ついでだけど護衛を受けているのだからハルトも必然的に関わる
ことになってしまふ。

変に逆撫でるようなことはしないでくれよとハルトは念じる。

「ああん？」

男は不機嫌そうに顔をこちらに戻し、向かっていた足を止める。
言葉の発信源を探すように端から睨みを利かせていく。

イーティはわずかに身体を震わしながら決心するようにもう一度

激高する。

怖いなら、やめろよ。強がって何になるんだよ。

自分の意志は押し止めれば面倒事に巻き込まれないんだよ。

もつと利口に生きてくれ。みんながみんなお前みたいな奴じゃないんだよ。

また、自分との差にいらつきながら耳を傾ける。

「だから、この街を馬鹿にするような発言を取り消しなさいって言うてるんですわよ！ 筋肉で耳つぶれて聞こえませんか？！」

ふっとハルトは思わず笑いを堪えそうになる。

確かに男は筋肉が多く首が埋まっているように見える。同様に耳もつぶれているように見える。

「んだ、テメエ。俺を誰だと思ってるんだよ。ギルド『スクリーム』の人間だぞ？ そのBランクだ。テメエは……どうせ生温いギルド『スクール』の人間だろ？」

ギルドカードを手でもてあそびながら自慢する男。

（ギルド『スクリーム』？）

確か揉め事大好きの迷惑ギルドがそんな名前だった。

「ギルド『スクリーム』。五大ギルド……」

イーティが小さく口を動かす。

五大ギルドか。関わりたくない度が跳ね上がった。

十代の冒険者は多くが、ギルド『スクール』に所属している。

イーティの年齢を予想してそういったのだろう。

「スクールは、生温くなんてありませんわ！ スクリームのような評判の悪いギルドに言われたくありませんわよっ！ あんたみたいな下衆な男に馬鹿にされる謂れは、ないですわっ！！」

『下衆』に敏感に反応した男は顔に眉を寄せて顔を顰める。

冷静な態度を崩してモンスターに相對するように殺気を放つ。

ハルトは全然大丈夫だが、周りにいた人間は身体を抱きかかえるように竦んだ。

イーティは、感情が昂ぶってはいるおかげが動けなくなることはないようだ。

「おい、その女。よくみりやそれなりの顔つきしてんな。この奴隷は胸はあるが顔はあんまりよくなくて退屈してたところだ。テムエは胸はないみたいだけど……奴隷にするには十分だな」

げらげらと嘲笑を浮かべてイーティに近づいていく。

拳を鳴らしながら威圧するようにゆっくりとした動き。

イーティは今になって放たれている殺気に気づいたのか。急に足元をふらつかせて、後退する。

「テムエを使って『スクール』に文句でも言ってみるかね」

何かを画策しはじめた男にイーティは慌てて否定する。

「『スクール』は、関係ありませんわ……！」

「ああ？ テムエは、いったじゃねえか。『スクリームのような評判の悪いギルド』ってな。これはどう考えてもギルドに対して喧嘩をふっかけているよな？ おい、そこに突っ立っているお前もそう思

うだろ」

おいおい、こんなところで話題を振らないでくれ。

ハルトも周りの人間にあわせるように地面にへたりこんでおけばよかったと後悔した。

それと同時にこれ以上話し合っても終わりが見えないと察した。変なことというなよとハルトの方を睥睨する男に俺は肩を竦ませる。

「つまり言いたいのはギルドに入っている人間がギルドに入っている人間に喧嘩をふっかけるのは悪いことなんだろ？」

「ああ」

同然とばかりに頷く。

ハルトはこれから先の面倒な生活になることを半ば予想して。

「なら、どこのギルドにも所属してない俺なら問題ないだろ？」

同時に男の顔面に靴先を埋める。

瞬間移動に近い高速の動きに男は反応できるわけもなく、身体を宙へ。

「俺は臆病で面倒事は嫌いだけどさ」

空から落ちてくる男の方に向きながら。

「美少女無視するほど野暮な人間でもないんだよ……」

ふっとかっこつけてみるハルト。
やっちまったあと内心で涙ぐむ。

それに、依頼をされて報酬ももらっちゃってるしな。

実際は依頼だから助けたが九割だ。

どたと男が背中から落ちる音と残る冒険者の歓声が同時に響き渡った。

13話 スクール

男を放置して、すぐさま馬車に乗り込み出発したハルト達は何の問題もなくスクールについた。

馬車の中でハルトは他の冒険者からかなり慕われ、いつかギルドを作ったら誘ってくれとか言ってくる始末。

ハルトはうんざりしながらも丁寧にすべてを断った。

スクールのギルドはかなりの人気を誇っているのは言わずもがなだろう。

冒険者に憧れる十代の人間はほとんど全員がこのギルドに所属している。

冒険者になりたくても、一人では何をすればいいか分からない。迷える人たちにとってはこれほど好条件のギルドはない。

誰だって、道を示されれば無意識のうちにそこを通る。

ハルトも異世界に帰る方法がはつきりとした道としてあれば真っ直ぐそこを歩いていく。

冒険者としての道を教えてもらえるギルドスクールが人気がでるのは当たり前のことだった。

ハルト達が来ることは伝書鳩ですでに知らされていたのか、でかい学園について学園長の部屋へすぐに通される。

通された部屋は観葉植物が四隅にある。

部屋の床は石造りでだが、絨毯がしかれている。

茶色を基調とした絨毯は踏むのをためらわせるのほどに綺麗だ。

エスセリアレの仕事部屋とは違い、見えて楽しい部屋だった。

まず先にイーティが説教をくらう。

それからハルトへと話題が移る。

イーティは他の先生につれていかれ、反省文を書いている。

「君が、ハルトくんだね。噂は聞いているよ。僕はここのギルドを

治めるスクールだ。よろしく」

人当たりのいい顔つきでこちらを分析するように見てくる。
仕事柄か、それとも何か仕事を押し付けるつもりなのか。

ハルトの力量を測っているようなスクールさんの視線に晒され、頭をかく。

人にじつと見られるのはあまりいいものではない。

ハルトの所作で気づいたのか、スクールはすまなそうに頭をさげてくる。

「すまない。強い人を見るとつい分析してしまうんだ。どんな戦い方をするのか、どんな魔法を使うのか。つつい想像しちゃうだよ」

ギルドリーダーはおじいちゃんに近い男。

ほんわかとした空気で、詐欺師に引つかかりそうな気のいい人だ。
ハルトはつきり豪快で、「がっはっはっは」と笑いそうな貫禄のある人を想像していたのだが予想とは違っていた。

そんな人が戦闘狂。人は見かけによらないなとハルトは一步後ろに下がる。

「警戒しなくていいさ。もう、年だからね。魔法以外は全部が衰えて油断したらぽっくり逝きそうだからね」

「だったら、戦いのことなんか忘れて田舎に籠って余生を過ごしたらいいんじゃないですか？」

軽口を叩くがスクールは嫌な顔をせずに目を細める。

「それも考えたけどそれはつまらないじゃないか。って、今はいいかな、それは。それよりも君が身に着けている武器が気になるんだ」

けど……見せてもらっても構わないかな？」

初対面の相手にいきなり自分の得物を見せるのは気が引けた。それに、アニムスブレードを他人が抜いたときどうなるのか分からないので、むやみやたらに人に貸すことはしたくない。

子供のような期待したスクルの顔が怖いのも理由の一つだけだ。

「この刀、ちょっといわくつきなんですよ。触れないほうがいいですよ？」

嘘でもなんでもいいから武器に触れなくなるような理由を考えて手当たりしだいに言おうと決心する。

「アニムスブレード。モンスターの魂を封じ込めた剣。封じ込めたモンスターの魂により、剣は様々な力を得る。刃こぼれしないや手入れをしなくても常に最新の状態のままなどなど。君のはアニムスブレードだと思うのだが、どうかね？」

この人はアニムスブレードについて詳しいようだ。
ハルトは見開く。

レングはアニムスブレードについてほとんど知識がなかった。
魂を封じ込める程度しかなかったのだ。

「正解です。でもなんで分かったんですか？ 前に見たこととかわるんですか？」

スクルは好奇心を押さえきれないとばかりに鼻息を荒くして、それでも冷静に言葉をつむぐ。

「本物は初めて見るよ。答えは簡単、剣自体が放つ魔力が高い。そ

れと、エスセリアレは気づかなかったでしょ？」

「あ、そういえば」

ハルトの武器をはつきりと見ていた記憶はないが、スクールと同じくらいは見ていた。

だから、エスセリアレは気づけなかったのだらうと予想する。

「彼女は保有魔力が馬鹿みたいに大きいからアニメスブレードが放つ異常な魔力でさえも相殺してたんだ。魔法に対する抵抗力が高い人は気づけないけど、僕のような人は、ね」

まるで自分は弱いといっているようだが、スクールは弱くはない。

ハルトが今ここで刀を抜き放って戦いを挑んだとして勝てるかどうか定かではない。

ハルトもそれを理解しているからこそ余計に警戒している。

自分が勝った姿が浮かばないのだ。

彼の周囲は斬れる刃のように鋭い。うかつに近づけば体中に切り傷ができてしまいそんな錯覚を感じる。

（これが、年の功か）

彼の言い分から、大体この刀の正体に気づける人間のレベルが分かった。

ギルドリーダーに慣れるほどの魔力を持っていて、そしてそれが高すぎない人。

そうなると結局多くの人には分からないようなので安心できた。

「アニメスブレードって俺詳しく知らないんですけど、何か知ってますか？」

「知らない？　なら君が今持つてるそれはどうしたんだい？」

本当は話したくないけど情報を得るための代償だ。

ハルトは森であったことを所々省きながら説明していく。

一頻り話したあと、スクールは怪訝そうに顔をしかめる。

「何か、問題でもありましたか？」

人から勝手に武器を奪ったことだろうか？

それとも見殺しにしたことだろうか？

思い当たる節は色々あるので不安だ。

もしかしたらハルトはこの世界の犯罪者になってしまつかもしれない。

迂闊に話しすぎたかもと後悔する。

中々何も言い出さないスクールさんがついに口を開く。

「少し、喉が渴いたね」

ずこっ！

ハルト顔面からめり込まんばかりにこけた。

何も解決していないのに、心に余裕が生まれる。

喉の辺りをさすっているスクールさんは部屋の外で待機していたらしいメイドさんと呼び飲み物を要求する。

メイド。

この学園には何十人もメイドがいた。

そしてどの子もランクが高い美人揃い。

黒を基調としたワンピース状のもので、所々に白いフリルがついている。

胸から腹にかけては白いエプロンドレスがついた至って普通のも

のだ。

それでもハルトは心が満たされていく。

メイドってその言葉を聞くだけで癒される。

さっきみたメイドは愛想のある笑顔を振りまく太陽みたいな子だった。

元気なメイドはいい。

ぐっと親指を立ててメイドの動きを追う。

快活な女の子が飲み物を持ってきて、置かれた飲み物にハルトは、鼻を引くつかせる。

「どうしたんだい？」

俺は机に置かれた木ではなく石か何かで作られたコップの中身を確認して、驚く。

お茶だ。緑色をしたお茶は湯気をあげてハルトの顔に張り付いてくる。

懐かしい。

「お茶、ですよね。これ？」

「そうだよ。おいしいよね」

「え、ええまあ」

「む、もしかして君もお茶はおじいちゃんが飲むものだと思っているのかね？ それは間違いだ。身体にいいんだぞ、お茶は」

食事だけでなく飲み物まで身体に気を配る時点でおじいちゃんじゃないのかとハルトは思ったが口には出さない。

長生きのこつだな、だんまりは。

「いえ、ハルカニアでは見かけませんでしたから」

「ああ、お茶は向こうじゃあまり取れないからね」

特産品か。

急に地球との距離がぐつと狭まった気がした。これなら、この学校にある図書館に寄せる希望が大きくなる。

だが、アニメスブレードのこともしつかり知っておきたい。

自分で扱う武器なのだから知らないことがあつて戦闘中に問題を起こしたくないからな。

「それで、アニメスブレードのことなんですけど……」

「ああ、そうだったね。問題だっけ？ 別にないよ」

ならなんで、あんな人の恐怖心を煽るような顔つきだったんだ。

喉が渴いただけでは説明できないぞ。

「ただね、君が倒したモンスターがSランクだったのが驚きだったんだ」

確かに初戦闘でSランクのモンスターを倒すのは至難の技だ。

人間に身一つで空を飛べというのと同じだ。

まず一人では無理。ハルトは大男が弱らしてくれたのと他に氣をとられていたことから勝てたんだ。

「アニメスブレードに封印する魂は弱ければ弱いほどラクなんだ。だからランクFとランクSのモンスターを倒すならランクFのほうがいい」

「でも、時間さえかければ何度でもできるんですよ?」

「いや、無理なんだ。魂を封印する前の剣は堅さとかが脆いというわけではないがきっかり一戦闘を終えたら必ず壊れるんだ。又は魂を封印して最強の剣となるかのどちらかなんだ」

なんていう鬼畜。

あそこにいた大男は欲を出し、強いモンスターの魂を封印に来てそして負けた。

欲を出しすぎてはいけないいい例だな。

「アニメスブレードの元って、なんなんですか?」

ずっと知らない俺の剣ができるまでの工程。

「作り方はある。ロックガマルというSランクモンスターが稀に落とすロックガマルの心が必要なんだ。さらにロックガマルのうんこそれに腕利きの鍛冶屋。すべてを終えたとしても最後にモンスターの封印が待っている。莫大な金がかかることや獣の魂を封じ込めることの大変さから過去に一つや二つしか作られていない伝説級の武器だ」

「どちらも既にどこにあるかわからないけど」と付け足して続ける。

だが、ハルトはこの剣が風化したりしないことは知っているし切れ味が落ちたりしないのも知っている。

本当に作られていたとしたらまだこの世界のどこかで解き放たれる時を待っているはずだ。

（悪い奴の手に渡らなければいいな）

「アニメスブレードはもういいかな。確か図書館も見たいんだよね？ 何か調べたいことでもあるのかね？」

「ええ、まあ……」

異世界について調べたいというのはどうなんだろうな。
ちよつと確かめてみよう。

「スクールさんは異世界って知ってますか？」

まずは触り程度に。ここで首を捻られたらその時点で話を打ち切る。

「異世界、かい？ そういえばギルド本部で今そいつの研究が行われているっていう話は聞くなあ」

まじで！？

一気に帰る方法に近づいたような気がしてハルトはスクールに近寄る。

「知ってること全部教えてくれ、ください！」

「ええ！？ つといても僕も詳しくは。あくまでそういう噂を耳にただけだから」

「なんだー……」

がつくりと頂垂れてしまう。

期待が一転愕然に。

ハルトの顔を見て焦ったようにスクルは手をわたわたと振る。

「でも、図書館には異世界についての本も結構あったから見てみると何か分かるかもしれないよ?」

すぐに切り替えようとハルトは顔をあげる。

折れていた腰を戻してぴんと立つ。

「そうですね。図書館ってどこにありますか?」

「ああ、メイドに案内させるよ」

ハルトはその後色々ナンパ紛いのことをして元氣メイドと仲良くなりながら図書館に着いた。

14話 図書館

ハルトはまず図書館全体に目を曝す。

壁に備え付けられた本棚や、所々にも本棚があり本棚と本棚の間には道のようなものができている。

さらに図書館内に階段もあり、大きなテラスのようなものもある。天気の良い日にテラスで本を読むのは気持ちがいさそうだ。適当な本棚に近づき本を抜き取りぱらとめくってみる。

古い本にある特有の匂いが鼻孔から侵入してくる。手で撫でてみるがほこりを被っているようには見えない。

元氣メイドとは図書館に入る前に別れた。

全体を見ての感想はやっぱ本がある空間は苦手だなだった。本を見ていると頭が痛くなる。

勉強と縁をなくしたいハルトは本を読むことが滅多にない。適当に本を探していたが、見つかる気配はない。

図書館を管理する司書らしき人が入り口にいたのを思い出して、聞きにいく。

「聞きたいことがあるんですけど……いいですか？」

司書さんは手元から顔をあげる。

最近ずっと思ってたことだけど、異世界の女性は基本綺麗だよなきりりとした瞳を覆う眼鏡が特徴的な司書さんは、親しみやすい声で、

「なんでしょうか？ 本を探しているのですか？」

と言った。

丁寧な受け答えに好印象を受けたハルトは、流れを断ち切らない

ように続ける。

「異世界に関する本とかつてありませんか？ 俺そういうの興味が
あるんですよ」

「……異世界、ですか。最近は異世界について研究が進められてい
ましたね。あなたもそちらの方面に将来進むおつもりですか？」

好意的な物言いにハルトは笑む。

異世界が研究対象。

いったいギルド本部は何を企んでるのか。

異世界に行けるようになったらどうするつもりなのだろうか。

「まあ、そんなところですかね」

嘘はついていない。

将来異世界に帰るつもりなんだから研究するべきだ。

女性は目を瞑って、なにやら呟き始める。

朗々とした声が終わるまで耳を傾ける。

何かの魔法の詠唱のようだ。

「こちらです、どうぞ」

案内を始めて先に歩いている司書に並ぶ。

「今のつて魔法ですか？」

「はい。図書館は初めてですか？」

「ええ、まあ」

地球では小学校にある図書室がハルトにとっての最後だ。授業で使う以外、自分の意志で訪れたのは数年ぶりだ。本とかはラノベ以外あまり読まないハルトだ。読書感想文は漫画ありにするべきだと思う。

「司書になるためにはサーチの魔法が必須条件なんです」

「サーチ？」

「物の居場所が分かる魔法です。私はこれを覚えてから家で物をなくすことはなくなりました。便利です」

今の台詞後半知らない。

司書は頬を僅かに染めて、

「後半は忘れてください」

僅かに早歩きになる。

なるほど、後半のことはよく覚えておかねばと脳内にメモする。

「着きました。このスペースには何回も異世界という単語が含まれている本ばかりです」

「ありがとうございます」

お礼の心は忘れない。それがどこの世界でも。怒られ慣れているイーティのぴしとしたお辞儀を頭に浮かべながら腰を折る。

「いえ、これが仕事です。失礼します」

業務的に言葉を残して司書さんは去っていく。

司書さんからは早々に視線を外し、ハルトは目の前の本棚を見上げる。

多くはないが、少なくともない。

全部に目を通すのは今日中では不可能だ。

流し読みで気になる箇所だけを確認する方法なら三日ほどあれば
終わりそうだ。

ただそれはあくまで集中力が持って一日中イスに座り続けるなら
の話。

あいにく、ハルトにそんな作業はできない。

始めれば、一時間程度は持つけど一時間が限界だ。

先が長そうだが、それでも目の前にやるべきことがある。

何もない場所を手探りするよりかはましだ。

この本の中にきっかけ程度でいいので見つかることを祈りながら、
本を手にとって開いていく。

六時間後。

ハルトは手に持っていた本のタイトルをもう一度確認。

読後の感動に耽っていた。

『異世界冒険日記』分かりやすいタイトルのこれはこの世界の娯
楽商品——小説だ。

気になったので手に取ったら面白くてどんどん読んでいつてしま
った。

内容は主人公がこの世界の人で異世界に迷い込むというもの。
今のハルトの逆バージョンだ。

あとは今のハルトと似たような状況だ。

帰るために旅に出て様々な苦難を乗り越えて無事元の世界に帰れた主人公によかったなあと感情移入しまくってた。

読み終わっての感想はよかったね帰れてというものだが、ハルトはやっちまったと額に手を送る。

俺は、何のために……図書館に籠ったんだ……！

この世界の作品に感動するためではなかったはずだ。

「そろそろ、夜になりますけど……まだ残っていきますか？」

声がしたと思ったら背後に司書が立っていた。

気配が全くしなかったことに驚きた。司書になるには気配を断つスキルとかも必要なのかもと肝を冷やす。

司書の声によりハルトは意識を現実に戻した。

そして、図書室の窓の外を見て、口をあぐり。

太陽が落ち始めて夕陽をはなっていた。

夕陽もそろそろ完全に沈みそうなくらいだ。

つまり、夜になる。

いつの間に？

俺は時間を飛んだのか？

戸惑っているハルトに司書はくすくすと口元に手をやる。

「よっぽど本が好きなんですね。途中何度か話しかけましたが、全部無視されましたよ？」

「え……そのすみません」

「いえいえ。本を好きな人は好きですよ？」

いや、本別に好きじゃないけど。

だけこの人に好いてもらえるなら嘘でもついておこう。

「まあ、本には色々詰まっていますからね。読んでて疲れるときもありますけど」

「そうですね。そういえば先程学園長のメイドが『宿はどうするんだい？ 学園に泊まってく？』と伝えに来ましたよ？ 会いに行かれたほうがいいのでは？」

宿とか考えていなかったハルトには嬉しい申し出だった。

「それっていつ頃ですか？」

司書さんは悩む素振りを見せてから、

「一時間ほど前ですかね」

一時間か。

学園長に会うためにまずは読んだ本を元に戻していく。
読むだけ読んで片付けていなかったのも、結構な本が机に積み重ねていた。

だけど、司書も手伝ってくれたのでそれほど時間をかけずにしまい終えた。

「ありがとうございます」

「いえいえ。それじゃあ」

司書さんと別れ、図書室を後にした。

学園長室までの道はうる覚えだけど問題ない、と思う。

あまりにも大きいが学園長室は階段を登った先にあったので、まずは上へ目指す。

来るときはメイドと話していたので周りにもあまり目が行っていなかった。

今改めて周囲に意識を送ってみると、似たような服を着た人がいた。

ハルトと同一年程度のこの学校の生徒。

男二人と女一人のグループがこちらを興味津々とばかりに目を注いでくるので少し恥ずかしい。

人に見られるのはあまり喜ばしくない物だ。

それにしても、異世界の学校にも制服ってあるのなとハルトは驚嘆する。

男二人が似たような服を着ているので制服と認定していいだろう。軽く頭をさげてから、

「学園長室に案内してくれない？」

迷子じゃない。ただ時間の短縮のためだ。

心優しい三名は嫌な顔をせずに、案内してくれた。

ハルトがいた階層からさらに一つ上にあがる。

学園長室は四階にある。図書室は一階だから、階段を相当のぼった。

三人に感謝をして学園長室に入る。

ノックをすると、「どうぞ」と声がしたのであける。

「やあ。どうだった？」

図書館での収穫のことを聞いているようだ。

ハルトは嬉々として『異世界冒険日記』について話した。

学園長も知っていたようで話に花が咲き、さらに『異世界冒険記』

を知らなかった元氣メイドさんに二人がかりで読んだほうがいいと
いい続けた。

最後には「あ、あとで読んでみます」と好感触な返事を頂けた。

「それで、今日はここに泊っていくのかい？」

「えっと、タダなら」

ハルトの現金な言葉に学園長は面白そうに腹を抱えた。

「はっはっはっは。もちろんだよ。そこで、イーティの部屋の近く
が空いているので、そこを使えるようにしておいたよ」

イーティか。

同じ部屋ではないから気にすることではないと思うが、あまり会
いたくない。

喧嘩したわけではないが、仲違いしたままなんだよな。

二人だけで合うとちよつと気まずい。イーティは対して気にはし
ていないようだけど。

表面上を取り繕うのは慣れているので上っ面だけで話すことはで
きる。

考えが合わない者同士が一緒にいるのは大変なのだから、あれで
いいと思うが。

「……寮ってことですよね？」

「ああ、女子寮だ。男の君には最高だと思ったんだけどな。ああ、
間違っても襲わないでね？ 僕が君を殺さないといけないから
ね」

マジだ。

口元は笑っているが両目はしっかりとハルトを威圧している。年こそいつているが、まだまだ現役ということか。

「用は、生殺しってことですか？」

「いやあ、そんなことは言っていないよ。ただ、余ってるのはそこぐらいしかなくてね」

タダで泊めてもらうんだから文句は言えないよな。そもそも男であるハルトにとっては、最高のシチュエーションだから文句なんてあるはずがないが。

「だからって女子寮の風呂とトイレは使わないでね。男子寮まで頑張って」

「遠いんですか？」

「あまり遠くはないけどぎりぎりまで我慢しているとトイレはまずいかな」

少し不便だな。

いきなりの状況が発生したら耐えられない。

「他に何かあるかい？」

「特にありません」

「なら、メイドに案内を任せるよ」

名前が挙がった元氣メイドは「はいはい」と元氣一杯な声をあげる。

15話 呪い

寮は、校舎から僅かに離れた場所にある。

校舎に負けない豪奢で立派な建物だ。

この街、本当に学園が大半を占めてるよな。

中に入ると、女子がたくさんこちらを向く。

女子寮だから、ハルトに対して懐疑的な視線が飛び交っている。

ハルトは落ち着かなくなってきたので、元氣メイドに話しかける。

「やっぱ、女子寮に男子って、まずくない？」

普通ならありえない。

「いやあ、まあ、大丈夫ですよ。私が面倒見ますし……あなたが泊る所は……くつくつくつ」

怪しく微笑む元氣メイドにハルトは一歩足を下げて頬を引き攣らせる。

泊る所に何があるんだよ。

ごくりと唾を飲み込む。変なことじゃなければと願わずにはいられない。

「部屋に何かあるのか？」

「聞いちゃいますかー？　なら、よろしい、教えてあげましょう」

こほんと咳払いを一つ。

「この学園の七不思議のひとつです。あの部屋は呪われる、と」

七不思議って異世界にもあるんだ。

一つ勉強になったが、呪いと放った元気メイドに眉を寄せる。

「呪い？」

「ええ。なんでもあそこに住んでいた寮生がダンジョンでたくさんのモンスターに襲われて重症を負ったんですよ」

「もしかして、その後に入った人も？」

「ええ。そりやもう一人の狂いもなしですよ。その部屋を呪われた部屋と決めたんですよ」

元気メイドは「私はアンデット系統のモンスターじゃないかなと思ってますよね」と呪いと確定するようなことをほざく。

「安易だな」

がちがちと歯と歯をぶつけながらハルトは踵を返す。
元気メイドにがしつと腕をつかまれる。

「どこに行くんですか？」

「いやあ、ね。やっぱり、この街の宿を借りようかなーって」

女子寮に男子なんて非常識だ。

他に理由なんてない。

急にそう思ったん。

元気メイドはキラリと瞳の奥を光らせて、からかってくる。

「まさか、怖いんですか？」

ずばりと心の中に発生した悩みを貫かれて、うぐつと怯む。

だが、女の前で幽霊が怖いなんて言えるわけがない。

ハルトはふ、ふんと鼻を鳴らして、変な勘ぐりして怒ってるよと態度を表す。

「怖い？ 俺は怖いって言葉の意味を知らないな。どういう意味だ？」

「つまり、平気ってことですよね？」

「平気さ。というか、俺何かにびびってるように見えた？」

「呪いって聞いた瞬間に態度が一変したもんですからびっくりしちやっただですよ。すみませんねえ」

にやにやと口の端をあげてくつくつと鳴らしている元氣メイドにハルトはやっちゃまったと額を押さえる。

変なプライド張らなければよかった。

幽霊は……怖い。ある一部の例外を除いて俺は幽霊が苦手だ。

元氣メイドが途中に混ぜたアンデット系統のモンスターだとしても嫌いだ。

あいつら魔法しか効かないし、光属性以外は大抵ダメージ軽減しやがるので倒しにくいのだ。

「部屋はこの先の奥です。ほら、あそこ。なんか嫌な感じしますよね？」

指差した場所は、なぜか黒みがかったように見えた。

ドアはしまっているが人にはあまりよくなさそうなオーラがぷんぷんしている。

暗く、閉じ込められた世界。

部屋の中を想像してため息が止まらない。

死臭がしてきそうだ。

ドアの前に着いたハルトはドアノブに手を伸ばすが捻るだけの勇氣はでない。

捻ったが最後部屋に取り込まれそうで怖い。

無数の手がドアを開けた瞬間に襲ってきたら元氣メイドを盾に逃げようと決心して、捻り開け放つ。

中は、綺麗だった。

整然とした部屋にはダンスや本棚が壁際に置かれている。

部屋はワンルームしかないが、かなり大きい。ベットが二つあることから二人用の部屋と推測できる。

さつき感じた肌を刺すような陰気なものは何もない。

鼻孔からいい香りが侵入してくるので、匂いに意識を集中する。

オレンジの香りだ。男が使う部屋としてはあり得ないフルーティな香りが部屋に充滿している。

「なんだ。いい部屋じゃねえか」

悩みがすべて杞憂で終わる。

「まあ、私先にこの部屋を整えておきましたからね。危険がないことは分かっていますよ。ここの寮生が立て続けに怪我をしたのは本当ですけど」

「……なら、不安を煽るようなことを言うのはやめてくれ」

元氣メイドは耳をびーんと立てるようにしてまた嫌なにやにやを始める。

今度は何だ。

部屋に何か仕掛けたのかこいつは、とハルトが危険に対処するために腕を自由にして警戒心を高める。

「不安、ですか？ あれれー？ 何に不安を感じてたんですか？ 私知りませんよー？」

とぼけたことを……！

目を瞬かせて何も知らないよとアピールしてくる。

につくき顔に俺は頭がきりきりと痛くなってくることを感じながら、話すことは何もないと無視を決めこむ。

何かを発してもたぶん言い負かされる。

相手を論破できるほどハルトは弁舌ではない。

黙りこんで逃げるのがハルトにできる現時点最高の道だ。

元氣メイドはそこからかつかうのにあきたのか事務的に話し出した。

「夕飯は食堂でとれます。今なら食べられますが、どうしますか？」

手でさすりながら腹の調子を確認する。ぐうと手を伝って音が鳴る。

答えは、体がだしました。

「食堂に案内しましょうか？」

「……頼む」

ハルトは学園の敷地を全く理解していない。

学園にいる間は決して長くはないだろうけど必要な場所は覚えた

ほうがいいよな。

いつまでも元氣メイドのお世話になるわけにもいかないな。

16話 女の口喧嘩

食事を終え、男子寮の風呂で体を流して部屋に戻った。

疲れもとれてふかふかのベットで伸びをしていたハルトは、何を
するでもなくごろごろしていた。

ハルトは今からやる必要があることを考えてみる。

刀の整備は必要ない。学園の生徒でないハルトは勉強をする必要
もない。

部屋にいる呪いも別に解決するつもりもない。

なんでもハルトはこの呪いを解決するためにこの部屋にいること
になっている。

学園の女子生徒は結構呪いについて、まいつていたのでハルトが
泊ることを一応は許されているらしい。

反発のほうも多いが、元氣メイドが常に見張っているという条件
つきで認可された。

ハルトに変なことはするつもりも勇氣もないので問題はない。

「部屋にいるのやめてくれない？」

ずっと壁際で置物のように立っている元氣メイドのほうへ顔を向
ける。

「いえいえ。私は気にしませんよ？」

「誰もあんたの心配はしてねえーよ！ あー、ほら。食事してこい
よ」

食堂にいたときもずっとハルトに張り付いていた。

風呂に入るときもずっと出口で待機していたようなので、彼女は

まだ食事をしていないはずだ。

「私、もう食べましたよ？」

「はあ？ いや、食事する時間なんてなかったじゃん」

「私小食で早食いなんですよ。ハルトさんの食事をとりに行ったときに数秒で食べましたよ？」

「……腹へらねーの？」

「それがメイドの力です」

そんなメイドを知らないぞ。

どれだけ優れたメイドでも自分の生理現象を制御できるとは思えない。

「なら、風呂に入ってこいよ」

とにかく一人の自由な時間が欲しい。

体を休めるだけでも一人でいるほうが気が楽だ。

「入りましたよ？」

「……もう、何も言わん」

ハルトが風呂に入った一瞬を狙って浴びたのだらうと当たりをつける。

この世界のメイドはバケモノだと心中でばやきながら、ベットを転がる。

部屋にいても大して休まらないので体を起こす。

「どこかに行くんですか？」

「ちよつと、散歩。この学園って木とかいっぱいあって気持ち良さそうだったからな」

寮に入る前に確認していた。

学園の外は草の地面——雑草がぼうぼうとしているのではなくちゃんと整備された——と、多くの木による自然に包まれた場所だ。

一度息を吸えば肺に溜まる自然の香り。

体を落ち着かせるには最適だ。

女子寮を出るまでは元氣メイドがついてくるのは仕方ないが散歩まで邪魔するなよと釘を刺しておく。

ハルトは着いてくる元氣メイドを見ながら一生慣れそうにないやと息を吐く。

寮の階段を下りて一階に行き、元氣メイドと一言二言話をしてから外に出る。

見上げれば澄んだ大氣の夜空の星は月の周りを踊っているかのよう煌めく。

何度見ても綺麗な星空だ。

女子寮からひとまず離れる。

かといってまだどこに何があるか分からない状態のハルトは女子寮が視界に納まる範囲でしか行動ができない。

それ以上離れると迷子になってしまい見知らぬ誰かさんに道を尋ねることになってしまう。

というわけで寮が見える近くの森のように多くの木が繋がっている一角にやってくる。

ハルトはそこで森からの自然エネルギーを貰うように両手を広げて息を吸い込むと、

「だから！勝手に行ったあなたが悪いんですよ！？」

好評ともいえる可愛らしい女性の怒り心頭の声に驚いたハルトは吸い込んだ息がどこか変な場所に入ってしまった、むせる。

なんだなんと、ハルトは騒がしいほうへと歩を進める。

「わたくし私は悪いと反省してますわ！　しつこいんじゃないですか？　この前のモンスター討伐試験で私にタイムが負けた腹いせじゃなくって？」

「な、な……！　ふざけないでほしいですね！　あなたは戦士タイプなのだから一対一の戦いなら有利なはずですよ。なのにタイムが三十秒程度しか変わらなかったむしろあなたのほうが落ちこぼれなんです！」

「だ、れ、が！　落ちこぼれです？　ふざけんじゃないわよっ！　あんたこそいつも男に艶笑浮かべて誘惑してたぶらかす変態色魔がつ！」

ハルトは、女同士の醜いもののしりあいを目撃してしまった。

というか、木の陰からこっそり窺っていたんだが……一人はイーティだ。

ただでさえあまり仲のいい状態ではないのにさらにひどくなるようなネタを見つけてしまった。

イーティと言いつている女は……どこかで見た覚えがあった。どこだったかは覚えていないが、あの胸には印象があるぞ。

暗くてよく分からないが茶色の髪をした少女だ。

胸がでかいが背丈はあまり大きくない、顔も幼いいわゆる口リ巨乳だ。

イーティは口調が崩壊しているのも構わずにさらにどなる。

「そんなんだつたらサキュバスにでも生まれてくればよかったんじゃない？ あんなみたいな尻軽女ならそっちのほうがお似合いよ。ですわよ！」

最後に無理やりお嬢様言葉をつけた！

ハルトはもうその口調やめたほうがいいよと助言してやりたかった。

一方的にまくしられた相手の少女は遠目からでも分かるほどに顔を引きつらせて、闇を彩るローソクの火のように顔を朱に染める。

「私は！ 誰にも秋波を送ってありません！ 勝手に相手が勘違いして告白してきたりするんです！ それに私には心に決めた好きな人がいるんです！」

へえー。そりゃ残念だな。

盗み聞きして落ち込む。

胸でかいし顔はさつき赤くなったときに見たが上の上くらいの可愛さだった。

「うるさいですわよ！」

「それはこっちの台詞です！」

二人は、顔をぶつけ合いながら睨みあい始める。

今になって後悔しているのは、二人の喧嘩を見なければよかったなというものだ。

さすがにこのままだとAランクモンスター並みの女同士の醜い戦いが始まってしまいそうなので、かなり不本意だが止めに入ること

にする。

一番あそこに割って入りたくない理由はイーティがいるから。もちろん喧嘩気味だからな。相手はそう思っただけでもハルトには苦手意識が生まれてしまっている。

イーティとちよつと仲が悪くなっているということさえなければもつと早くに止めに入っただけだ。

「お二人さん。もう、夜だぜ？ 静かにしような」

突然現れた乱入者に二人はびくりと身構える。

それぞれがそれぞれの武器に手を伸ばして瞬時に戦えるように。さすが学園で学んでるだけあるなと両手をあげて降参のポーズをしながら近づく。

「あ……！」

少女は俺の顔を見て、ぽつりと色めいた声をもらす。

イーティは「なんだ、ハルトですの」剣から手を離す。

「よっ、久しぶり。二人ともそろそろ寮に戻ったほうがいいんじゃないのか？」

ハルトが外に来たときには九時を回っていた。

門限があるかは知らないがハルトは忠告した。

こういったときに腕時計があれば楽なのにと胸奥で頂垂れる。

個人用の時計が欲しいことこの上ないがあれは高いので買ってももつと先だ。

今は自分の食費と宿賃を取っておかねばならないので無駄遣いはあまりしたくない。

「……確かにそろそろ門限にもなりますわね」

どこの世界にも門限はあるんだな。

イーティが顎に手をやって、それから思い出したように呟く。

「ハルトは、女子寮でしたわね？ ……生徒に変なことしていないですわね？」

「信用ないのね、俺」

「そうじゃありませんわよ」

がっかりだ、と俺が肩を竦ませながらイーティから体をそらす。

「この子は？ なんか顔を真っ赤にしてにやにやしてるけど？」

さっきまで言い合いをしていた少女はハルトの顔を食い入るように見て、それから顔を赤くしたり、頬を押さえながらいやんいやんと体を捻ったりしている。

少女は……おかしな子だ。

この世界は美人も多いが美人の大半が残念な部分を持っている。

いや、欠点がない完璧美少女を望んでいるわけじゃないが欠点がある少し可愛いものになればいいのにと思ってるんだ。

料理が上手じゃなくてそれでも手に絆創膏をつけて弁当を作ってくれるようなのがいいんだ。「あ、あんたのためにつくったんじゃないんだからねっ！」と弁当箱を寄こしてくれるようなものなら最高だ。

と、ハルトは現実逃避気味に妄想を肥大していると、「あの！」と少女がハルトの前に立つ。

「アンヴェルリュ・フランダと申します！ どうぞアンリュって呼んでください、私の勇者様！」

「私の勇者様？」

ハルトとイーティは揃って聞き返す。

何か知ってるかとイーティに顔を向けると、もしかしてとイーティは眉に皺を寄せる。

「サウザンドウルフに襲われたところを助けてくれた恩人」

「サウザンド、ウルフ……」

区切りながら言葉とともに初めてこの世界に来た日のことを思い出す。

そして、あの時に命からがら逃がした少女の顔を思い出す。

続いて、ハルトは今さっき自分を勇者と呼んだアンリュに目を向けて。

——思い出した。

あの時の少女だ。

「勇者様——」

アンリュは、我慢できないとばかりに飛びついてくる。

子供が親に甘えるような抱きつきをハルトは避ける暇もなくくらい、背中から地面に落ちる。

「あぐあっ！」と痛みの声をあげたが、次の瞬間にはそんなことを忘れてしまうほどに幸せなブツに気づいてしまう。

胸。

おっばいだ。ハルトがロリ巨乳と認めただけあって、その胸は爆弾だった。

ハルトの腹当たりに押し付けられる大きい二つのメロンは、変幻自在のスライムのように様々な姿に形を変えてハルトの理性に攻撃してくる。

一瞬で顔が熱くなっていく。

「勇者様、勇者様！あの時はありがとうございました！私はもう、感謝をしてもきれないくらいにこの再会が嬉しいです！」

「い、いや。俺も今すごく嬉しいけど……」

ハルトは再会じゃなくて胸の感触が、だけど。

離れてほしいけど離れてほしくない。

二つの反発する感情がせめぎあう。

この態勢はまずい。

身体中にぞくぞくと自分でも分からないものが駆け上がる。

このまま彼女を押し倒したい。

「だ、か、ら！無自覚なそれが色魔と呼ばれる原因ですわー！」

欲望に飲み込まれかけていたハルトを引っ張り戻してくれたのはイーティだ。

イーティはアンリュを蹴り飛ばす。

アンリュはぐわつと目を向き、

「勇者様は別にいいんです、誤解されても！むしろ誤解されたい

です！」

どういう意味だ？

段々と落ち着きを取り戻してきた頭で考える。

こちらに色つばいまなざしを送るアンリユから顔を逸らす。

つまり、俺も他の男同様に誤解させて、告白をさせてそれを断つて快感を覚えるのがアンリユの性癖なのか。

な、なんてSなんだ。

計画的犯罪にハルトは恐怖した。もう少しで俺も引っかかりそうだったのかと考えると余計に恐怖が大きくなる。

アンリユとはもっと距離を置いたほうがいいな。

後警戒を怠らないようにしないと。

イーティはアンリユの態度にあきれたとため息を吐き出して、

「もう、寮に帰りますわよ……」

疲れの色が見えるイーティ。

ハルトも色々と疲れて、肩を落とす。

その背中に飛び乗るアンリユ。

不毛すぎる。

17話 朝食

次の日の朝。

元氣メイドに起こしてもらい、食堂へ。

ハルトは今、男子寮のほうの食堂にいる。

食堂はかなり大きい。四人用の机や、二人用の机などたくさんあり、壁際にはいくつもの料理が置かれている。

バイキング形式のようで、学園の生徒たちは好き放題に用意された皿を手に取り盛っている。

ハルトも並び、隣にいるアンリュと元氣メイドも後に続く。

男子寮の食堂なのにアンリュがいるのは付き添い、だそうだ。

元氣メイドがいるから別に大丈夫だと断ったが、ついてくるとしつこかった。

いつもはいない女子がいることに男子用食堂で食事をしていた男子共が揃って視線を浴びせてくる。

アンリュは可愛いから理由も頷ける。何よりも胸が遠くからでも分かるほどにでかい。

食堂にいる大半の男子の目はアンリュに集中している。

ハルトにはためえ誰だよとばかりに眼を飛ばしてくる。

すれ違うたびにハルトは相手から威圧されるんだ。

何も悪いことしてないのに……。

ハルトは目玉焼きとパン、さらにハムをさらに盛って席を探しに行こうとすると、アンリュから袖をつかまれる。

「ちゃんと野菜も食べたほうがいいですよ？」

につこりと、結構大きな皿に山盛りに野菜が。

ハルトは顔の筋肉は膠着して、ぴくぴくとヒクつく。

野菜。ハルトの大嫌いなもの。高校生であるハルトが食べられる

野菜はトマトときゅうりくらいだ。

カレーに入っていればにんじん、じゃがいもなども食べられる。皿に盛られたのはレタスに近い葉っぱたち。ドレッシングのようなものもかけてくれているけど、ハルトはそれをおいしく召し上げるなんてこと無理に近い。

ここに止まっているわけにも行かず、アンリュから受け取り席を探す。

まだ朝も早いということだけあって人は少ない。

「ハルトさんはギルド『スクール』に入っただけですか？」

目を爛々と輝かせて、向かい側に座っているアンリュが覗き込んでくる。

近い。アンリュの瞳にハルトの目が映っているのが分かるほどの距離だ。

女子特有の嗅いでいると背中中の辺りがむずむずする香りがしたので、ハルトは体を気持ち後ろに傾ける。

「入ってねえーよ」

どこにも入るつもりはないと、付け足して朝食に手をつける。ちびちびと野菜の山をつついては鼻をつまんで食べていく。

ハルトが野菜を我慢して食べているのをアンリュが楽しそうに見ているのを確認してやっぱりさだなあと胸奥で泣いた。

「そうなんですか。ならなんでここにいますか？」

若干先程よりも沈んだ声を出すアンリュに首を傾げながら理由を考える。

本当の事を言えば『異世界の情報を手に入れるために図書館に来

「ただよ」だ。

「だけど、別にわざわざ伝える必要もないよな。異世界について色々突っかかれた面倒だし。」

「ちょっとした依頼。スクールさんに用があつたんだよ」

「あながち間違つてはいない。」

「へえ。そうなんですか。それじゃ、一緒に街に行きましょう！案内しますっ」

ハルトは善意な言葉にうつと呻く。

ハルトとしては図書館に籠りたい。

「あまり成果は芳しくないが、昨日日本の魅力に目覚めたハルトとしては掘り出し物を見つけたい。」

「第一ハルトは一つの物事に集中できる期間が短い。」

「何か好きなものを見つけても次の日には飽きていることも多いので、今のうちにできるだけ探しておきたいのだ。」

「アンリユさん」

「と、二人用の席の近くに一人の男子が近づいてくる。」

「アンリユは男を認めてうぐつと怯み、イスごと後退する。」

「男は髪をかきあげながら、テーブルの食事のない場所に腰かけ、目を閉じる。」

「目を閉じている男の姿はかっこいいと思う。ここが女子用の食堂なら色めきたつていただろう。」

「男はまるで、自分が行った動きに感動しているように見える。」

「長い金色の髪が近くを通り、イーティのほうは何億倍もいい髪してるようなぁと失礼なことを考える。」

「今日の、ダンジョンの件はどうですか？」

「ダンジョン？」

何だそりやと首を傾げる。学園を歩きながら度々聞いていたが、はつきりと耳にしたのは初めてだ。

男はハルトのことなど見えていないのか、そこらの女よりも長い髪をだらけるようにテーブルに乗つける。

聞ける雰囲気ではなさそうだ。

おい、サラダに髪が付きそうですよ。ハルトが口の中で呟くが聞こえるはずがない。

そこで、ハルトは素晴らしいことを思いつく。

サラダが乗ってしまっている皿を右手でゆっくりとずらしていく。元氣メイドは朝食を取りに行っている。アンリュがいるからゆっくりしてきていいと命令しておいたのだ。

「え、ええとそれはこの前断ったんですけど……」

「もう一度！ 考えてもらえませんか？」

男がテーブルを叩いてアンリュに顔を寄せている。

尊敬できる態度だ。ハルトはあんな風に女の子に迫ることは出来ない。

肩を組んだりとかはできるが正面きつて女の子——人に顔を向けることが苦手だ。

サラダが乗っている皿を音を出さずに動かし、男の髪の手がわからずにドレッシングで汚れる。

よし。ハルトは思わずガッツポーズ。

もう少して、俺はこのサラダを食べなくて済む！

ハルトが考えた作戦はこうだ。

男の髪がサラダにあたる。

そんな汚い物を食いたくない。

結果食べなくてすむ。

あまりにも陳腐な作戦だ。

照らされた道を通って走るようにハルトは慎重に皿を動かす。

「わ、私……用があるんです」

「用？　どんな用ですか？　一緒についていきましょう」

男のズボンに皿が当たる。しまったと口に手をやるが、男は気づいていないので次の工程に進む。

男の上着の無駄に長い裾をつまみ、サラダにべちゃ。

アンリュからは死角で見えてないし、男はアンリュと話すのに忙しいようだ。

というか、何の話しているのだろうか。

もう、サラダは食べられなくなったと思うので二人の関係を探るハルト。

男は……口説いているのか？

アンリュは困ったように両手を前に出して振っている。

時々こちらに助けを求めるように目を動かしてくるが、何を助ければいいのか分からない。

男に対して困っているのか？

髪の前と服の裾がドレッシング臭い男の何に……。

ほんと手を打つ。

ああ、ドレッシング臭いのか。

男は感知していないが体からはドレッシングの臭いが凄まじい。アンリュもじわじわ近づいてくる男の臭いに苦しんでいるのか。悪い事をしたな。

「ごめんと頷くように軽く頭を下げる。
途端にアンリユはぱあっと顔を咲かせる。

「そ、その。私ハルトさん——この人と一緒に街にでかけるんで、無理なんです」

まさか話をふられるとは思っていなかったので口が縦長に開いてしまう。

何もしてないはずだ。

少なくともハルトは『俺に頼ってくれ』なんて言葉にしていない。
男は、ハルトさんとかいう人を憎たらしげに見ている。

「貴様が、ハルトさんか。おい、俺はアンリユさんと用事があるんだ。さっさと出ていけ」

「出ていけってまだ食事中なんだけど？」

「好きなだけ持っていつて部屋で食っている。それにお前のようなゴミはそこらに生えている草でも食っていれば十分だろうが」

こ、こいつ……！ 比較的温厚なハルトでもかちんとくる態度にこめかみ辺りの青筋がうずく。

女と男の扱いのレベルが違いすぎる。

それでも、ハルトはひくつかせながらも笑みを携える。

「なら、てめえの髪はなんだよ。ドレッシングかけてサラダか？
むしゃむしゃ頂いてやろうか！？ サラダ嫌いだけどっ！」

いつもどおりの冷静な俺で返事をしてやる。
ハルトの言葉に男は「髪？」と疑問符を浮かべながら自分の現状

を知り、顔を真っ赤にする。

「き、貴様！　いつのまにドレスシングをかけたんだっ！」

「言いがかりはやめてくれよ。俺がやった証拠がどこにある？」

「貴様以外に僕の近くには誰もいない！　よって貴様が犯人だ！」

「あつそ。まあ、そこは割りとどうでもいいや」

ハルトはこいつがあまり頭が良くないのだと理解して一気に頭が冷めていく。

元々別に熱を持ってたわけじゃないけど。

「なんだとっ」

胸倉を掴んでくるがハルトは抵抗せずにアンリュを一瞥する。

アンリュは心配そうに瞳を揺らす。

やっぱり、こういうのは苦手だ。

アンリュとこの男がどういった関係なのかは知らないけど、アンリュが――美少女が困っている姿を放っておくのは心に鈍い痛みがやってくる。

お人よしなのかも、美少女限定で。

一度助けて頼られてしまっているのもあるな。

この程度なら別にいいが。

「とりあえず、アンリュは俺と用があるの。分かったら、また後日にでも、な」

多少睨みを強くすると、一瞬怯む。

それでもまた突っかかってくる。

「認められるか。貴様がアンリュさんを喜ばせるなんて不可能だ」

「それって、失礼なんだけど、分かる？」

「僕はこの学校で最上級生だ。偉いだから失礼ではない。むしろ貴様の態度のほうが失礼だ」

最上級生。それだけでここまで威張るとは考えられないのである程度の実力も備えているはずだ。

それにしてもな、いくら強くても人間が出来てないと将来苦労する。

多くの生徒がいるから一人一人を見るのは大変なんだろう。けどもうちよつとどうにかしないと何か悪い噂が出るな。ギルド『スクール』を出た人は協力できないクズだとな。ハルトはスクールに後で報告しようと思いながら、言い捨てる。

「俺は生憎ここの生徒じゃないからな。そんなものに縛られねえよ」

「だが、冒険者は実力がすべてだ。僕より弱い貴様は僕にひれ伏すのが道理だと思うが？」

「どこの世界の道理だよ……」

駄目だ。

相手には常識が欠如している。この世界の常識は知らないの地球の常識に当てはめてだ。

「とにかく、これ以上汚らわしい顔で、手で、僕のアンリュさんを

「貶めないでくれ」

説得は厳しい。

喧嘩は嫌いだが、こういった輩は力を見せなければ分からない。本人が実力主義と言っていることから分かるように。

多少の実力行使は仕方ないのかもしれない。

「アンリュさんを貶めないでくれっていつてるけどさ。こうやって言い争ってること事態が問題だと思うんだけど？」

「だから貴様に消えろと命令しているんだ。いい加減その腐った小さい脳で理解しろ、雑魚が」

さつきからまともに聞いてたら疲れれると思つて流してきたけどさすがに流すのも疲れてきた。

一度敗北を味わったほうが彼のためになるなとハルトは考えた。仕方ないと席を立つと、「やっと消える気になったか、のろまの愚図めが」と呟いたのでぶん殴つてやろうと男の背後に回り込んだら。

男がハルトの胸に飛び込んできた。

「ぐべぼっ！」とか謎の呪文を唱えながらハルトを巻き込んだ男を先程の微弱な怒りを込めて横殴り。

人間雑巾がけ。

拭いているものが汚いのでさらに悪くなる。

「いい加減、言わせてもらいますよ！ あなたなんかより何十倍もハルトさんは強いし、優しい、かつこいしいし、裏表ないんですよ！ あなたはうざいところしかないんです！ これ以上私の周りをつるつかないでください！ 気持ち悪い！ 消えてください！」

拳を固めて、肩を怒らせているアンリュ。

俺のために、怒ったのか？

別に怒らなくてもまもなく俺がキレていたのだからという気持ちもハルトにはあったが、なんだか嬉しくて頬が緩む。

叫んだ言葉に僅かに女の本音が混じっていたのをハルトは聞かなかったことにした。

「どうかされたんですか？」

タイミング的には良くも悪くもある時に元氣メイドが戻ってきた。ハルトはちよつとしたいざこざだよと元氣メイドを誤魔化しながら、食事を再開させる。

さっきよりもさらに興味の目が増えたが構わずに黙々と食べ進める。

自分のよそつたものを食べ、サラダは男の髪がついたからという理由をあげたら食わなくてもいいことになった。

ハルトは満面の笑みで食事を終えた。

18話 決心

ハルトは現在隣にいるアンリュとのデート（うぬぼれ）を楽しんでいる。

といつてもまだ始まったばかりだ。

「どこか見たいところとかありますか？」

騒がしい街中をなんの目的もなく歩いていたハルトにアンリュが聞く。

武器も防具もほしいものがないハルトはすぐに答えをはじき出せない。

「見たいところは特には。アンリュが行きたいところでいいぜ」

大体街は把握した。

前の街——ハルカニアとほとんど建物の配置が同じなのだ。

ギルドが中心にあつて、包囲するように周りに武器、防具などの冒険者に必要な店が集まる。

もちろんギルドから離れた場所にもあるがやはり集中するのはギルド周辺。

違つとしたらいかかわしい店がないというところだろう。

「なら、防具見にいきましょう！」

元気すぎるアンリュに気圧されながらついていく。

スクルの街は人口が多いからか店の量も半端ない。

あちこちからかかる声に苦笑を絶えず浮かべていると、

「ここが、私が毎回買いにくる防具屋です」

アンリュが両手で示した先には二階建ての店がある。外から見える中の様子では一階が店のようだ。盾や鎧が飾ってあったり無造作に置かれていたりとハルトは買うつもりはないけど興味をそそられて中に入ってみたいという気持ちが強くなる。

アンリュがガラスのドアを押しあける。

「おじいさん。遊びに来ましたよー！」

入店一番に叫ぶアンリュに他の客が視線を向けるがすぐにそっぽを向く。

何人か学園の制服を着ている人がいる。手に持って色々な場所を確認していたり、試しに装備してみたりとみんな熱心に防具選びに励んでいる。

「やあやあ、アンリュ久しぶりだねえ」

アンリュの近くに五十代ほどのがたいのいい人が来る。お父さんだろうか？

「そうですね。一週間ぐらい来てませんでしたね」

「最近調子はどうだい？」

「問題ないです」

二人が楽しそうに談笑しているのを邪魔するわけにはいかないの
で防具を見て回ることに。

兜に鎧に籠手や盾といったオーソドックスな防具に心が躍る。
ここにきて今までで一番のフアンタジーを感じている。
やっぱりこういった店で装備を整えたりするのは楽しいだろうな。
無駄使いはしたくないので手に取るだけの冷やかしをしているハ
ルトだが顔は楽しそうだ。

「ハルトさん？ 何かいいものありましたか？」

「わかんね。もう話さなくていいのか？」

ハルトに良し悪しなんて分かるはずがない。
防具屋に入ったのが初めてなのだから。

「ええ、近況報告だけですからね」

「あの人ってお父さんか何か？」

「私のお父さんの知り合いです」

親戚か。

ハルトは苦笑する。

防具を見にきたのではなく、おじさんに会うためにきたのか。

「じゃあ、ここに来た目的は終わったってことか」

「はい。飽きたら別の場所に移動しますか？」

「なら、もう少し見たら武器屋に行こうぜ」

「分かりました」

ふと、思ったことがある。

この世界ではデートとかないのだろうか。

あるとしたら一体何をするのが普通なのだろうか。

遊園地や映画館があるわけではない。

モンスター蔓延るフィールドでも散歩して愛を語らうのか？

危険すぎるな。

ハルトは色々考えてみたが分からなかった

娯楽といったら本しかないこの世界はそこだけに気をとられると急につまらないものになる。

一通り防具をみていくつか気になるものもあったが買うことはない。

次に向かった武器屋でも同じように時間を潰した。

午前も終わりに近づいた。太陽が一番高いところに昇るときのことだった。

そろそろ寮に戻るかなどと話していたハルトたちは進向方向に人だかりができているのに気づく。

二人は顔を見合わせてからすぐさま野次馬に混ざる。

そこでは、何人かの柄の悪そうな男が武器を構えていた。

そして、ハルトは中央に立っている男の顔を認識して全身が震えた。

ハルカニアを出発する前に絡んできた男。

名前は知らないがギルド『スクリーム』のBランクの男だ。

「まったくよお。こんなところに人集めてどうすんだよ、副リーダー」

Bランクの男の脇に立つ一人が副リーダーとBランクの男に言う。
副リーダー。

ギルドで二番目に偉い男だ。
の割りにあまり強くなかったが。

「俺をこけにしゃがった男を痛めるに決まってるんだろ？」

「デボツシュー一人でできないのか？」

Bランクの男は副リーダーで名前はデボツシュー。

RPG序盤に出てきそうな弱そうな名前だとハルトは思った。
左に立っていた男がデボツシューにつまらなそうに進言すると、

「できるけどな。どうせならここのいきがつてる学生さんたちを虐めるのも面白そうだったからな。てめーらを連れてきたんだよ」

「楽しいことはみんなでやるもんだろ」と下卑た顔を作り他の二人もつられるようにして高らかに笑う。

一緒にいて虫唾が走るような連中だ。

「アンリュ。さっさと離れよう」

「……助けないのですか？」

助ける？ 誰を？

スクリームの男三人の前には体を傷だらけにして顔を伏せている
スクルの学生三人が倒れている。

いくら戦い方を学んでいるとはいえ彼らでは歯が立たないようだ。

「あいつらには同情するけどさ。俺が出しゃばったらあいつらのプ

ライドまでも壊すだろ？」

ハルトは戦いたくない。

それにデボツシユの口ぶりからハルトを狙っていることが分かる。
わざわざこちらから姿を見せたくはない
無駄な争いことは避けたかった。

「それでも、助けましようよ」

食い下がってくるアンリュの姿に誰かの幻影が被る。

……イーティだ。

今のアンリュはあの時のイーティに似ている。

（なんで、お前等はそんなに強いんだよ）

「俺は、あいつらのことを知らない。助ける義理なんてない……！」

戦って負けることはない。

怖いのは、助けた分だけ背負うものが増えてしまう。
現に今だってそうだ。

美少女だからと助けたイーティの護衛を頼まれたり、サウザンド
ウルフから助けた少女はこうして恩返しとばかりにハルトに構って
いる。

さらに厄介な事件までも持ち込みそうになっている。

「なら、私をどうして助けてくれたんですか？」

どうしてだ？

あの時は、夢だと思っていたから？　その前に夢じゃないと分かっていた。

美少女だから？　それは、半分正解だと思うけど満点ではない。たぶん、目の前で命が失われることが嫌だったからだ。

「死にそうだったからだよ。だけど、あいつらは違うだろ？　ここでご我慢すれば怪我だけで済む」

現に、人だかりができているにも関わらず誰も助けようとしなくて同じ学園の生徒もちらほらと窺えるが誰も助けに行こうとはしない。

ハルトの行動は間違っていない、この世界でも、地球でも。あまりにも正しいつまらない人生を送ることになるが。

「目の前で困っているのに助けられないんですか？　もし、あなたが困っていて誰かがあなたに気づいて無視したらどう思うんですか？」

それは、なんで助けてくれないんだとか思うだろう。

自分が不幸なのになんで無視するんだって。

相手に取っちゃ助ける義理がないのだから、それは押し付けてるだけだ。

傲慢な意見だ。

困っている者は自分の不幸から目を逸らしてるだけだ。

人は一人で生きていくもの。

一人でどうにかしなきゃならない。

「俺には……やらなきゃいけないことがあるんだよ。そんなちっちゃいことに構ってられない」

地球に帰る、帰りたい。

そんなことに比べたらここで大怪我してるあいつらは小さい問題
だろ？

ハルトが見下すように笑う。

あいつらには帰る場所があり、友がいる。

それがどれだけ幸福なことか知らないから、偽善的な言葉を並べ
られるんだ。

「ちっちゃいこと？ それ本当に言っているんですか？」

アンリユの感情に起伏がなくなっていく。

何も感じられない言葉に驚き顔をあげると。

ハルトに冷たい視線をぶつける少女がいた。

視線に耐えられず――顔を下に向ける。

「……助けてくれた、私の勇者だったのに。かつこよかったのは…
…勘違いだったんですね」

気落ちした声をあげるアンリユ。

そういつてアンリユは前にいる人を押しやりながら突っ込んだ。

助けに、行つたのだろう。

ハルトはアンリユに対して怒りが生まれていた。

勝手なことばかり言いやがって。何も知らない癖に。

俺は、自分の事で手一杯なんだよ。他人の面倒を見る暇なんてな
いんだよ。

なのに、なのに。

俺が悪いのか？ 答えを出そうとしても出てこない。

悩んでいることさえも億劫になる。やる事がなかったハルトは
飛び出していったアンリユの後を追う。

何で、見に行くのか。

勝てずに負けるところを嘲笑うために？

結局そうなるんだよといいたいかからか？
自分で自分の行動が分らない。

「さてと、世界の厳しさでも教えてやりますかねえ」

デボツシユが大剣ではない、小型の剣を腰から抜き取り戦慄している男の首元に持つていく。
体の中で何かが渦を巻く。
目の前で失われてしまいうだろう命を見て、飛び出したくなる。

「フィールドで負けたら全員モンスターの餌だぜ？」

「なら、あなたが餌になるんです！」

アンリユが雑踏から飛び出し、既に準備を整えていたのか魔法――黄色い線のようなものを飛ばしてデボツシユに当てる。

雷属性の魔法。ひゅんと風を切る音がしたと同時にデボツシユに三つの光が飛んでいく。

不意打ちの一撃だったがデボツシユは反射的に剣を構えて二つを弾き落とす。

今ので倒れてくれればいいのに――歯噛みする。

一撃で仕留められたら、アンリユが無駄に傷つくことなく終わっていたはずだ。

「誰だてめえっ！」

「あなたこそ、誰ですか？　ここはギルド『スクール』が治める街ですよ。勝手な行動をすればあなた方のギルドに迷惑がかかりますよ？」

穩便に済ませるためにアンリュは精一杯威圧するように声を発している。

駄目だ。あいつらにはそんな言葉は通じない。

あいつらは誰に迷惑をかけようともお構いなしな連中だ。

ギルド『スクリーム』なのだから。

「先に攻撃したんだからてめえが悪いよなあっ！」

小剣を仕舞い、背中につけている大剣に切り替える。

男の脇を固めている二名もそれぞれの武器を構える。

右が短剣に、左が杖。

スピードで翻弄する者と魔法で援護する者の二名。

「さきに仕掛けたのはそちらですよ？」

アンリュはふたたび魔法を詠唱するが、

「させつかよっ！」

大剣を頭上からアンリュに振り下ろす。

喰らえば即死となる一撃にアンリュは怯えるように横に転がる。

「おせえっ！」

短剣の男が素早い刺突を繰り返し、アンリュはそれをぎりぎりを取り出した同じく短剣の腹で受けるが態勢が悪い。

弾かれる。

「フレイムランス！」

詠唱を終えた杖を持った男の魔法がアンリュに飛ぶ。

体を起き上がらせようとしていたところに熱を持った一メートルほどの槍が当たる。

「きゃっ」と悲鳴をあげてアンリュは体から煙をあげて、弾け飛ぶ。

ほら、言ったとおり負けた。

あまりにも予想通りの展開に冷笑を浮かべる。

余計なものまで、背負い込めばこうなるんだ。

自分の身の丈にあった生き方をしなければいつか滅びる。

俺は、利口で、間違っていないはずなのに……なぜか、心には冷たい風が吹き荒れる。

豪雨となり、体を冷やしていく。顔に浮かんだ笑みはいつしか、自分を嘲るようなものになっっていく。

逃がっているのは、俺か？

背負うのが怖くて、頼られるのが嫌で、何もかも捨てて自分の事を優先しているクズは……俺だ。

ここにいる誰よりもクズだ。

あそこでアンリュをいたぶっている三人のぼうがまだ人間らしく生きている。

間違った方向に進んでいても、あいつらはしっかりとした人間。

俺は、自分の感情を捨てたロボットになっている。

アンリュは、まだ戦うつもりなのか、短剣で支えながらゆっくりと立ち上がった。

また、イーティと被った。

体からは煙が出ている割に目だった火傷はない。

よかったと安心する。

だが、あのままなら必ず怪我をする。

想像したくない光景が頭に浮かんできて、慌てて振りとはず。それをどうにかする方法は、ある。

だけど、だけど……。

悩みが渦巻く中で、ハルトの心に確かに生まれた言葉があった。
逃げたくない。

イーティヤ、アンリュのような自分に嘘をつかないで生きたい。
自分の気持ちをしっかりと外に吐き出したい。
変わりたい。

腰にある鞘に納まった剣を手にもつ。

気持ちが高揚する。今なら何でもできる気がする。

ハルトはパンと顔を叩き、気合を入れる。

「とりあえず、軽く気絶させてから連れていくか」

デボツシュがアンリュを品定めするように舌なめずりしている。
それを視界の外に飛ばしながら、人ごみを移動して、三人の死角

――後ろ側に回る。

まずは、一番厄介な魔法使い。

俺は一度目を瞑り心を落ち着かせる。

力では俺が勝ってるんだ。

飛び出して、柄を魔法使いの男の背に埋める。

骨がいくつか折れる振動が刀を伝ってハルトの手に届く。

「……ぐがっ!？」

男は悲鳴をあげて口から泡を吹いてぶっ倒れた。

悲鳴に気づいて真っ先にこちらへ振り向いた短剣男が剣を突き出してくる。

ハルトはそれを見切り、左手で白羽取りしながら右手の刀で顔面を突く。

顔面に沈んだ刀をすぐさま引っこ抜いて、遅れ気味に反応したデボツシュに跳びかかる。

一撃目を大剣に弾かれる。

「あん時のようにはいかねえぞ、ガキ！」

デボツシユはなぎ払いを放つ。

ハルトは膝を曲げ、攻撃を避けると同時に回転する。

遠心力をプラスした足払いをお見舞いする。

見事にくらったデボツシユは体を宙に躍らせる。

ハルトは両手でしっかりと刀を握りなおし、刀の先を、デボツシユの腹へと殴りつける。

めき、とデボツシユの体が悲鳴をあげハルトの目の前から消え去るように民家の壁に激突する。

衝撃で崩れた瓦礫の破片がデボツシユの頭を飾る。

「ふう」

ハルトは頭の中で描いたシミュレーションどおりに事が動いたのに満足する。

あつという間の制圧に集まっている人々も何もいわずにぽかんとしている。

「アンリユ。大丈夫か？」

まだ、何が起きているのか分からないアンリユに肩を貸す。

さすがにダメージは結構残っているようで一人で立つのは難しいようだ。

「え、ええと。助けてくれたのですか？」

先程失ったハルトへの期待を込めた視線に、やっぱりまだ慣れないなと顔を逸らす。

かつこ悪いところを見せたハルトは、彼女を直視出来ない。

「ま、結果だけみれば、な」

どちらかというところが助けられたというか。

このままロボットのようになんて生きていただろハルトの考え方を覚えてくれた。

助けてもらったのはむしろハルトのほうだった。

「二人とも、大丈夫ですか？」

警備員が三名ほどやってくる。

なんだよ、とハルトは口をすぼめる。

俺が何もしなくても、事件は解決していたのかよ。

無駄に出しゃばっちゃまったなあ。

「俺は問題ないけど、こっちはちよつと疲れてるみたいだな。俺はこの子連れて行くからここの後始末頼むわ」

やってきた警備員に告げると、分かりましたと返事をくれる。

固まっていたギャラリーはまるでそうしないといけないかのよう
に拍手を始める。

「学園にいきや、治療してもらえんの？」

「はい、たぶん……」

と。

突然全体重がハルトにかかったのでもしや、と思うと。
疲労で眠ってしまったようだ。

ハルトはくっくくくと笑う。

全く、イーティと似てんなこいつ。

仕方なく、おんぶして 連れていく。

前言撤回。

イーティとは圧倒的に違う物があった。

——胸気持ちいい。

19話 ゼラル

「ギルド『スクリーム』かぁ。あそこは本当に実力主義だからねえ。まいったね」

アンリュを保健室に運んだ後に向かった学園長室。
ハルトは先程襲ってきた男達の報告にやってきたのだ。

「あれが五大ギルドの一つなんていいのか？」

あんな馬鹿が副リーダーなんてギルドとして認めていいのか疑い
たくなる。

スクールも同じことを考えているのか頭を抱える。

「それ、なんだよね。『スクリーム』は僕達になんの報告もなくいきなり五大ギルドの一つになったんだよ」

「普通、話し合ったりするの？」

「しないけど、何か一言はあるよ。それが突然、ね」

スクールは少し怒ったようにむくれながら続ける。

「ギルド本部であるギルド『ヤマト』が独断で認めたんだ」

ヤマト？

地球で聞きそうな名前にハルトは首を捻る。

ギルド名は、普通リーダーの名前がつくらしいのでヤマトというのがギルドリーダーなのだろう。

「ギルド、『ヤマト』ねえ。まあ、そっちはいいや」

この世界の事は現地人たちに任せればいい。
ハルトがやることは自分の敵を排除するだけ。
それもあんま気の進まないことだけだな。

「とりあえずあいつらは捕まえたんだから、一応は解決か？」

その瞬間、スクルの纏っている空気が変わった。
ハルトは、あまりの変化に理解できず思わず後ろに下がる。

「捕まえたのに、どこにもいないよ？」

「え？ いや、だってここの警備員が……」

「確かに、警備の者はいるが彼らは門とダンジョンの入り口にしかないよ。街の中でのいざこざはよっぽど大きなものじゃなければ各々に任せるんだ」

確かに冒険者の暗黙のルールのようなものであることを知っている。
る。

だが、ここは冒険者見習いがたくさんいる街だ。

「いや、結構大ごとだぞ。それに警備員の奴らがここに生徒を運ぶって」

「生徒……」

スクールは席を倒しながら空を飛んで移動を始めた。
と、飛んでいやがる……！

ハルトはいきなり飛び出したスクールに追いつくために全力で走る。
長い廊下を走り、階段を下りて一階へ。

一階の一番端——保健室。

先程運んだのでハルトは道を覚えていた。

スクールの目標はそこらしい。

先に入ったスクールさんの影を凝視しながら遅れて開いた扉の中へ。

「ここには、運ばれていないね。つまり、ここ以外のどこか別の場所。だけどそれはありえない。応急処置はしても、ここ以外で治療できる場所はないから僕は認めていない。ここにいる回復師は一級の者たちだからね」

「まさ、か。あの警備員は……」

ぞくつと冷や汗が流れる。

何も疑わずに完全に油断していた。

「たぶん、敵の身内だね。副リーダーではない誰かが予め、用意していたのだろう」

くつとスクールは顔を歪める。

「いや、でもあいつら俺を追ってきて、数日だぞ？　そこまでの準備をできるわけがないだろ」

用意周到すぎる。

デボッシュたちは下手したら今日この街についたのだ。

その日にここまで手の込んだことを出来るとは考えられない。

「いや、最近頻繁にギルド『スクリーム』の者がこの街に訪れている。先週には僕の元へスクリームがやってきた。僕のギルドの者を何人が自分のギルドに誘いにきたんだよ。全部無視させてもらったけどね」

スクールは「評判悪いから」と繋ぐ。

スクールにとって生徒は自分の子みたいなものだから、その理由も頷ける。

「だったら、さっさと追い出せばよかったんじゃないか？」

そうすれば今回のような事件は起きなかったはずだ。

「そうもいかない。いくら僕が嫌いだからと追いだせば職権乱用だ。ギルドは表向きは手を取り合ってモンスターを討伐するのだからね」

ギルドってのは随分とややこしくて複雑だな。

「と、ギルドの意味なんて語ってる場合じゃないね。今からギルドメンバーに三人を搜索してもらおう」

「あ、はい。なら、俺も」

一応、傷だらけだが顔は見えているし、元々はハルトがすべての元凶だ。

ハルトのせいで奴らはここまで追ってきてしまったのだから。さすがにここでじっとしているわけにはいかない。

だが、スクールは首を振る。

「君も狙われているんだ。この学園で身を隠していたほうがいい」
確かに。

もしもハルトが『スクリーム』の誰かに襲われて、負けたら余計に迷惑をかけてしまう。

だけど、ハルトは負けるつもりはない。

「一人でも多くいたほうがいいと思いますよっ？」

スクリームに狙われている？

——ちよっと待て。

ハルトは一つやばいことに気づく。

あいつらの恨みが俺だけでなく、イーティにもだつたら？

そもそも、あいつらは俺がギルドに所属していないことを知っている。

悪い考えがどんどん新たな悪い方へ進んでいく。

追いかけるとしたら、俺よりもイーティのほうが断然にラクだ。

あいつらは、俺じゃなくてイーティを探していたら……。

ぞくつと体中が嫌な汗で包まれる。

「イーティも、危ない……」

「イーティ？　なぜだい？」

そこで、ハルトはハルカニアで起こった事件を手短に話す。
さすがのスクールも顔をしかめる。

「イーティも探させよう」

「だから、俺も探します」

「……だから、こちらとしては君にも」

「俺も行くからなっ！」

いい加減、じれったい。

ハルトは自分のせいでこんなことになったのに黙って見ていられるほど丸い性格はしていない。

自分に関係なければ全くの放置だが。

「俺にも力はある。自衛ぐらいはできる！」

「……だがね」

「これ以上文句を言うなら、あんたを切り倒してでも行くからな」

自分が傷つくならいい。他人だってハルトが関係していないところで怪我をするのなら構わない。

でも、イーティは。

——半分は俺の責任でもある。

アンリユも、男が女を守るっていうのが当たり前ならハルトの責任だ。

ハルトの睨みにスクールはやれやれと頭をふる。

「若い子は成長が早いね。昨日の君は人に従順な犬、だったのにすでに手に負えない狼に成長しちゃったね。なら、任せるよ」

ハルトはそれを確認して、すぐに飛び出した。

「なら、私もついていきますかね」

保健室の入り口に突っ立っている人にぶつかりそうになる。慌てて回避のために体を捻るが、うまく避けられずこける。

「おやおや？　ちゃんと前見て走ってくださいね？」

長身の、ハルトよりも頭一つ分大きい男の人が手を差し出しながらハルトに向かってにこりと微笑む。

あんたが、そこにいたのが悪いんだろつと言いたくなつたが出された手を掴んで立ちあがる。

男はハルトを横にずらしてから、中に入りスクルの名を呼ぶ。

「スクールさん。ダンジョン付近に異常なモンスターが現れました。現在ダンジョン付近にいた生徒で応戦していますが、ぎりぎりの状態です」

ダンジョンと聞いて走りだそうとした足がつんのめり、転ぶ。ハルトが向かう場所の情報だ。聞いて損はないと思うが、目の前の人が誰なのか分からない。

「モンスター？　ダンジョンの外に出てきてしまうモンスターはゴブリン程度の下級なはずだよ？　警備員でも十分対処できるはずだけど？」

「それが、ゴブリンらしいのですが、異常に成長しています。通常の三倍ほどの大きさで、耐久力が凄まじいそうです」

スクールは怪訝そうにしていたが、すぐに案を打ち出す。

「なら、ゼラル。そこにいる、ハルトくんと共に現地の鎮圧に急いでくれ。僕はこれから『スクリーム』の件で忙しいからね。ハルトくん、手伝ってくれるかい？」

「ああ」

ゼラルはハルトの応答を確認して、保健室に背を向ける。

「それじゃあ、ハルトくん、行きますよ？」

ゼラルといわれた男はハルトを先導して先に進む。

「少し、走ります。色々聞きたいと思いますが、走りながら尋ねてください」

ゼラルは、見た目文化系の癖にかなりのスピードで移動する。ハルトも並走しながら尋ねる。

「あなたは誰ですか？」

「私は、ここの副リーダーですよ。敬語は要りません。背中に悪寒が走りますので」

どんな症状だよ。

「なら、あんたも敬語はやめてくれ」

「いえいえ。私はこれが生まれつきなので」

「赤ちゃんのときも敬語喋ってたのかよ」

「はい、私は赤ちゃんの頃からばりばりに敬語してました。少し聞きたいのですが、あなたの戦闘のスタイル、戦闘力を簡単に説明してください」

さらりとハルトのギャグを避ける。

戦闘のスタイル。

接近戦タイプ。戦闘力はAランク程度にしておこう。

思ったことを伝えると、満足そうに頷く。

「敵は、ゴブリンですが、異常だそうです。ランクはC——Bに近いですね」

どんどん変わっていく景色の中、ゼラルは口元を歪める。

「B！？ゴブリンってFだぞ！？」

ハルトが知っているゴブリンが一気に邪悪な顔つきになる。

「正確な数値は分かりませんが現在対処している警備員の最高ランクがCです。その方が押されています。ただ、敵も三体ほどいるので詳しいことは目で確かめない限りは」

「まじかよ……」

ハルトが思いっきり右に曲がると、ゼラルは左に曲がる。

「あなた、ダンジョンの場所知ってますか？」

あきれたような声。

「し、知ってるぞ」

「そうですか。これは変な疑りしてすみませんねー。それじゃあ、案内は任せますよ？ 私は魔法の準備をしておきますよ」

すべて分かっているくつくつとゼラルは笑う。
は、腹黒いぞこいつ。

ハルトはどっかの元氣メイドが頭の中でちらついた気がした。

「すみません、案内してください」

ゼラルはくすくすと笑いながらハルトの前を走っていく。
この人、苦手だ。

20話 異常ゴブリン（前書き）

日間ランキングで他の方の作品を探していたら自分のがあったのに驚きました。お気に入り登録、評価してくれた方々ありがとうございます。

20話 異常ゴブリン

ダンジョンとは、この学園の生徒に戦い方を学んでもらうために作られたものだ。

ダンジョンは地下に続いていき、全部で20階までであるらしい。内部には捕獲したモンスターを放って独自の生態系が生まれている。

稀にゴブリンなどは地下から地上——スクルの街にあがってくることもあるらしいが警備員の二名が対処できる雑魚。

ダンジョンのモンスターは強くてもDランクまでしかないし、地上に近い階層にはFクラスのモンスターしかいないので問題はない。

だが、今回はなぜか異常成長したゴブリンが三体も地上に出てきている。

今はまだ生徒と警備員で対処しているが、いつ被害がでるか分からない。

「見えましたっ。一撃目で一体の魔石部分を破壊できますか？」

「見えていたら、なっ！」

塗装された道を駆けて、ダンジョンのために作られた空間へ飛びこむ。

三体のゴブリンの身長はどれも三メートルほどで、確かに異常だった。

これは、バケモノだ。

乱戦が繰り広げている中、足を止めずに近場のゴブリンの運よくむき出しになった魔石に向かって刀を突きつける。

ゴブリンの腹部分にある魔石に刀が近づき——砕く。

破壊された魔石から刀を取り外し、次の目標に視点を移している
と。

なぜか、影ができる。

「え？」

「サンダーフォール！」

巨木のような雷がハルトの背後で音をあげ、あたりに閃光を撒き
散らす。

ハルトは背を向けていて光の被害にはあっていない。

が、周囲にいたゴブリンは目を押さえる。

ハルトが振り返ると、雷によって全身を黒焦げにしたゴブリンは
口から煙を吐き出しながら体を倒す。

倒れた際に生じた地響きが足に伝ってうまく立つのが難しい。
雷熱で見事に焦げたゴブリンは、口元を動かしてごぼっと変なも
のを吐き出す。

魔石、のようだ。

「どうやら、異常なのは見た目だけではないようですね」

「らしいね」

魔石は確実に壊したのに、倒れなかった。

これが異常じゃなければ何が異常だ。

「二体同時に相手どれですか？ 私が大きな魔法を放つ詠唱の時間
を稼いでくれればいいですから」

ここで踏ん張っていた人々は満身創痍だ。

とてもこれ以上戦ってられそうにはない。
余裕があるのはハルトとゼラルの二名のみ。

「まあ、任せろ」

ゼラルは目を細めて、

「みなさん。怪我人をつれて今すぐに避難してください。ここは我々で片付けますから」

ハルトもさつさと倒してイーティの搜索に向かわなければいけない。

この場にはいないようなので、ダンジョン内かそもそもダンジョンには向かっていないからだ。

ダンジョンの前で足踏みしている場合ではない。

「ゴブリン、こっち向け！」

一体にフレアラインを放ち、近くにいたもう一体を蹴り飛ばす。
フレアラインは何も調整しなかったせいか全くダメージが通らない。

だが、二体の注意はこちらに向けられそれぞれが持っている棍棒を振りかぶって襲い掛かってくる。

ハルトは一体目——ゴブリンAとしよう——の棍棒を避ける。地面に穴が開くのを視認してぞっとしながら、二体目——ゴブリンBとしよう——の横殴りを身長さを活かして上半身を下げ避ける。

横殴りは勢いを落とさずにゴブリンAをぶん殴る。

進化はしても、知能は低いままのようだ。

教えられればすぐに出来るから、学習能力が高いのは知っている。
長期戦はまずい。

ゴブリンA、Bは身内同士でにらみ合い、次の瞬間には何で怒っていたのか忘れて再びハルトに襲い掛かってくる。

「離れてください！」

ゼラルの声が耳朵を打ったので、ハルトは大きく飛び退く。

「サンダーフォール！」

纏まっていた二体を巻き込みながら、先程同様の雷が二体の頭上から降り注ぐ。

威力は先程よりも大きい。

雷は二体を地面に押しつぶしながら、どんどん沈んでいく。圧倒的な雷撃は休むことなく、ゴブリンの原形を壊していく。

「終わりましたよ？」

ゼラルはにこにこ笑顔を崩さずに、何事もなかった顔つきでモンスターの体をチェックしていく。

二体は完全に死んでいて姿は残っていないので初めに倒したモンスターをだ。

ハルトは見事な魔法の一撃に見とれていた。

この人、相当強い。

魔法しか見ていないがかなり腕が立つ。

ハルトは、特に問題がないことを確認してからダンジョンに向かうために歩き出す。

「待ってください」

ゼラルの止める声に振りかえる。

「私もついていきます」

「はっ？」

「現在中に『スクリーム』の者がいるそうです。それに何人かの学園の生徒が。あなたが現在探しているイーティさんらしき人物も大分前に中に入ったそうです」

あまり、いい状況じゃないな。

ダンジョン内部がおかしいのかもしれないのに、危険だよな。

「足は引つ張りませんよ？」

柔和に顔を変化させる。

そりゃ、な。

ハルトよりも魔法だけなら全然レベルが違う。

足は引つ張らないだろうと考え着いてきてもらうことに。

「なら、さっさと行こうぜ」

二人はダンジョンに潜るために入り口へ向かった。

ダンジョンの入り口はただの箱のようになっていた。

これは地下に伸びているからで、中に入れば階段はある。

ハルトたちは階段を降りていき、地下一階へ足を踏み入れる。

地上に比べれば暗いが、所々に魔石が埋め込まれていて真っ暗ではない。

煌々とした場所もあり、目が見えないということはないようで胸を撫で下ろす。

ゼラルが内部の地図は把握しているらしいので道案内を任せる。といっても構造は、一本道で、途中に広間のようなものがあるだけだ。

一度見ればハルトでも迷子にならない簡素な作りだ。ダンジョンは初めはモンスターを連れてきて、育てていたのだが、いつからか壁から生まれるようになったそうだ。

広間には何体かのちっこいゴブリンがいて、すべて一掃していく。広間を抜けたら次の階、次の階へとつまらないものだ。

どんどん下に降りて行き、段々とレベルのあがっていくモンスターをあしらいつつ進んで行き――10階。

段々と薄暗いプラスで肌寒くなってきたハルトは腕をさする。現在のハルトの格好は半袖だ。

半袖のせいでむき出しになった服装ではこれ以上は進みたくなくなってくる。

湿ったカビのような臭いもまた進みなくなる原因の一端を担っている。

「ここには、他とは違うボスモンスターがいるんですよ」

なぜか、10階層にはボスモンスターと呼ばれるオークがいるらしい。

ランクはDとこのダンジョンでも危険なモンスターだ。

10階層には許可なく侵入してはいけないと生徒には厳重注意している。

だから、ここに来ているはずはない。

ましてや超えて先の階層にいるわけもないのだ。

「おかしいですね。オークの死体です」

広間の中央には先程のゴブリンよりも一回りほど大きな死体が寝

ている。

それにしてもこのダンジョンを作った奴は何者だとハルトに疑問が生まれる。

地下に続く大きな建物をこの世界の人が手作業では作れそうにない。

建設魔法とかあるのだろうか。

「つまり、この先に行っただってことかよ」

死体の傷の様子を記憶に留めながらちつと舌打ちをする。

これは間違いなく『スクリーム』の仕業だ。

『スクール』の生徒にはオークと戦って勝てるような相手はいない。何人かで戦えば勝機はあるがレベルの高いコンビネーションが必要とされる。

傷の様子では、じわじわと戦った様子はない。

「これ以上先はまずいですね」

暗闇の中の明かりがゼラルの額に浮かんだ汗を照らし出す。

疲労ではなく、焦りの汗だ。

ハルトは一度でこを拭う。

「いきなりモンスターの強さがあがるのか？」

冗談気味に言ったのだが、深刻そうに顔を歪める。

「ええ。ゴブリンなどが主に出てくるのですが、知能が格段にあがっています。連携して戦うようになるので、かなり面倒になります」

『スクリーム』が『スクール』の生徒を連れて行ったのは間違いない。

目的は分からないが、オーガを倒せる存在は『スクリーム』しか存在しないはずだ。

「といっても私たちには問題はないでしょうね。いきましよう。急がないと手遅れになりそうです」

ゼラルの先導の元ハルトたちは体力を考えずに走っていく。
ダンジョンは全部で20階まである。

一つずつ降りて襲い掛かってくる敵を排除する。

ハルトとゼラルの敵ではない。

そして、19階層。

ハルトたちは、広間の先——20階層への階段を登ってくる陰を見つけて息を潜める。

身なりは、軽装だ。

暗くて見えないが二人。

会話をしているようで、ダンジョンの壁で声が踊り反響するので何かを話しているのは分かるが内容までは聞こえない。

二人が広間に入った辺りで、ようやくしっかりと声が届くようになる。

「魔石によるモンスター強化。すごいな」

魔石によるモンスター強化——。

もしかして、外で暴れていたゴブリンたちは、その影響か？

倒したときに口から魔石を吐き出したのを思い出す。

「ああ、ランクの高いモンスターにも適応されるようだし……くくく、あの学園の青臭い奴ら、何分持ちこたえられるかな？」

「いやいや、俺らでも歯が立たないようなモンスターだぜ？ 入り口は氷で塞いだから19階に逃げることもできねえし……今頃おいしく喰われたんじゃないかねえの？」

頭に血が上る。

この先の階層——つまりは20階。

10階同様ボス級モンスターがいて……もしも魔石による強化が施されていたら、ランクはAに近いモンスターに進化しているだろう。

警備員が見間違えていなければイーティがそこにいる。

他にも何名かの生徒が。

「まあ、どうでもいいけど」

がっはっはっはと二人は笑いあう。

——我慢が限界にきた。

男二名が広間を抜けたところで、ハルトは一気に飛び出して右側の男の鳩尾に拳を入れる。

完全に油断していたところに喰らったせいか、一瞬で沈んだ。

隣にいる男は「誰だっ！」と叫びながら即座に自分の得物を抜き、反応するが既にハルトはそいつを無視して駆け出している。

ゼラルに任せればいい。

ハルトは広間から20階層への階段に向かっていき、塞がれた氷を蹴散らす。

飛ぶようにして階段を下りてそこには。

傷だらけの状態で剣を支えに立っているイーティの姿があった。

よかった、生きていた。安心できたのはそこまでだった。

イーティに相對して、でかい斧を両手で持つ牛のようなモンスターが襲おうとしていた。

21話 異常ミノタウロス（前書き）

後二、三話で終わりの予定です。

21話 異常ミノタウロス

(イーティ！)

今にもでかい斧の餌食になりそうなイーティ。

心中で叫び、ハルトは両の足に力を蓄え、膝を折り、撃ちだすように前へ。

弾丸のような刺突はでかいモンスターのわき腹に当たる。

刺さりはしない。頑強な筋肉の壁に弾かれハルトの勢いが消える。

ハルトはすかさず、魔法を発動させる。

零距离でのフレアライン。

威力はランクCのドラゴンを真つ二つにするものなのに。

モンスターに当たった瞬間、空气中に霧散する。

破られた。

魔法への耐性が異常に高いのだろう。

「ぐばおおおおおおお！」

獲物が割り込んできた怒りか、獲物を仕留めそこなった怒りか分からないが唾を飛ばしながら咆哮。

ハルトは音が作り出す圧力に耐え切れずに弾け飛ばされる。

飛ばされたことによりモンスターの全長が見えて、顔を引きつける。

ハルトのゲーム知識が正しければ、相對しているモンスターの名前はミノタウロス。

頭から生えた立派な二本の角。体は死体でみたオーガとほぼ同じだが、腕や足の筋肉の密は数段に膨れ上がっている。

胸の部分に魔石があるが、あれを弱点と考えないほうがいいな。

ダンジョンに入る前のゴブリンを思い出す。

ミノタウロスがハルトを無言のまま睨み——口角をいびつにする。戦闘狂が見せるような気味の悪い笑顔。

自分よりも強い相手か、自分と対等の敵に出会ったときに見せるもの。

こいつは一目見てハルトの力量を測った。

知能があることにハルトは舌打ちする。

知恵を持っているモンスターはどれだけランクが低くても厄介だ。対立しているミノタウロスは、ランクが高い。

手ごわい、な。

「ぶおうつうつうつうつうつうつ！」

ミノタウロスは、自分の体躯の半分ほどの斧を振りかぶる。

それを風を破りながら振り落とす。

ミノタウロスの一撃はどう考えても喰らってはいけない。

一発もらえば戦闘不能どころかあの世行きだ。

ハルトはちらと横目でイーティを見る。

腰を抜かして、座り込んでしまっている。

ここでハルトが避けたら確実に斧が破壊した地面の瓦礫の被害にあう。

くそ、さっさと全員連れて逃げてくれ。

ハルトは鞘に入ったままの刀で斧の刃の部分に当てる。

体が、つぶれる。

拮抗なんてしていない。

力負けする。

慌てて横に弾き、生まれた隙目がけて叩こうと前にでると。

「ぶおうつ！」

ミノタウロスが叫ぶと同時に何かが俺の体を切り刻む。

かまいたちのようなその技は——魔法だ。

魔法を使えるまでに知能が上がっていたのか。

魔石による、強化。

何をしたらこれほどまでにチートなモンスターができたよつ。

「イーティ！ さつさと全員連れて逃げろっ！」

ハルトは今のうちに、激を飛ばす。

ここで全力の戦闘をおっぱじめたらイーティや、学園の生徒たちへ絶対被害がでる。

戦いに巻き込まれて怪我しました、死にましたなんてことになったらハルトが助けに来た意味がなくなる。

「は、はひつ、ですぬわ」

イーティはしどろもどろになりながらもはいはいで近くにいた生徒の傍に向かう。

「それじゃあ、私も生徒の避難を優先しますね？」

「ゼラル！？ 早く連れてつてくれ！」

いつの間に？ と口から飛び出そうになったが関係ない。

ハルトが全力で戦える舞台さえ出来あがればそれでいい。

ミノタウロスは、二人を見て、ハルトを見てから、ふんと鼻を鳴らす。

攻撃、してこない。

もしかして、あの二人がいなくなるまで待つてくれるのか？

ミノタウロスにそんな視線を投げかけるとにこりと笑う。

な、なんて男らしいんだこのミノタウロス。

ゼラルが二人を運び出し、イーティが一人を運び出す。

「ゼラル！ 俺の事はいいから、先に地上に戻っててくれ」

ミノタウロスが見逃してくれたんだ。

たとえハルトの勘違いとしてもここは一对一にするべきだろう。
ゼラルはにこにここと、「分かりました」といい、

「死んでも骨は拾いませんよ？」

と不吉なことを言い残して去っていく。

これから戦う相手にそんなことを言わないでと胸奥で叫ぶ。

「ぶわああああああああああつ！！」

ミノタウロスは、二人の姿が完全に見えなくなったのを確認してから吼える。

ミノタウロスは一步で俺との距離をなくし、自分の肉体を活かした突進をお見舞いする。

「さっきまでとは、違っからな」

鞘から、刀を抜き放つ。

体中を不可視の何かがまとっていき、それがミノタウロスを押さえつける。

アニメスモード。

剣に封印されているディバールタイガーの魂を身に纏い、それを操り戦える。

さらにモンスターの魂の影響で身体能力は格段にアップする。
ディバールタイガーの技はハルトの守護霊みたいなものだど理解

するのが一番合点がいく。

「ぐ、ぬぐおっ!？」

ミノタウロスは突然体が動かなくなり、顔を面白いくらいに変化させる。

怒りから、戸惑いへ、そして――恐怖へ。

ハルトが一步步近づ寄るたびに恐怖は絶望へと変化していく。

頭がいいやつってのは悟ってしまう。

勝てない、殺されると感じてしまったとき、馬鹿なやつと頭のいいやつでは死の感じ方が全然違う。

ミノタウロスは、モンスターだったときには死に対して恐怖がなかったのだろう。

だが、今は知能をつけたかぎりなく人間に近いモンスター。

死がどれだけ怖いものなのか分かってしまう。

「さすがに一撃じゃしとめられないだろうけど、勝つのは俺だぜ？」

居合いの要領で一閃。

ミノタウロスは、ぎりぎりで拘束から右腕だけを逃しその腕でハルトの刀を受ける。

防御されても関係ない。

むしろ防御すれば無駄に痛みを味わうだけだ。

ハルトは髪を斬るような簡単な動作でミノタウロスの関節から先を切り落とす。

肉と、骨を絶つ感触に顔をしかめる。

やはり慣れない。

ぽとと腕が落ち、鮮血がハルトに飛び散る。

勢いのいい血が邪魔だったので一度距離を置く。

魂を操るのも疲れるので一度解くと、ミノタウロスは即座に距離

を置いた。

ハルトの不可視の拘束を警戒している。

確かに距離を離されればできなくなる。

だけど、関係ない。これは相手には見えないとしてもハルトには見える。

相手が距離を離して使う技は魔法。

「ぶろうっ！」

ミノタウロスは先がなくなった右腕をアッパーの要領で振り上げる。

すると、呼応するように風の音を鳴らしながら斬撃が迫るが、ハルトの前で霧散する。

ディバルタイガーの魂を使ったガードができるので、例えば距離を離されても問題はない。

ディバルタイガーの魂を破らない限りハルトにダメージを与えるのは不可能だ。

攻守ともに最強のこれだが、いつまでも悠長にしているわけにはいかない。

ハルトが始めて使ったときに一瞬で体力をもってかれたのを覚えているだろうか。

かなり体力使う。

全力で戦えるのは三分程度。

だいたい三分あれば狩れるので危機感を感じないけど。

「いくぞっ」

元タスプードのあるハルトだが、刀の力を解放されたことによりさらに強化された速さで繰り出した斬りこみをミノタウロスは腹筋でうける。

ミノタウロスは苦痛で顔を歪めながらも斧を振りぬく。

こいつ、相打ち覚悟で……。

飛び退いて避けると、避けた先に魔法を放ってくる。

ディバルタイガーで弾きながら、今度は攻撃に虎を使う。

先程同様の拘束。

これが成功したら首を刎ねて終了だ。

勝ちが目の前に迫り余裕の表情を浮かべていたハルトはミノタウロスへ虎をけしかける。

がしつとミノタウロスを掴む感触が伝わり、しとめるかと思っただら。

斧が回転しながら飛んでくる。

慌てて、虎を戻してガードする。

斧から一瞬重みが伝わり弾き返すのが億劫になったがなんとか軌道を逸らした。

「ぶもうつ！」

ミノタウロスは、ハルトへと左腕で殴りかってくる。

さらに、先のない右腕も殴打に参加する。

最初で最後とも言える猛攻。

両手からは常に斬撃が飛ばされ、迂闊に動くことはできない。

虎を防御から、攻撃に回して拘束するのに一瞬の時間が必要になる。

うまく、操って止められるか？

バックステップで退避しようにもミノタウロスとはリーチが違う。どんどん壁際に押し込まれていく。

「いい加減、うざいつ！」

ハルトの中で一番使い勝手のいい魔法『フレアライン』を発動さ

せる。

先程と違い細かく調整した鋭い業火がミノタウロスの足に辺り、止まることなく駆けぬけていく。

足を失ったミノタウロスは、バランスを保っていられるわけもなく無様に倒れる。

たぶん、ミノタウロスは負けることが分かっていたんだろう。

だから、さっきの体力を考えない猛攻に打ってでた。

そして今ミノタウロスはハルトの方へぶっ倒れてくる。

最後の攻撃。

ハルトはそれに答えるようにして、虎の魂を刀に乗せる。

鞘に納まっではないが、腰へと刀を動かして、居合いの構え。

集まっていく周囲の魔力を虎の魂が吸収していく。

魔力が集まっている刀は光がどんどん強くなる。

薄暗い広間を地上と同じように照らすハルトの刀を、

「はあっ！」

放つ。

虎により強化された剣から放たれた、周囲を飲み込む——居合い。風を切り裂き、支配しながら放たれた攻撃はミノタウロスの背に辺り、真っ二つに分かれる。

ハルトの両側にずしんと沈み、それきり音はなくなり沈黙が場に発生する。

戦いは終了した、ハルトの勝ちで。

刀を鞘に仕舞ったのと同時に全力疾走を何百メートルもしていたような疲労が襲い掛かってくる。

強かったな。

サウザンドウルフほどではないが、十分な好敵手だった。

今は既に粒子となって魔力になっているだろうミノタウロスを頭に思い浮かべる。

まさか、刀を抜かされる羽目になるとは。

本当に疲れるから多用したくないが相手が悪かったとハルトは割り切る。

そして次にやってきた喜びに手に力が入る。

仲間を守ることが出来た。

ハルトは、悦に浸っている。

やろうと思えば守れるんだな、俺にも。

今まで逃げてきた、背負うことの怖さ。力を持つことのプレッシャー。

それが消えることはないが、ある決心ができた。

逃げずに戦おう。

少なくとも目の前で困っている人たちを放っておくのはやめよう。力はあるのだから、出来る限りでいいから頑張ろう。

すべてを分からせてくれたミノタウロスに多大な感謝をしながら落とした素材を集めていく。

集め終わったらまだ少し残っている食品用のバックパックから食事を取りだして体力を回復する。

（これから先、もっと大変になりそうだな……）

イーティに何か言われるの覚悟しながらハルトは地上目指して、ダンジョンを上っていった。

22話 スクリーム

ダンジョンの入り口に戻ってきたハルトは夕暮れになりつつある日差しに目を細める。

長く薄暗い場所にいたせいか地上の光が目には痛い。

全力でダンジョンを上ってきたハルトはやや息切れが起きている。

だが、すぐにハルトは足を動かす。

先に戻っているはずのゼラルたちに追いつく気持ちで走る。

イーティ達が心配だったからだ。

ゼラルがついているから大丈夫だろうとハルトは思っていたが、それでも僅かな焦りが残っていた。

ハルトは頭の中の地図に従い早急に学園へ。

入り口にゼラルがいる。

視界に収めたハルトはブレーキをかける。

「ゼラル！ イーティは無事か！？」

咄嗟だったのでハルトはイーティのみ名前をあげる。

「ええ、問題ありませんよ。みなさん軽い怪我こそありますが、目だった怪我はありません」

いつもどおりの淡々としたゼラルの言葉が耳朵を打ち、ハルトは安心からか腰を下ろす。

「よかったあ……」

安心したら一気に疲れが襲ってきた。

ゼラルは座り込んだハルトに語りかける。

「それで、なんですが。今スクールさんが『スクリーム』がアジトと
している酒場に向かっ

てます」

「へえ、まだ向かってなかったんだな」

ハルトはすでに向かつてるもんだと考えていた。
ダンジョンにいた時間はかなり経っている何をしていたのだろう
か。

ゼラルがハルトの疑問に答えるように口を開く。

「『スクリーム』がどこを根城にしているのか掴めなくて探してい
たそうです。学園長の部屋に書置きがありました。私もこれからそ
のアジトへ向かうつもりですが、どうします？」

「どうします……って、俺についてくるかってこと？」

うわあ。敵の本拠地に潜入するのか。

ハルトは疲労と拒絶から顔を変に歪める。

（というかご老体のくせにスクールさんも頑張るな）

空を飛んでいたスクールを思い出す。

あの人なら問題なさそうだ。

「はい。もしも向うで戦闘なんて起こったら私みたいな雑魚では歯
がたちませんからねえ。あなたのような有用な人はいたほうがいい

んですよ。生贄に」

「それで行きたいと思う奴はいないと思うぜ？」

「大丈夫です。あなたは来ますよ」

くつくつとからかうように小さく笑う。

「いらん信用だな」

（この人やっぱ苦手だ）

ハルトはゼラルの性格が治ることを祈りながら呼吸を整える。

「どうつすかねえ。争いごと嫌いなんだよな」

「別に構いません」

「そりゃあんたには関係ないからな」

「とにかく、行きながら答えは出しといてください」

「それって意味ないだろ」

「もちろんです。行きますよ」

こ、こいつ。すでにゼラルの頭の中ではハルトは行くことになっているようだ。

勝手過ぎると心中でばやく。

色々愚痴は言っていたがハルトもついていくつもりだ。

一言スクリームにがつんと言ってやりたかった。

ゼラルの案内の元、『スクリーム』のアジトに向かう。

敵が根城にしている箇所はいくつかあるが、リーダーのスクリームがいる場所は酒場だ。

学園があるこの街に酒場なんていいのかとハルトは思ったが、この世界は地球とは違い酒は未成年でも飲める。

それが体にいいのか悪いのかは分からないがハルトは飲むつもりがないので深くは考えない。

武器や防具を売ってる店が立ち並ぶ道を抜けて、裏道のような場所へ入る。

建物により太陽が遮られ日陰が多い。ダンジョン内部を彷彿させる薄暗さだ。

あまり好んで歩きたくない場所だ。

さらに進んでいくと、また通りにでた。

そこから数歩でゼラルは足を止める。

「ここです。ここが『スクリーム』のアジトです」

『スクリーム』が運営していると言われる酒場に来た。

運営という言い方は間違っているが。

ここで酒を飲めるのは『スクリーム』のギルドメンバーだけ。身内同士で騒ぐだけの場所だ。

ここを中心に『スクリーム』は依頼を受けているのだから家みたいなものだと思う。

「なんか、嫌な感じだな」

ハルトは建物の雰囲気から眉にしわを作る。

あまり新しくない木造の建物。だが、腐ったような臭いが鼻につく。

あるだけで近所迷惑だ。

ちらと隣の建物を見るとそれなりの見栄えをしている。
隣と見比べるとこの酒場の悪さが目立つ。

「気持ちの問題ですよ、それは」

ゼラルはいつもどおり柔和な笑顔を携えている。

おまえ、その表情以外できるのか？

ハルトは口に出したら酷いことになりそうなことを考えていた。

ゼラルは普通に戸を押し開け、中に入る。

ハルトも続き、外からある程度想像できる世界が目の前にあった。
昼間なのに、太陽の光の恩恵を全く受け付けていない。

というか窓がない。半袖のハルトも蒸し暑く感じる熱気が部屋を
支配している。

代わりにある魔石の電球は消えたりついたり頼りなく光つてい
る。

酒場だけあってテーブルとイスが多く設置されている。

ざっと見ただけでも二十人ほどが、酒を飲んでいる。

ハルトは反射的に鼻を押さえる。

すごい酒臭い。嗅いでいるだけで酔っ払いそうだ。

窓がないので、空気の換気ができない。

男臭さと酒臭さ、最悪のマッチングだ。

酔っ払った男達の大多数がハルトたちには気づいていない。

入り口に近い数名の視線だけがこちらに向く。

見た目はどいつも小さい体つきだが、鋭く細められた瞳はあきら
かにこちらを威嚇している。

ゼラルは意に返さずに近くにある階段を上ろうとする。

「待、てよっ。何のようだあ……？」

階段に一步足を踏み入れた瞬間に顔を赤くした男が「ひつく」といいながら剣を抜く。

ふらふらと揺れる剣先が危ない。脅しのつもりでもうつかり刺さりそうだ。

ゼラルの近くに持っていていかれたそれをみてハルトは腰に手を伸ばす。

いつ戦闘が始まってもいいように準備をする。

相手は酔っ払っていて話ができるような状況ではない。

「私は『スクル』の副リーダーでゼラルと申します。先に来ているスクルさんに用があつてきたのですが……」

「ああ？ スクル？ ああ？ …… ああ？」

思考がうまく纏まらないらしく何度も疑問顔をする。

男が突然ふらふらしだしたら、そのまま後ろにぶつ倒れる。くかーくかーと寝息をたて始めた。

ゼラルはそちらを見ずに促す。

「行きましょうか」

ハルトは、絶対酒は飲み過ぎないぞと心に誓った。

階段を上って二階へいき、部屋の突き当たりに向かう。

そこがスクリームの部屋らしい。

ギルド『エスセリアレ』と造りは似ているが『スクリーム』は二階までしかない。

ここが本拠地じゃないのだからそこまでちゃんと作りはしないか。ドアノブをゼラルが捻り、中を確認。

そこにはすらつとしたイケメンとおじいちゃんがお茶を飲みながら話していた。

イケメンの男はただ座っているだけなのに圧倒的な存在感だ。たぶんこの人がスクリームなのだろう。

スクールと張り合えるレベルだ。

つか、なんでイケメンなんだよ。

むかつとするほどな男の顔たちにハルトは負けたと齒噛みする。

「ゼラルに、それにハルトくんも。そっちはどうだった？」

スクールがハルトたちに気づきお茶を置く。

ゼラルが前にでて、事務的にスクリームへ一礼する。

「モンスターは無事討伐しました。ダンジョン内にいた生徒も無事です。それと、事件を起こした二名の身柄を預かっています。ギルドカードを確認した結果、『スクリーム』の者だということも分かっています」

スクリームを睨む。

スクリームはそれを受けてどこ吹く風とばかりどっしり構えている。

「それで、スクリーム。どう落とし前をつけてくれるんだい？ さすがの僕もかんかんだ

よ？」

スクールが殺気を放つ。

びりびりと服を破るような威力の高い殺気にハルトは体が冷えていく。

（こ、この人。やっぱりかなり強いな）

スクリームはスクルの態度をみて深く頭を下げる。
下げた……？

「すまない。貴様らに迷惑をかけたことはわびよう」

殊勝な態度にスクルはより睨みを強くする。

「リーダーである君がすっかりしないから今回のようになったんだ。
それは分かっている

よね？」

「……分かった。落とし前をつけよう」

スクリームが部屋から出て行く。

それにしても、異世界の人間は顔がいいやつばっかだな。
街で歩いている人も基本美人だ。男の方は知らない。

ハルトが熟慮していると、スクリームが戻ってくる。

右手と左手に男三人を連れて。

スクリームは見た目どおりかなり力はあるようだ。

連れてこられた三人は昼間にハルトを襲ってきた奴らだ。

三人はそれぞれ手足を縛られ、口を縄でふさがれている。

ハルトの目の前を通る一瞬。

ハルトは恨みを込めてさりげなくデボツシュに蹴りを入れてやる。

「こいつらが、事件を起こした者たちだ」

ぽいっとゴミを捨てるように床へ投げる。

顔面が床と当たった三人はすぐさま首を左右に振る。

三人は涙を流しながら、ひたすら震えている。

「それが、どうしたんですか？」

スクルはいぶかしむような目つきでスクリームを射る。

スクリームはにやあと無愛想な顔に気味の悪い笑みを浮かべて。

「お前達を殺そう」

スクリームが放った言葉と同時に床に置かれていた三人の体が震えた。

23話 魔石強化人間

「スクリーム！」

スクルは反射的に魔法を放つがスクリームはそれを剣で振り払い、霧散させる。

圧巻な攻撃にも関わらずそれを防御するスクリームも強い。

「慌てるなよ、老いばれ」

スクリームは剣を元の位置に戻して、フライング気味のスクルを睨み笑う。

ハルトも慌てて刀に手を伸ばそうとするが、

「ぐあうっ！」

三人は突然立ち上がりその内の一人がハルトを殴る。

いきなりだったせいでハルトは反応することが出来ない。

吹き飛び、壁にぶつかる。

なんだ、今のは。

ハルトは痛む背を我慢しながら先程自分が立っていた近くでうめく存在がいる。

体の拘束を振り払い、叫ぶ存在はスクリームがつれてきた三人。いきなり膨れ上がった体を視認したスクルが

「なにをしたのかな、スクリーム？」

スクリームを殺さんばかりに見すえる。

「少し考えれば分かることだろう？ 一度貴様らは戦っているのだから」

スクリームの言葉にゼラルははっとした顔になる。
大きくなった異常なモンスター！

「まさか、魔石を食わせたのですか？」

ハルトもそれでゴブリンが口から魔石を吐いたのを思い出す。
そして、すべての原因が魔石にあると行き着く。

魔石には不可思議な点が多くすべてが解明されていない。

もしも、魔石自体に対象を強化する力があるとしたら。
それは中々に有力な仮説だ。

魔石がモンスターに力を与えているだろうことは容易に予想ができる。

「くつくつく正解だ。さて、どうする？ ここにいる男達はすでに体内に魔石がある。力は跳ね上がっているはずだ。まあ、適合はしていないようだからすぐに死ぬだろうがな」

スクリームは言いながらも体をずらす。
入り口の前に立ち、三人はスクリームを庇うように動く。

「さすがにこいつらで貴様らを殺せるとは思えないので逃げさせてもらうぞ」

その一言で戦いが始まる。同時に三人が突撃してくる。
ゼラルとスクールはそれぞれうまく回避する。

速い。一度戦ったことがあるハルトだが驚くほどにあがったスピ
ードは目を見張るほどだ。

ハルトは戦っている二人に加勢するために立ち上がり武器を構える。

ハルトが動いたのを理解した一体がそちらに向かおうとしたので、ゼラルは詠唱の不要な魔法を放ち牽制する。

「ハルトくん。スクリームを追ってくれ！」

スクルの叫びを受けて、ハルトは逡巡するが、仕方ないとばかりに飛び出す。

今この場で優先するのはスクリームの拘束だ。

「それでは、始めますか」

ハルトの背が見えなくなったのを確認して、ゼラルは腰から剣を抜き、構える。

欠片も隙がないゼラルの様子に三人は一瞬気圧される。

「スクールさん、魔法をお願いします」

ゼラルはそう言って、三人の注意を引くように魔法を放つ。

魔法は光の矢——シャインアローで詠唱はない。

飛んだ光は三本。一人一本が刺さり、血を撒き散らす。

だが、男達にひるんでいる様子はない。

もうすでに人間としての機能はない。魔石に操られているようなものだ。

三人は体が朽ちない限り止ることはないのだ。

理性が失われている三人は体から血を流しながらゼラルに掴みかかる。

右側から飛び掛ってきたのを剣で逸らして逆にいる男にぶつける。正面にいる男の顔面に社員アローを撃ち視界を封じた後に剣の腹

で叩く。

敵の攻撃はどれも突進のみで、読みやすい。

ゼラルは三対一だというのに全くダメージを喰らわない。

「ドラゴンブレスッ！」

スクルが唱えた魔法は彼が持つ中でも一番の強さを誇る代物だ。

まるでドラゴンが吐くような風の一撃により、デボツシュ以外の二人を巻き込み命を奪う。

酒場二階は陥落しそうなほどに傷つき、危険な状態に。

一応は建物が壊れないように制御したが被害は大きい。

デボツシュは本能からか大きく飛び退きぎりぎり回避していた。

「面倒ですね」

ゼラルは逃げた先に剣を投げる。

武器を捨てる本来ならアホな行動だが、ゼラルは速やかに詠唱を始める。

デボツシュは剣に気をとられて打ち落とすことに一瞬の隙をとられる。

一瞬で詠唱を済ませたゼラルは手を振る。

ゼラルの体から生まれた魔法はサンダーフォール。

相手を感じさせながら押しつぶす身動きを完全に封じる一撃にデボツシュの体がこげる。

建物が悲鳴をあげる。

このままでは、本当に壊れてしまう。

壊れること自体に問題はないが、中にいる二人は潰されてしまう。

サンダーフォールに飲まれたがまだ息のあるデボツシュ。

だが、傷は大きい。焦げた肉の臭いが散漫している。

ゼラルはダメージにより動きが緩慢なデボツシュへ駆けながら、

弾かれた剣を拾い刺突。

吸い込まれるようにデボツシュの心臓を貫く。
それが最後の一撃だった。

デボツシュはぐぼつと血とともに魔石を吐き出す。

ゼラルとスクールはそれを確認してすぐに建物から外へと逃げる。
いつ壊れてもおかしくない建物はふらふらとまだ立っている。
二人はすぐにスクリームを追おう周囲を見回す。

かんかんかんかん！

街中に響き渡る鐘の音。

スクールとゼラルは鐘の音を聞き首を捻る。

「緊急の鐘？」

スクールは空に飛び上がる。

ゼラルは顎に手を送る。

「大変だ……！」

スクールは空から外の状況を確認して声をあげる。

「どうしたんですか？」

「モンスターが街を攻めている！」

スクールの視線の先には、大量の大きなモンスターがいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0757y/>

地球に戻るためにまずは異世界を

2011年11月4日06時13分発行